

靖國神社年越し詣で

回を重ねて今年連続4回目の靖國神社年越し詣である。今年漸く寿齡(傘寿・優老賜杖)の仲間入りをした筆者であるが、靖國神社への思いは年ごとに高まり、この年越し詣でも、回を重ね

ねるごとに、また来年も思うようになった。靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないかと。日本人の古里がそこにはある。国のため命を捧げ尽くした人々の英魂が、身分の如何を問わず、そこには鄭重に祀られている。

例年のとおり我が家では、大晦日の年越しそばは、自家製の手打ちと決めている。自家製といっても、我が陸士61期の仲間8名が、西多摩の山麓、檜原村の山林を開墾して栽培した、純粹の信州そばである。何と言っても流した汗の量だけ美味しさもまた格別である。大晦日の夜食は、家族一同揃って今年一年の無病息災を感謝し、そば焼酎で乾杯、香り立つそばの味を堪能し、身も心も程よく暖まったところでいよいよ出発。外はさすがに冷氣深々として身に沁みる。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊花の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大風と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。平成21年の靖國神社御創立百四十年記念事業の一つとして既に改修成った大手水舎の銅板屋根もラ



元旦午前零時の靖國神社拜殿前



靖國神社奉納大絵馬

の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にもどのように映っているのであらうか。

報 特 攻
平成21年2月

第78号

財団法人 特攻隊戦没者 慰霊平和祈念協会

〒105-0014 東京都港区芝 2-5-19TAビル

電話 03 (5730) 1016
FAX 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

靖國神社年越し詣で……………1
平成21年 年頭のご挨拶……………3
皇居参賀二題……………4
日本は侵略国家であつたのか……………7
中国共産党を見る……………12
ユタヤ難民を助けた日本人と八紘一字の精神……………19

目次

八紘一字と神道指令……………	20
平成20年度フイリピン慰霊巡拝旅行所見……………	21
水上特攻・肉弾艇「震洋」体験記①②③……………	23
第41回豫科練戦没者慰霊祭……………	37
平成20年度明野忠魂塔慰霊祭……………	39
碑は語る特攻隊⑩……………	40
碑は語る特攻隊⑪……………	43
陸軍挺進部隊銘々伝③……………	44
陸軍挺進部隊銘々伝④……………	47
川南護国神社創立の経緯……………	48
報告・能代八幡神社「特攻勇士之像」除幕式……………	50
理事長の交替等……………	51
事務局からの報告等……………	52

イトを受けて輝き、その前で庭燎(かがり火)奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿

が神々しく目に飛び込んでくる。一同肅々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は風も風いで絶好の暗夜、漆黒の空を背景に拝殿の葺が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊花の大御紋章が目に見え鮮やかである。正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けま



大晦日神門開扉直前

しておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、拍手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達を中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。

新年祝賀の拝殿掲示の明治天皇御製は「國民と おなじこころに いはふかなわが日の本の 年のはじめを」(明治四十二年)である。皇室と國民の一体感をお歌いになっておられる。誠に有難いことである。今年皇居参賀の折の今上陛下の年頭のお言葉もそうであった。喜びも悲しみも國民と共に分かち合おうとされる大御心の表れである。拝殿の右横には、例年の如く伊勢絵馬協賛会の安田織人氏から献上された



遊就館前 甘酒接待の行列

大絵馬が掲げられている。今年は己丑年、干支の丑に因んで大きな親子の牛が描かれている。また、参集殿の前には、全国約三百三十社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。靖國神社に寄せる、護國神社を始めとする全国の神社及び善良な國民の崇敬心の篤さを思わせる。

更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少年達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健康な姿に感動。このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。



全国神社奉納絵馬展

参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で「奉納新春刀剣展」を拝観する。刀剣、なかならず日本刀は、古来武士の魂とされ、武器としては勿論であるが、破邪の利剣とも言われて、正義、顕正の象徴とされ、神器としても尊崇されてきた。三種の神器の一つである天叢雲劍(後に草薙劍)は、その最たるものであろう。また、鎌倉時代の初め、後鳥羽院(上皇)(天皇御在位第

82代一一八三一一九八年、上皇御院政一一九八一一二一年)が各地の刀鍛冶の名工25名を召されて仙洞御所で太刀を打たせられ、御自らも焔刃(刀身に刀紋を付ける工程)を試みられ、完成した太刀の茎に十六重弁菊花紋を銘に代えて刻まれたこと、そして後に、この菊花紋が皇室(天皇家)の御紋章となったこと、また、後鳥羽院の作刀は「菊の御作」として今に伝えられていることは、周知のとおりであろう。

ところで、靖國神社の境内にも、かつては多くの刀匠を抱え、「靖國刀」と呼ばれる日本刀を鍛造する日本刀鍛錬會の鍛錬場があったことは余り知られていないので、境内奥の相撲場の南にある「行雲亭」(今は茶室に改造されている)の銘板からその由来を抜粋すると、次のとおりである。

「行雲亭は、陸軍省の建築課技師内藤太郎と柳井平八の設計により、昭和八年六月二十五日(財)日本刀鍛錬會の鍛錬所として竣工された建物である。昭和六十二年九月に五つの鍛冶場の全てが茶室に改装されたが、外観は当時のままの優美な姿を残しており、特に屋根上の吹抜けは、鍛錬場にみられる様式で、行雲亭本来の姿を物語っている。(財)日本刀鍛錬會は、明治維新とともに

に衰退の一途をたどった鍛刀界の復興、国民の愛刀心の向上、そして有事に際した軍刀の整備などを目的に発会。理事長には歴代の陸軍次官があたり、延べ十一名の刀匠と二十一名の先手からなる刀工集団を中心に組織され、終戦までの間、八一〇振に及ぶ良質な日本刀を製作し続けた。そこで製作された日本刀は「靖國刀」、刀匠達は「靖國刀匠」と呼ばれ、当初の靖廣・靖徳・

靖光をはじめ、陸軍大臣より「靖」の字を冠する匠銘を授与された。また、大正十五年頃には、日本古来のたたら製鉄は途絶え、日本刀の材料となる高品質の玉鋼の入手は困難な状態にあった。そこで、日本刀鍛錬會は、古代から良質の砂鉄を産出する島根県仁多郡横田町に「靖國鑪」を開設し、そこで生産された玉鋼は五十数トンに及んだ。終戦を迎え、日本刀の製作は一時禁

止されたが、昭和二十八年には再開。また、中断していた鑪操業も、昭和五十二年には、靖國鑪の技術を継承し作刀技術の保存を目的とする(財)日本美術刀剣保存協会が「日刀保たたら」として復活させた。そこで生産された良質な玉鋼は、日本刀の材料としてだけでなく、茶の湯の釜や東大寺仁王像修復などにも広く用いられている。」

(飯田正能記)

平成21年 年頭のご挨拶

会長 山本 卓眞



会員の皆様には、よい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今上陛下には、本年1月7日、御即位20年を迎えられました。国民均しく奉祝致したいと思えます。

昨年9月、福田首相が退陣し、麻生内閣が発足しました。一昨年7月のサブプライムローンから始まった

米国の金融経済の破綻は、昨年には更に拡大深刻化して实体经济にも及び、米国の自動車産業の救済が政策論争の対象となり、百年に一度の経済不況と言われています。米欧以外の諸国も大きな影響を受け、世界的な不況が進行中です。麻生政権と国会は、国内の経済対策に忙殺され、与野党の政争も加わって内向きとなっています。

一方、米国の相対的地位低下は、経済不況とも相俟って、その一極支配構造に変化を起し始めています。北朝鮮の核保有、米国によるテロ国家指定解除に加え、中国の東シナ海、尖閣諸島での言動、長年の軍事力増強など、日本は正念場を迎えています。日米同盟だけに頼らず、自主防衛の気概と戦略を持ち、抑止の実力を整備すべきで

すが、残念ながら政官民共に危機意識は稀薄と言わざるを得ません。先ずは集団的自衛権を実行可能とし、次いで憲法の改正を目指すと共に諸法規の整備を急ぐべきでしょう。現在、本来なら増やすべき防衛費が削減されています。日本の防衛費はGDP比率1%弱で、周辺国からの脅威の無い英仏独と較べても異常に少なく、米国からも増額の注文をつけられている有様です。

政治家はよく「不戦の誓い」を口にしますが、孫子の兵法には「戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」とあります。口先の誓いよりは、自主防衛の供えが重要です。

かつての特別攻撃隊を始めとする多くの英霊が、正に命を懸けて護って下さった、日本の平和安全を全うするた

め、私たちは機会を捉え、声を合わせて日本の防衛強化、健全化を社会に呼び掛けるべきでしょう。次に、当財団は、法律改定に伴い、新公益法人となるべく準備中です。目的や事業はほぼ現在と同じですが、評議員、理事の選定、運営はかなり変わります。別途会報などでお知らせしますが、予め御承知おきください。

当協会の会員数は、皆様の御協力により昨年度百十名の入会がありました。しかし、昨年末で二千七百五十名となり、高齢化に伴い、一昨年より二百二十名の減少となりました。特攻隊戦没者の慰霊顕彰をできるだけ盛大に続けたい、皆様の会員増強への更なる御協力をお願い致します。

皇居参賀二題

暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。いずれも好天に恵まれて前年よりも多くの人々が訪れた。

天皇陛下は12月23日、75歳の誕生日を迎えられた。明けて1月7日には、御即位（昭和64年1月7日、昭和天皇の御崩御直後に踐祚して第一二五代の皇位を継がれ、平成と年号が改まって同元年11月12日、皇居において即位の大礼が行われた）から20年を、また、4月10日には、御成婚（昭和34年4月10日）から50年の、いわゆる金婚式を迎えられるという節目の年となった。慶賀の重なる年として国民挙って御祝



皇居・東御苑を散策される天皇・皇后両陛下



結婚の儀を終え、馬車でパレードされる両陛下

福申し上げなければならぬ年である。

既に、平成20年12月19日には、日本会議を中心とした奉祝委員会による「天皇陛下御即位二十年奉祝中央式典」が、東京ドームシティの大ホール二箇所に四千名の参列者を集めて盛大に挙行され、麻生太郎総理ほか、政・官・民各界の代表者や若いオリンピック代表選手まで交々祝辞を述べたが、特に天皇・皇后両陛下が被災地住民の慰問激励や身体障害者の福祉、戦没者の慰霊等に心を砕かれる、真摯なお姿に感動した感謝の言葉が多く聞かれ、誠に感銘深い式典であった。これから平成21年11月12日開催予定の政府主催奉祝式典に向けて、様々な祝典が執り行われることであろう。

天皇陛下は、平成20年12月23日、宮

内庁を通じて今年一年の御感想を発表されたが、その中で陛下は御自身の御体調について「ひとところに比べて良くなってきたように感じています」とされ、今後の御公務について「医師の注意を守り、これからも国と国民のため、また、より良き皇室の姿を求めて務めていきたい」とのお考えを示された。また、景気の悪化に伴う深刻な雇用

の問題にも触れられ、「働きたい人々が働く機会を持ち得ないという事態に心が痛みます。国民の英知を結集し、互いに絆を大切にして助け合うことにより、この度の困難を乗り越えることを切に願っています」との思いを綴られた。如何なる政・官・財各界代表者の言よりも、陛下のお言葉は誠実味と恩愛の情に溢れ、有り難く身に沁み思いがする。

天皇・皇后両陛下が平成20年にお詠みになられた御歌（宮内庁発表）
天皇陛下御製（5首）

（皇居東御苑）

江戸の入味ひしならむ果物の

苗木植えけり江戸城跡に

（日本ブラジル交流年・日本人ブラ

ジル移住百周年にちなみ群馬県を御訪問）

父祖の国に働くブラジルの人々の幸を願ひて群馬県訪ふ

（岩手・宮城内陸地震）

災害に行方不明者の増しゆくを心痛みつつ北秋田に聞く

（中越地震被災地を訪れて）

ないにより避難せし牛もどり来て

角突き技見るはうれしき

（正倉院事務所修補室）

宝物の元の姿を求めむと

ちりを調ぶるいたづき思ふ

皇后陛下御歌（3首）

（北京オリンピック）

たはやすく勝利の言葉いえずして

「なんもいへぬ」と言ふを肯ふ

（旧山古志村を訪ねて）

かの禍ゆ四年を経たる山古志に

牛らは直く角を合はせる

（正倉院）

封じられた開かれてみ宝の

代代守られて来しが嬉しき

○天皇誕生日参賀

12月23日、この日の朝は、昨夜来の激しい風雨も嘘のように晴れ上がり、正に天皇晴れ、小春日和を思わせる暖気に包まれて、参賀の人々の出足も良



天皇誕生日の一般参賀で
手を振られる天皇・皇后両陛下

く、10時前には宮殿・長和殿前の広場は八千人を超える参賀の人波で埋まった。若い人々が多く、外国人もかなり多い。この日に合わせた色々なツアーも組まれているようだ。常磐の緑に囲まれた皇居周辺の素晴らしい環境、景観といい、連綿と続く皇室を中心に栄えてきた日本の歴史、伝統文化といい、日本人の心といい、外国人の目にどのように映っているのだろうか。中には、サンタの格好で訪れた2人組も見受けられたが、意外に妙な風情で日の丸の小旗を打ち振っていた。

やがて10時20分、第1回の御出御。第1回は天皇・皇后両陛下、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下の天皇御一家御六方のみであった。宮殿ベランダに御出御と同時に日の丸の小旗が打ち振られ、万歳の声が一しきり湧

き上がる。遠目ながら、天皇陛下は思いの外お元気そうにお見受けし、先ずは安堵した。

そして、陛下は「先ごろ健康に不調を来し、皆さんに心配をかけたりましたが、次第に快復していくものと思います。厳しい経済情勢の中にあつて、多くの困難に直面し、厳しい年の瀬を迎えている人も多いのではないかと案じています。来る年が、少しでも良い年となるよう、また、皆が健康を大切にしてい、健やかに新年を迎えられるよう願っています」とのお言葉を賜った。御自身の健康よりも、絶えず国民の健康と幸せを願っておられる陛下のお気持ちがあり難く、思わず目頭が熱くなる思いであった。

この日の一般参賀者は、平成元年以来最も多く、午前中3回で2万2655人に達したとのことである。

参賀を終え、北の丸公園を経て靖國神社へ向かう。この日は、極東国際軍事裁判(いわゆる東京裁判)で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された(昭和23年11月12日)七士の方々(土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎)が、巢鴨拘置所において処刑された日(昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分)から60年(61回忌)

の命日でもある。折しも靖國神社遊就館2階の第2映像ホールで「南京の真実」第一部「七人の死刑囚」が上映されてきた。映画「南京の真実」製作委員会(株)チャンネル桜エンタテインメント他)の製作になるものである。巢鴨拘置所での七士の最後の姿、心情、処刑の場面等は、花山信勝師(昭和21

書の場面には深い感銘を受けたので、その一部を摘録する。

年2月から約3年、巢鴨拘置所の戦犯教戒師を委嘱され、A、B、C級の多くの人たちの教戒に、ただ一人で当たり、A級七士の処刑に立ち会った唯一の日本人。宗林寺住職、大正13年東大大学院(哲学科)修了後、2年間英、独、仏に留学、印度仏蹟踏査、日大、洋大、國學院大、東京文理大、九大、東大各講師及び教授を歴任して昭和14年東大助教授、同21年同教授、同34年定年退官、文学博士、東大教授退官後、浄土真宗本願寺派から派遣されて北米開教区開教総長に任命、約10年滞在。著書は聖徳太子の研究を中心に日本仏教など多数。平成7年3月没、享年96歳)著『平和の発見―巢鴨の生と死の記録』(08年8月15日発行、株方丈堂出版(昭和24年百華苑刊行『平和の発見』の新装復刊)に拠るものと思われ、同著に書かれた処刑前の七士の姿、心境等を忠実に表現しており、強く胸に迫るものがある。中でも松井石根大将の遺

「昨二十一日夜、マッカーサー元帥の命令により、明二十三日午前零時当監獄内において絞首刑執行の旨、宣告せらる。かねて期せしところなれば、何ら驚くところなく、謹聴せり。

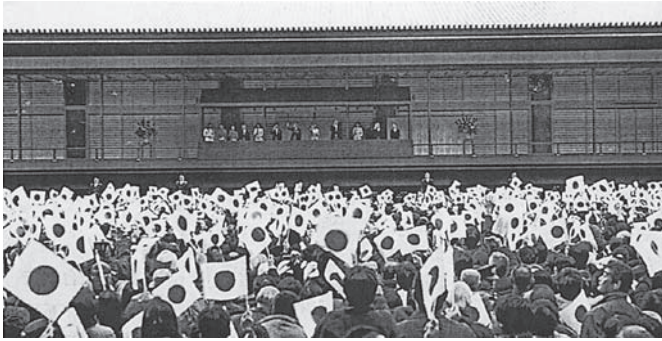
(中略)今南京虐殺事件の犠牲となり、この責任を負って連合軍の処刑に付せられる。いわんや余は先に上海、南京の戦いに多数の日華両国軍民を失いしものなれば、その責任上、あま多の英霊のあとを追って殉ずることは当然なり。太平洋戦争は直接余の責任の外にあれども、これまた日華事変の延長と見るべく、余の地位、経歴上責任を免がるべきに非ず。今や敗戦日本の醜態を暴露せることに關し、責任を自覚し、一死、謝することは、又自然なりというべし。顧みて思えば、余はこの度の死に關し、毫も未練あることなく、これを天地神仏に対しても罪を恥ずることなし。ただ多年心と身を賭して志したる日華の提携とアジアの復興をとげず、却ってわが国家百年の基を動揺せしめたことは遺憾の極みにして、余の心霊は永く伊豆山の「興亜観音山」にとどまり、一心「観音経」に精進し、興亜の大業を奮守すべし。(中略)伊豆山の「興亜観音堂」は現在の

奉養会の外に、内外有志にはかりて一講社を設立して、永久に供養に辦せむことを希望す。(中略)

天地も人もうらみず一すじに
無畏を念じて安らげく逝く
いきにえに尽くる命は惜しかれど
国に捧げて残りし身なれば

世の人に残さばやと思ふ言の葉は
自他平等に誠の心
(後略)

願みれば、昭和23年の12月23日は、当時の皇太子明仁親王殿下の御誕生日



新年一般参賀

であったが、その日宮中でも祝賀の行事は行われなかった。昭和天皇は、東京裁判でA級戦犯25名の被告人に対する判決の出た11月12日も、7名の被告人が処刑された日も大変御心痛の御様子であり、その年の御巡幸は中止されている。また当時の宮内府(昭和24年6月1日宮内庁となる)長官(昭和23年6月〜同28年12月)田島道治氏(後ソニー(株)取締役会長等歴任)は、侍従達と諮って「謝罪詔勅草稿」まで用意したのではないかと言われており、その草稿が発見されたとして、ノンフィクション作家の加藤恭子著『昭和天皇「謝罪詔勅草稿」の発見』(03年文藝春秋社発行)や同じ著者の『昭和天皇と田島道治と吉田茂』(06年人文書館発行)に詳しく取り上げられている。

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、一点の雲もない日本晴れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日でもあって、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をした後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入

り、鉄橋(二重橋)を渡って宮殿・長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約30分、検問所から正門石橋前まで約30分、そこから更に広場まで約30分と約1時間半を要したため、第1回の御出御に間に合わず、11時頃の第2回の御出御を待つこと約30分、辛抱の2時間であった。およそ2万人を収容できるという長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々で忽ち一杯になった。やはり若者が圧倒的に多く、華やかな気分満ちている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。かつて昭和30年代頃には、数十名の芸者衆が着飾って団体で参賀に訪れ、目を瞠つたこともあったが、今や和服姿のほとんど見当たらないのは、少し寂しい思いがする。

やがて11時、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下、常陸宮・同妃両殿下、三笠宮・同妃両殿下、高殿宮妃殿下・同承子女王殿下・同典子女王殿下の十三方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上がります。両陛下と皇族方が手

を振ってこれに応えられた。天皇陛下からは「年頭に当たり、皆さんと共に新年を祝うことができたことを喜ばしく思います。厳しい経済情勢の中で苦勞の多い新年を迎えている人々が多いのではないかと案じています。今年が国民にとって少しでも良い年になるよう願っています」とのお言葉を賜った。過重な御公務の中にあつて絶えず国民の上に思いを致される誠実で優しい陛下の大御心に感動させられた。

今年一般参賀での両陛下と皇族方の御出御は、天皇陛下の御体調に配慮し、これまでの7回から午前3回、午後2回の計5回に減らされたが、それでも参賀者は7万5790人に達したという。

身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで広場を去り、富士見櫓、旧百人番所を経て本丸入口から東御苑に入れば、こども塵一つ、落ち葉一つ無く綺麗に掃き清められ、一層清々しい気持ちにさせられた。

今年開催される御即位二十年奉祝式典や御成婚五十周年の祝賀行事が盛大に行われるよう願ってやまない。そして、伝統と誇りのある国づくりへ国民の力を結集したいものである。

(飯田正能記)

日本は

侵略国家であったのか

前防衛省航空幕僚長・空将

田母神 俊雄

「編注・本稿は、ホテル・マンション経営アパグループの「真の近現代史観・論文顕彰制度」に基づいて同事務局が募集した懸賞論文に応募し、最優秀作品に選ばれて平成20年10月【最優秀・藤誠志賞】を受賞した前防衛省航空幕僚長・空将田母神俊雄氏の論文であるが、同事務局及び田母神氏の了承を得て転載させていただいた。

同事務局では、「報道されない近現代史」の出版を記念して歴史論文顕彰制度を創設し、一般からの論文を募集したもので、全国からの応募作品235点のうち受賞作品13点を和文・英文で一冊の本にして発売予定とのことである（12月8日、全国のアパホテルなどにて、定価1000円）。

「真の近現代史観」懸賞論文事務局
〒107-0005 東京都港区赤坂
3-2-3
FAX 03-5570-2138

なお、マスコミの報道等で周知のことと思われるが、田母神氏は、この論文において、昭和の戦争などに関する

政府見解（過去の植民地支配と侵略への「深い反省」を表明した当時の村山総理談話）と異なる見解の論文を投稿したとして空幕長を解任され、11月3日付けで定年退職となった。また、参議院外交防衛委員会では、11月11日前、田母神氏を参考人として招致し、質疑を行った。主な質疑の内容は、次のとおりである。



参考人 前航空幕僚長 田母神俊雄氏（左）と参議院外交防衛委員会委員 浅尾慶一郎氏（右）

浅尾慶一郎氏（民主） 懸賞論文は自衛隊の誰に紹介したか。

田母神氏 航空幕僚監部の教育課長に「こういうものがある」と紹介した。指示をしたのではないかと言われたが、指示をすれば多分90とか70なんぼという数ではなく、1千を超える数が集まると思う。

浅尾氏 「鵬友」（隊内誌）昨年5月号に同趣旨の意見を発表している。寄稿の際に内局から注意はあったか。

田母神氏 なかった。
浅尾氏 航空幕僚長を解任された感

想は。

田母神氏 村山談話と異なる見解を表明したことで更迭されたということだが、シビリアンコントロール（文民統制）の観点から、防衛相が「見解の相違がある」と判断されて解任するのは政治的に当然だろうと思う。私の書いたものはいささかも間違っているとは思っていないし、日本が正しい方向に行くために必要なことだと思っ

る。
浜田昌良氏（公明） 良心の痛みを感じないか。

田母神氏 論文を書いて出すのに大臣の許可を得ている先進国は多分ない。言論統制が徹底した自衛隊にすべきではない。政府見解で言論を統制するのはおかしい。

浅尾氏 （隊内誌に寄稿した）1年前は問題にならなかったことをどう理解するか。

田母神氏 今回は多くの人の目につき、マスコミ等で騒がれたからだと思う。

犬塚直史氏（民主） 航空幕僚副長が、「辞職をするか、懲戒手続の審理辞退の意思表示をしてくれ」と言ってきたことをどう感じたか。

田母神氏 自衛官も言論の自由が認められているはずだから、言論の自由

を村山談話によって制約されることはないと思っていた。副長には、「どこが悪かったのか審理してもらった方が問題の所在がはっきりする」と申し上げた。

浅尾氏 論文で集团的自衛権や武器使用について政府解釈と異なっていることを言っているが、政府解釈を変えた方がいい、憲法を変えた方がいいと思っ

た方がいいのか。
田母神氏 一般に話されているようなことをまとめて書いて、日本の状況はこうなっていると云っただけだ。今もう改正すべきだと思っ

ている。国を守ることにっいて、これほど意見が割れるようなものは直した方がいいと思う。
（本論文は、懸賞論文受賞作品として平成20年11月11日（火）の産経新聞に「意見広告」として掲載された。）

◇ ◇ ◇
アメリカ合衆国軍隊は日米安全保障条約により日本国内に駐留している。

これをアメリカによる日本侵略とは言わない。二国間で合意された条約に基づいているからである。我が国は戦前中国大陸や朝鮮半島を侵略したと言われるが、実は日本軍のこれらの国に対する駐留も条約に基づいたものであることは意外に知られていない。日本は

一九世紀の後半以降、朝鮮半島や中国大陸に軍を進めることになるが相手国の了承を得ないで一方的に軍を進めたことはない。現在の中国政府から「日本の侵略」を執拗に追求されるが、我が国は日清戦争、日露戦争などによって国際法上合法的に中国大陸に權益を得て、これを守るために条約等に基づいて軍を配置したのである。これに対し、圧力をかけて条約を無理矢理締結させたのだから条約そのものが無効だと言う人もいるが、昔も今も多少の圧力を伴わない条約など存在したことがない。

この日本軍に対し蒋介石国民党は頻りにテロ行為を繰り返す。邦人に対する大規模な暴行、惨殺事件も繰り返して発生する。これは現在日本に存在する米軍の横田基地や横須賀基地などに自衛隊が攻撃を仕掛け、米国軍人及び家族などを暴行、惨殺するようなものもあり、とても許容できるものではない。これに対し日本政府は辛抱強く和平を追求するが、その都度蒋介石に裏切られるのである。実は蒋介石はコミンテルンに動かされていた。一九三六年の第二次国共合作によりコミンテルンの手先である毛沢東共産党のゲリラが国民党内に多数入り込んでいた。コミンテルンの目的は日本軍と国民党を戦わ

せ、両者を疲弊させ、最終的に毛沢東共産党に中国大陸を支配させることであつた。我が国は国民党の度重なる挑発について我慢しきれなくなつて一九三七年八月一日、日本の近衛文磨内閣は「支那軍の暴戾を膺懲し以つて南京政府の反省を促す為、今や断乎たる措置をとる」という声明を発表した。我が国は蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者なのである。

一九二八年の張作霖列車爆破事件も関東軍の仕業であると長い間言われてきたが、近年ではソ連情報機関の資料が発掘され、少なくとも日本軍がやったとは断定できなくなった。「マオ(誰も知らなかった毛沢東(ユン・チアン、講談社)」、「黄文雄の大東亜戦争肯定論(黄文雄、ワック出版)」及び「日本よ、「歴史力」を磨け(櫻井よしこ編、文藝春秋)」などによると、最近ではコミンテルンの仕業という説が極めて有力になつてきている。日中戦争の開始直前の一九三七年七月七日の蘆溝橋についても、これまで日本の中国侵略の証みだに言われてきた。しかし今では、東京裁判の最中に中国共産党の劉少奇が西側の記者との記者会見で「蘆溝橋の仕掛け人は中国共産党で、現地指揮官はこの俺だった」と証言していたことがわかっている。「大東亜開

放戦争(岩間弘、岩間書店)」。もし日本が侵略国家であつたというのならば、当時の列強といわれる国で侵略国家でなかった国はどこかと問いたい。よその国がやったから日本もやっつていという事にはならないが、日本だけが侵略国家だといわれる筋合いもない。

我が国は満州も朝鮮半島も台湾も日本本土と同じように開発しようとした。当時列強といわれる国の中で植民地の内地化を図ろうとした国は日本のみである。我が国は他国との比較で言えば極めて穏健な植民地統治をしたのである。満州帝国は、成立当初の一九三二年一月には三千万人の人口であつたが、毎年一〇〇万人以上も人口が増え続け、一九四五年の終戦時には五千万人に増加していたのである。満州の人口は何故爆発的に増えたのか。それは満州が豊かで治安が良かったからである。侵略といわれるような行爲が行われるところに人が集まるわけがない。農業以外にほとんど産業がなかった満州の荒野は、わずか五年の間に日本政府によって活力ある工業国家に生まれ変わった。朝鮮半島も日本統治下の三十五年間で一千三百万人の人口が二千五百万人と約二倍に増えている。「朝鮮総督府統計年鑑」。日本統

治下の朝鮮も豊かで治安が良かった証拠である。戦後の日本においては、満州や朝鮮半島の平和な暮らしが日本軍によって破壊されたかのように言われている。しかし実際には日本政府と日本軍の努力によって、現地の人々はそれまでの圧政から解放され、また生活水準も格段に向上したのである。

我が国は満州や朝鮮半島や台湾に学校を多く造り現地人の教育に力を入れた。道路、発電所、水道など生活のインフラも数多く残している。また一九二四年には朝鮮に京城帝国大学、一九二八年には台湾に台北帝国大学を設立した。日本政府は明治維新以降九つの帝国大学を設立したが、京城帝国大学は六番目、台北帝国大学は七番目に造られた。その後八番目が一九三一年の大阪帝国大学、九番目が一九三九年の名古屋帝国大学という順序である。なんと日本政府は大阪や名古屋よりも先に朝鮮や台湾に帝国大学を造っているのだ。また日本政府は朝鮮人も中国人も陸軍士官学校への入校を認めた。戦後マニラの軍事裁判で死刑になつた朝鮮出身の洪思翊(ホンシヨク)という陸軍中将がいる。この人は陸軍士官学校二十六期生で、硫黄島で勇名をはせた栗林忠道中将と同期生である。朝鮮名そのまま帝国陸軍の中將に栄進した人

である。またその一期後輩には金錫源^{キムソクワン}大佐がいる。日中戦争の時、中国で大隊長であった。日本兵約一千名を率いて何百年も虐められ続けた元宗主国の中国軍を蹴散らした。その軍功著しいことにより天皇陛下の金賜勲章を頂いている。もちろん創氏改名などしていない。中国では蒋介石も日本の陸軍士官学校を卒業し新潟の高田の連隊で隊付き教育を受けている。一期後輩で、蒋介石の参謀の何応欽^{カウキチン}もいる。

李王朝の最後の殿下である李垠^{イウン}殿下も陸軍士官学校二十九期の卒業生である。李垠殿下は日本に対する人質のような形で十歳の時に日本に來られることになった。しかし日本政府は殿下を王族として丁寧に遇し、殿下は学習院で学んだあと陸軍士官学校をご卒業になった。陸軍では陸軍中将に榮進されご活躍された。この李垠殿下のお妃となられたのが日本の梨本宮方子妃殿下である。この方は昭和天皇のお妃候補であった高貴なお方である。もし日本政府が李王朝を潰すつもりならこのような高貴な方を李垠殿下のもとに嫁がせることはなかったであろう。因みに宮内省はお二人のために一九三〇年に新居を建設した。現在の赤坂プリンスホテル別館である。また清朝最後の皇帝また満州帝国皇帝であった溥儀殿下

の弟君である溥傑殿下のもとに嫁がれたのは、日本の華族嵯峨家の嵯峨浩妃殿下である。

これを当時の列強といわれる国々との比較で考えてみると日本の満州や朝鮮や台湾に対する思い入れは、列強の植民地統治とは全く違っていることに気がつくであろう。イギリスがインドを占領したがインド人のために教育を与えることはなかった。インド人をイギリスの士官学校に入れることもなかった。もちろんイギリスの王室からインドに嫁がせることなど考えられない。これはオランダ、フランス、アメリカなどの国々でも同じことである。一方日本は第二次大戦前から五族協和を唱え、大和、朝鮮、漢、満州、蒙古の各民族が入り交じって仲良く暮らすことを夢に描いていた。人種差別が当然と考えられていた当時であつて画期的なことである。第一次大戦後のパリ講和会議において、日本が人種差別撤廃を条約に書き込むことを主張した際、イギリスやアメリカから一笑に付されたのである。現在の世界を見れば当時日本が主張していたとおりの世界になっている。

時間は遡るが、清国は一九〇〇年の義和団事件の事後処理を迫られ一九〇一年に我が国を含む十一カ国との間で

義和団最終議定書を締結した。その結果として我が国は清国に駐兵権を獲得し当初二千六百名の兵を置いた「蘆溝橋事件の研究（秦郁彦、東京大学出版会）」。また一九一五年には袁世凱政府との四カ月にわたる交渉の末、中国の言い分も入れて、いわゆる対華二十一箇条の要求について合意した。これを

上でも侵略にはほど遠い。幣原喜重郎外務大臣に象徴される対中融和外交こそが我が国の基本方針であり、それは今も昔も変わらない。

日本の中国侵略の始まりとか言う人がいるが、この要求が、列強の植民地支配が一般的な当時の国際常識に照らして、それほどおかしなものとは思われない。中国も一度は完全に承諾し批准した。しかし四年後の一九一九年、パリ講和会議に列席を許された中国が、アメリカの後押しで対華二十一箇条の要求に対する不満を述べることになる。それでもイギリスやフランスなどは日本の言い分を支持してくれたのである。「日本史から見た日本人・昭和編（渡辺昇一、祥伝社）」。また我が国は蒋介石国民党との間でも合意を得ずして軍を進めたことはない。常に中国側の承諾の下に軍を進めている。一九〇一年から置かれることになった北京の日本軍は、三十六年後の蘆溝橋事件の時さえ五千六百名にしかなかった。「蘆溝橋事件の研究（秦郁彦、東京大学出版会）」。このとき北京周辺には数十万の国民党軍が展開しており、形の

さて日本が中国大陸や朝鮮半島を侵略したために、遂に日米戦争に突入し三百万人もの犠牲者を出して敗戦を迎えることになった。日本は取り返しの付かない過ちを犯したという人がいる。しかしこれも今では、日本を戦争に引きずり込むために、アメリカによつて慎重に仕掛けられた罠であつたことが判明している。実はアメリカもコミンテルンに動かされていた。ヴェノナファイルというアメリカの公式文書がある。米国家安全保障局（NSA）のホームページに載っている。膨大な文書であるが、月刊「正論」平成十八年五月号に青山学院大学の福井助教授（当時）が内容をかいつまんで紹介してくれている。ヴェノナファイルとは、コミンテルンとアメリカにいたエージェントとの通信記録をまとめたものである。アメリカは一九四〇年から、一九四八年までの八年間これをモニターしていた。当時ソ連は一回限りの暗号書を使用していたためアメリカはこれを解読できなかった。そこでアメリカは、日米戦争の最中である一九四三年から解読作業を開始した。

そしてなんと三十七年もかかって、レーガン政権が出来る直前の一九八〇年に至って解読作業を終えたというから驚きである。しかし当時は冷戦の真っ只中であつたためにアメリカはこれを機密文書とした。その後冷戦が終了し一九九五年に機密が解除され一般に公開されることになった。これによれば一九三三年に生まれたアメリカのフランクリン・ルーズベルト政権の中には三百人のコミンテルンのスパイがいたという。その中で昇りつめたのは財務省ナンバー2の財務次官ハリリー・ホワイトであつた。ハリリー・ホワイトは日本に対する最後通牒ハル・ノートを書いた張本人であると言われている。彼はルーズベルト大統領の親友であるモーゲンソー財務長官を通じてルーズベルト大統領を動かす、我が国を日米戦争に追い込んでいく。当時ルーズベルトは共産主義の恐ろしさを認識していなかつた。彼はハリリー・ホワイトらを通じてコミンテルンの工作を受け、戦闘機一〇〇機からなるフライングタイガースを派遣するなど、日本と戦う蒋介石を、陰で強力に支援していた。真珠湾攻撃に先立つ一カ月半も前から中国大陸においてアメリカは日本に対し、隠密に航空攻撃を開始していたのである。

ルーズベルトは戦争をしないという公約で大統領になったため、日米戦争を開始するにはどうしても見かけ上日本に第一撃を引かせる必要があつた。日本はルーズベルトの仕掛けた罠にはまり真珠湾攻撃を執行することになる。さて日米戦争は避けることが出来たのだろうか。日本がアメリカの要求するハル・ノートを受け入れれば一時的にせよ日米戦争を避けることが出来たかもしれない。しかし一時的に戦争を避けることが出来たとしても、当時の弱肉強食の世界情勢を考えれば、アメリカから第二、第三の要求が出てきたであろうことは容易に想像がつく。結果として現在に生きる私たちは白人国家の植民地である日本で生活していた可能性が大である。文明の利器である自動車や洗濯機やパソコンなどは放っておけばいつかは誰かが造る。しかし人類の歴史の中で支配、被支配の關係は戦争によってのみ解決されてきた。強者が自ら譲歩することなどあり得ない。戦わない者は支配されることに甘んじなければならぬ。

は日露戦争、そして大東亜戦争を戦つた日本の力によるものである。もし日本があつた時大東亜戦争を戦わなければ、現在のような人種平等の世界が来るのがあと百年、二百年遅れていたかもしれない。そういう意味で私たちは日本の国のために戦つた先人、そして国のために尊い命を捧げた英霊に對し感謝しなければならぬ。そのお陰で今日私たちは平和で豊かな生活を営むことが出来るのだ。

一方で大東亜戦争を「あの愚劣な戦争」などという人がいる。戦争などしなくても今日の平和で豊かな社会が実現できたと思つてゐるのである。当時の我が国の指導者はみんな馬鹿だつたと言わんばかりである。やらなくてもいい戦争をやつて多くの日本国民の命を奪つた。亡くなつた人はみんな犬死だつたと言つてゐるようなものである。しかし人類の歴史を振り返ればこれはそう簡単ではないことが解る。現在においてさえ一度決定された国際關係を覆すことは極めて困難である。日米安保条約に基づきアメリカは日本の首都圏にも立派な基地を保有してゐる。これを日本が返してくれと言つてもそう簡単には返つてこない。ロシアとの關係でも北方四島は六十年以上不法に占拠されたままである。竹島も韓

国の実効支配が続いてゐる。東京裁判はあの戦争の責任を全て日本に押し付けようとしたものである。そしてそのマインドコントロールは戦後六十三年を経てもなお日本人を惑わせてゐる。日本の軍は強くなると必ず暴走し他国を侵略する。だから自衛隊はできるだけ動きにくいようにしておこうというものである。自衛隊は領域の警備も出来ない。集団的自衛権も行使出来ない、武器の使用も極めて制約が多い。また攻撃的兵器の保有も禁止されている。諸外国の軍と比べれば自衛隊は雁字搦めで身動きできないようになってゐる。このマインドコントロールから解放されない限り我が国を自らの力で守る体制がいつになつても完成しない。アメリカに守ってもらえない。アメリカに守ってもらえない。日本のアメリカ化が加速する。日本の経済も、金融も、商慣行も、雇用も、司法もアメリカのシステムに近づいていく。改革のオンパレードで我が国の伝統文化が壊されていく。日本ではいま文化大革命が進行中なのではないか。日本国民は二十年前と今とはどちらが心安らかに暮らしているのだろうか。日本は良い国に向かつてゐるのだろうか。私は日米同盟を否定してゐるわけではない。アジア地域の安定の

ためには良好な日米関係が必須である。但し日米関係は必要ときに助け合う良好な親子関係のようなものであることが望ましい。子供がいつまでも親に頼りきっているような関係は改善の必要があると思っている。

自分の国を自分で守る体制を整えることは、我が国に対する侵略を未然に抑止するとともに外交交渉の後ろ盾になる。諸外国では、ごく普通に理解されていることが我が国においては国民に理解が行き届かない。今なお大東亜戦争で我が国の侵略がアジア諸国に耐えがたい苦しみを与えたと思っいる人が多い。しかし私たちは多くのアジア諸国が大東亜戦争を肯定的に評価していることを認識しておく必要がある。タイで、ビルマで、インドで、シンガポールで、インドネシアで、大東亜戦争を戦った日本の評価は高いのだ。そして日本軍に直接接していた人たちの多くは日本軍に高い評価を与え、日本軍を直接見ていない人たちが日本軍の残虐行為を吹聴している場合が多いことも知っておかなければならない。日本軍の軍紀が他国に比較して如何に厳正であったか多くの外国人の証言もある。我が国が侵略国家だったなどというのは正に濡れ衣である。

日本というのは古い歴史と優れた伝

統を持つ素晴らしい国なのだ。私たちは日本人として我が国の歴史について誇りを持たなければならぬ。人は特別な思想を注入されないと限りは自分の生まれた故郷や自分の生まれた国を自然に愛するものである。日本の場合には歴史的事実を丹念に見ていくだけのことであることがわかる。嘘やねつ造は全く必要がない。個別事象に目を向ければ悪行と言われるものもあるだろう。それは現在の先進国の中でも暴行や殺人が起こると同じことである。私たちは輝かしい日本の歴史を取り戻さなければならぬ。歴史を抹殺された国家は衰退の一途を辿るのみである。以上

《編注・参考》

●『マオ』(MAO、ユン・チアン、ジョン・ハリデイ共著。邦訳は『マオ一年、講談社』毛沢東の伝記。中華人民共和国建国の「英雄」毛沢東神話を綿密な取材と研究によって打ち破り、残忍な独裁者としての実像を浮かび上がらせた書、のみならず、我が国にとって切実なのは、『GRU帝国』など機密資料に基づいてこれまでの昭和史の通説を根底から揺るがすような新発見、核心に触れた記

述が多いことである。例えば、張作霖爆殺がスターリンの命令を受けたナウム・エイティンゴンが計画し、日本軍の仕業に見せ掛けたものだったことや、中国共産党の秘密黨員であった張治中がスターリンの指令によって蒋介石の方針に反して、日中を全面戦争へ引き摺り込むべく第二次上海事変を引き起こしたことなどが記されている。

●『GRU帝国』(ImperiyagRU、アレキサンドル・コルバキディ、ドミトリー・プロコロフ共著、本邦未訳) GRUとは旧ソ連赤軍参謀本部情報総局のこと。リヒャルト・ゾルゲもこの情報工作員であった。そのGRUの未公開文書に基づいて、張作霖爆殺など数々の工作活動が明らかにされている(GRU文書そのものについては、ブーチン政権時代になってアクセスが難しくなりつつある)。

●『ヴェノナ文書』(VENONA) アメリカ陸軍省内の特殊情報部が、1943年以降、秘密裏に解読してきたソ連情報部暗号の解読内容を、1995年から公開、その文書を指す。解読作業はカーター・クラーク将軍が大統領にも秘密で始めたプロジェクトだったが、そこには、第二次大戦の戦前戦中、そして戦後、ア

メリカ政府の中枢に、如何に深くソ連の工作活動が浸透していたかが明かされている。例えば、ルーズベルト政権では、常勤スタッフだけでなく二百数十名、正規職員以外で三百人近くのソ連の工作員、あるいはスパイやエージェントがいたとされる。同文書はインターネットで誰でも閲覧できるが、本邦未訳。

●『マッカーシズム』第二次世界大戦後の1948年頃より1950年代前半にかけて行われたアメリカにおける共産黨員及びそのシンパ排除の動き、いわゆる「赤狩り」を指す。その推進者だった共和党右派のジョセフ・マッカーシー上院議員の名を取って名付けられた。告発された共産主義者達は、米政府や軍関係者、ハリウッドの芸能関係者、作家、更には、カナダ人、イギリス人、日本人などの外国人にまで及び、その影響は西側諸国全体に行き渡った。その反動も大きく、マッカーシーは激しい批判に晒されたが、マッカーシーが依拠していた『ヴェノナ文書』が近年公開されたことにより、その正しさが証明された。

(なお詳細は「特攻」74号19頁参照)

中国共産党を見る

軍校7期 西川 順芳

〔編注〕本稿は、旧満洲国軍の軍官・

文官等関係者の親睦団体である「蘭星会」と満洲国軍官学校（軍校）出身者の「同徳台同窓会」の合同機関誌『蘭星同徳』合併第9号に掲載されたもので、同会及び筆者の了承を得て転載させて頂いた。なお、筆者は満洲国軍官学校（新京）第7期生（陸士61期相当）であるが、戦後20数回も訪中し、地方農村の実状にも詳しく、軍官学校在校中の満系同期生との交流を通じて中国の内情にも明るい。

軍校7期生は、昭和19年12月、当年度の陸軍予科士官学校・陸軍經理学校予科等の受験生の中から選ばれて東京に集合のうえ渡満、新京軍官学校予科に入校した。入校当時、予科生徒は、日系2個連（中隊）、満系3個連の編成で、日系は375名であった。

8月9日ソ連参戦。当時の軍官学校校長は山田鉄二郎中将、生徒隊長は、薄傑皇弟であった。翌10日、軍事部命令により在校職員生徒をもって諸兵連合の部隊編制が行われた。歩兵7個連（本科満系2、予科満系3、予科日系

2）、砲兵隊（本科高射砲2門、野山砲各2門）、工兵本科1個小隊、輸送隊1隊（本科自動車20両）であった。次いで山田校長は、新京駐防地司令官となり、新京駐屯地の全満軍を指揮し、関東軍の指揮下に入り、その区

処を受けるよう命ぜられた。出動準備を整えた軍官学校生徒隊は、学校幹事伊達寿郎少将指揮の下、13日に学校を出発し、新京駐防地司令部（禁衛隊本部）を始め市内要地、軍事施設、主要道路等に展開、布陣して防備に当たった。そして、8月15日の終戦以後は、

在満各部隊と同様、ソ連軍により武装解除。次いで、病氣入院中の者その他若干の残留組を除く大多数は、不当にもソ連に強制抑留されて、シベリア奥

地、主として、イルクーツク、チタ、ブカチャーチャ地区で、鉱山採掘、森林伐採、鉄道建設等、極寒、劣悪の環境下での重労働に従事させられ、栄養失調や疫病により80数名の死没者を出し、昭和22、23年頃ようやく帰国することができた。その後、ソ連崩壊により、抑留死没者の遺骨収集が可能となるや、早速有志により数年をかけて埋

葬地の調査と遺骨収集を続けた結果、平成8年から平成10年の間に82柱の遺骨を収集して千島ヶ淵戦没者墓苑に納骨することができた。以来毎年欠かす

ことなく慰霊祭を実施している。しかしなお、シベリアのオルハで死亡した1名、北朝鮮に移送されて死亡した3名、満洲に残留して死亡した9名の遺骨は未帰還のままである。

◇ ◇ ◇

大方の皆様はご存じと思いますが、中国の1党独裁の仕組みから復習し、近未来を展望してみました。

（参考文献・伊藤正著「鄧小平秘録」、孔健著「ネクストエンペラー」他）

一 一党独裁の仕組み

中国にも建前上は立法、行政、司法の三権は存在する。しかしその上に共産党が君臨し、事実上他の三権は、共産党の強力な指導下に置かれている。1949年に中華人民共和国が建国し、形の上では西歐式の国家機構を整えたが、実際には三権全てを支配する強力な一党独裁体制が敷かれている。

二 中国の三権

○全国人民代表大会（全人代）

憲法に、「最高の国家権力機関」と規定されている。日本の国会に相当する立法機関。代表的な職権は憲法の修正、法律の制定、国家主席・副主席の選出、國務院総理及び國務院構成員の選出、国家中央軍事委員会主席及びその構成員の選出などを行う。

○全国人民政治協商會議（政協）

この組織は現在の全人代が1954年に組織されて「中華人民共和国憲法」が制定される以前に、その代わりをしていた組織である。その後も、言わば政策提案機関として存続している。全人代を日本の衆議院に例えるなら、政協は参議院（或いはアメリカの上院）のようなものということが言えるが、要するに様々な提案をするだけの機関であり、歴史的権威はあるが大きな実績はない。

○國務院

日本の内閣に相当し、最高国家権力の行政執行機関である。総理、副総理若干名、國務委員若干名、各部（日本の省に相当）の部長（大臣に相当）、各委員会主任（部を横断する調査機関）、秘書長などで構成される。國務院の下に日本の省に相当する各部がある。

○人民法院

日本の裁判所に相当する。

これで三権は揃っていることになる。

三 共産党委員会の支配網

しかし、日本と異なる中国の特長は、あらゆる公的組織に「共産党委員会（党委）」が設置されていて、党書記がその

組織の最高決定権を持つていることである。公的組織とは、中央官庁、地方行政機関、郵便局、税務署、国有銀行、教育機関、警察、メディア、各種社会団体などである。市役所(市人民政府)では、市長より市党書記が上位、学校では校長より校党書記の方が上位である。組織の長は、その組織の党書記の決定事項を執行する役割と思えば理解が早い。

党規によって党員が3名以上集まる組織では「支部」と呼ばれる末端組織が作られ、その上に「総支部」がある。各総支部を統括するのが、その組織に設置された「党委員会」である。

国家最高権力機関である全人代に選ばれた代表から構成されるが、彼らは各母体組織の党委による推薦が無ければ全人代入りは不可能である。したがって、日本の国会に相当する全人代のほとんど全ては(お飾りのな友党以外)共産党員であり、全人代会議は共産党が提示する法案などを、ただ承認するだけの会議である。

憲法上、全人代が様々な職権を持つているように見えても、結局は共産党の指導下で行使しているに過ぎない。中央官庁にも多数の党委員会があり、

行政機関である國務院も共産党の支配下にある。司法機関も同様で、中央政府、地方政府、市町村の隅々まで、共産党の支配網が張り巡らされている。

○共産党内部の構成

公表数字では全国の共産党員は7千万人を超えることされ、世界最大の政党である。一般党員から選ばれた代表、約2千人(最も最近開催された2007年10月の第17回党大会では2217名)が5年に1回開催される共産党全国大会に参加する。そこでさらに中央委員数百名(07年は委員202名、候補委員167名)を選ぶ。その中央委員会が中央政治委員(現在25名)を選出し、その中から政治局常務委員(現在9名)を選出する。この政治局常務委員会が事実上中国の最高意志決定機関であり、国家の心臓部であり、その頂点が「総書記」である。

○国家机关ポストの共産党エリート兼任

共産党中央委員数百名は、立法、行政、司法など全ての国家机关の重要ポストを兼任し、一党独裁を容易にし、堅持している。分かりやすいのは常務委員ナンバー1の胡錦濤が共産党のトップである総書記、国家のトップである国家主席、軍のトップである国家

中央軍事委員会主席を兼ねている。共産党ナンバー2の呉邦国は全人代常務委員長、ナンバー3の温家宝が國務総理(首相)を兼ね、ナンバー4の賈慶林は政治協商会議主席を兼ねている。

胡錦濤が総書記と兼務している国家主席は全人代で選ばれる。廃止されていた時期もあるポストであるが、対外的に中国を代表する憲法上の国家元首である。しかし中国内部では、共産党が国家を指導する制度になっているから、党の総書記の方が国家主席より上位である。

○人民解放軍

人民解放軍を統率する最高機関として「国家中央軍事委員会」があり、その主席は全人代によって選ばれることになっているが、実は共産党中央委員会が選出する「党中央軍事委員会」という組織があり、委員は「国家中央軍事委員会」とは全く同一メンバーである。全人代の選出を待つまでもなく、軍を統率する人選は党によって予め決定している。

四 派 閥

中国では常に激しい派閥闘争が繰り広げられてきた。日本の派閥とは異なり、会則などが整った正式な団体ではないが、出身校、地縁、職縁などを通

じて派閥が形成される。思想的に民主派、保守派と分類されることもある。現在の中国の大きな派閥は次の三つと云える。

- ① 共青团派(団派)
- ② 上海派
- ③ 太子党

1 共青团派(団派)

共産主義青年団(共青团)でのつながりを通じて形成された政治派閥である。共青团は1922年に結成された中国共産党の青年組織で、地方政府、軍、学校などの各部門ごとに共青团の組織があり、北京にある共青团中央委員会がその頂点である。共産主義の思想を学ぶかたわら、ボランティア活動などを行っている。

共青团は共産党幹部を目指すエリート養成機関になっていて、実力一本で上がってくる傾向が他の派閥より強い。胡錦濤はこの共青团出身であり、現在の中国において、中央、地方で共青团出身者の進出が著しい。若手として李克強、李源潮、劉延東などがいる。

2 上海派

上海派は江沢民前国家主席の影響が強い。江沢民が89年に総書記に就任して以来、自らの地盤である上海から子飼いの人物を次々に中央に抜擢し、上海派と呼ばれる派閥を形成した。曾慶紅、賈慶林、李長春、黃菊(07年死去)

などが代表とされる。

江沢民と曾慶紅の二人から始まった上海派で、上海財閥との深いつながりがあり、巨大な利権集団と化している。最近十数年、中国の政治を牛耳ってきた実績があり、06年以降の「上海大地震（上海を舞台にした巨額の汚職とその摘発事件）」で大打撃を受けたが今なお影響力は強い。

3 太子党

太子党とは、抗日戦争・内戦を経て中国人民共和国建国に関わった共産党幹部の子弟達のことである。日本の二世議員のようなもの。進学や就職に特別の便宜が図られている特権階級である。毛沢東の孫・毛新宇は政治協商委員に就任し、胡耀邦の息子と鄧小平の息子は政治協商会議の副主席になった。李鵬の娘の李小淋は中国国際電力公司主席になっている。政治協商会議だけでなく、劉少奇の子・劉源中などの息子らが人民解放軍の重要ポストに入っている。

五 新世代の登場

新中国の第1世代は毛沢東革命を成功させた時代であった。第2世代は鄧小平が改革開放を唱えて共産党を政権党に仕立てた時代であり、第3世代は江沢民が「先富論」を継承して突っ走

り一部の富者と多くの貧者を生んだ時代。第4世代は胡錦濤が共産党を機能する行政党に育てつつある時代と言える。

2007年10月、中国共産党第17回党大会が開催された。5年に1度の大会である。続いて中央委員会総会が開催された。

全国から集まった2千2百余名の代表大会（党大会）で中央委員会369名と中央規律検査委員会を選出し、中央委員会は党大会閉鎖中に中央委員会全体会議（中総会。今回は17期1中総会と呼称）を開き、政治局委員25名と政治局常務委員9名を選出した。

さらに、08年3月には第11期全国人民代表大会（全人代）が開催され、立法機関である全人代、行政機関である國務院、司法機関である最高人民法院及び最高人民檢察院、軍を統率する国家軍事委員会など、あらゆる政治部門の責任者の選出が行われた。

全人代会議の終盤でチベット騒乱が起きる波乱があったが、一連の最高会議で新指導部の体制が整った。国家主席は胡錦濤（67歳）、全人代代表は呉邦国（68歳）、國務総理は恩家宝（67歳）がそれぞれ再選され、後半の2期目に入った。

国家主席の任期は5年2期、統投し

て10年が限度である。共産党大会と全人代は世界から大きな注目を集めた。それは一つは江沢民の影響を排除して胡錦濤が腕を振るう後半5年の布陣。その布陣には当然、後任として引き継がせるべき後継者人事、第5世代政権への布石であった。

ポスト胡錦濤として最有力視されていたのは、胡錦濤書記と同じ共産主義青年団出身の後輩・遼寧省党委書記の李克強（54歳）であった。彼は胡錦濤の信任厚く若手ホープであり、政治局常務委員に選出されるのは確実と目されていた。そして事実、序列第7位で常務委員に選出された。

六 サプライズ人事

しかし、ここでサプライズが起きた。上海市党委書記の習近平（56歳）が序列第6位で常務委員入りしたのである。そして3月の全人代では国家副主席に選出された。これは5年後に国家主席になることを約束されたに等しい。一方、李克強は全人代で國務院第1副首相に選出された。将来の総理コースである。順当に言えば第5世代代は、習近平と李克強の2人で中国を引っ張っていくことになることを意味する。

しかし、そうでもないという見方も

ある。習近平が軍事副主席に選出されなかったのは何故か。

後半5年間の軍権は胡錦濤が握るのか。余り早くから軍の重要ポストに就けると、胡錦濤の軍権掌握力が分散する可能性があるからしばらく鍛えてから副主席にするのか、或いは習近平を次期国家主席に決めただけではなく、時間をかけて李克強との比較をしようということか。

以下、副主席に選ばれた習近平のプロフィールを記し、中国の近未来を展望する。

七 習近平のプロフィール

▽習近平の父

習近平の父・習仲勳は1913年に陝西省富平県で生まれ、28年に共産党に入った。当時陝西省の黨員では最年少であったが、陝西省紅北軍のリーダーとして抗日戦争で活躍した。45年の第7回党大会で中央候補委員、中央組織部長となる。さらに中央西北局書記を経て、50年、共産党宣伝部長となった。この役職は日本の官房長官に相当する。そして政務院副総理兼秘書長に就任した。

建国後間もない50年、毛沢東は「反革命分子鎮圧運動」と称する全国的大粛正を行った。1年で71万人が銃殺さ

れたという。習仲勳が西北局時代、毛沢東から「西北地域で反革命分子0.1%を処刑せよ」と指示されたが、彼は0.05%しか処分しなかった。

習仲勳の運命が反転し始めたのは62年であった。その年「劉志丹」という小説が出た。劉志丹は習仲勳の同志であり、毛沢東と対立した人物である。

劉志丹は既に亡くなっていたが生前の仲間が執筆材料を提供したのである。これが毛沢東の逆鱗に触れ、小説発刊に関わった人達を含めて反毛沢東の罪で逮捕された。習仲勳は62年から14年間、四人組が逮捕されるまで獄中生活（思想改造として洛陽鉞山機械工場で労働）を強いられた。

▽習近平出生

習仲勳の妻で習近平の母は43年、延安大学中学部の青年リーダーとして、革命協力のため綏徳地域にやって来た。そこで党書記をやっていた習仲勳と出会って結婚し、3男2女をもうけた。習近平は三男で53年6月、富平県で生まれた。

習近平は10歳になる前、父親が逮捕され、16歳の時、陝西省延安の僻地へ労働下放された。洞窟の中で馬と一緒に寝起きし、羊を飼い、農業に従事した。

74年1月に共産党に入党、やがて頭

角を見わして村の党支部の書記になった。文革当時、大学は一般に開放されておらず、労働者、農民、兵隊から選ばれた者が入学できた。習近平は75年に「労働兵大学生」として北京の清華大学工程化学学部に入った。彼は大学院まで進学し、人文社会研究生として法律を専攻し博士号を取得した。

1976年に四人組が逮捕され、習仲勳は名誉回復された。78年2月、政治協商会議特別代表として出席し、4月に特別書記として広東省に赴任した。旅に出る前、彼は胡耀邦の家を訪ね、別れの食事をしてから出掛けたという。この親しい関係が習仲勳と息子・習近平の未来に大きく関係している。

78年、鄧小平は「改革開放」路線を明確にし、広東省の深圳、福建省の廈門など、14箇所を経済特区に指定し、政策を先行させた。広東省書記を命ぜられた習仲勳は、改革開放の旗手として赴任したのである。

彼は赴任2年間で広東省発展の基礎を構築した。改革開放政策のトップは鄧小平、その下で実務を支えるのが胡耀邦、現地で実践するのが習仲勳という組み合わせであった。

80年11月に北京に戻った習仲勳は、全人代常務委員会副委員長、中央書記処書記、政治局委員に就任して大幹部

となった。改革開放が進む中で、82年以降、胡耀邦の政治姿勢に反発する共産党保守派の声が大きくなってきたが、習仲勳は怯まず胡耀邦を支えて闘い、鄧小平の力を使って陰謀を抑止し、胡耀邦と趙紫陽の2本柱の改革開放を断行しようと後押ししていた。

▽天安門事件

この時期、胡錦濤は胡耀邦に重用され、政治思想について師弟の関係にあった。習仲勳も民主志向が強く、改革開放と並行して法治国家を造るための法整備を行おうとしていた。鄧小平は古い幹部を取り込むため「顧問委員会」を設けたが、胡耀邦や習仲勳は、改革開放実行のためには「古い人間は要らない」と、顧問委員会を拒否していた。

86年12月、学生の民主化要求デモが起こって事態は急変した。彭真、王震、陳雲、薄一波などの重鎮が鄧小平の自宅に集まって胡耀邦失脚のクーデターを計画、開明的改革開放派の胡耀邦と保守派重鎮たちとの確執が頂点に達した。

結局、87年1月の長老会議で胡耀邦総書記の解任を決めた。習仲勳は、胡耀邦解任が非公式に決定されたことに異議を唱えたが無駄であった。鄧小平は勢いを増した保守派と妥協して胡耀

邦を切り捨てたのである。

習近平は、父の習仲勳と胡耀邦と鄧小平がどのように付き合っていたかを、どのよう

に闘ったかを、すべて見ている。胡耀邦失脚の後、彼の同志として改革開放路線を採る趙紫陽が総書記となった。胡耀邦は2年後の89年4月に心臓発作で亡くなった。これが「天安門事件」の発端となった。

胡耀邦再評価と民主化を要求する学生達の大規模なデモは、一般市民を巻き込んだ大衆運動に変貌していった。民主化を支持する趙紫陽は、武力鎮圧を主張する党長老の強硬派をなだめつつ学生らと交渉を続けたが、対話で大衆を天安門広場から解散させることが出来ず、孤立した。5月11日、前触れなく天安門広場に現れた趙紫陽はマイクを持つと、ハンストを続ける学生達に語りかけた。

「諸君、来るのが遅れて申し訳なかつた。君たちには将来がある。直ちにハンストをやめるように」と。

その時、趙紫陽の傍らには、当時、中央弁公庁で趙紫陽の秘書であった温家宝も立っていた。しかし、まだ発表されていなかったが、その数日前、既に趙紫陽の失脚は決まっていた。そして政治は大きく保守に逆戻りしていった。

▽地方勤務

習近平は79年に卒業し、國務院弁公庁で副総理兼国防部長秘書に就任。そして中央軍事委員会弁公庁にも出だし、中央政治の中枢、中南海の人となった。

82年には河北省正定県書記になって行政の苦勞を知った。

胡耀邦と保守派の葛藤が厳しくなった85年に福建省に赴任してから17年半の間、北京へ帰ることはなかった。32歳で廈門副市長、35歳で寧徳地区党書記、37歳で福州市党書記に、95年には42歳で福建省党副書記を務め、97年、鄧小平が亡くなった年に、ようやく共産党中央候補委員となった。

習近平の妻・彭麗媛とは2回目の結婚で、山東省の出身。86年、廈門副市長時代に知り合って結婚した。93年に長女が生まれている。山東省芸術学院を卒業した彭麗媛は、北京で試験を受けて人民解放軍に入り、軍所属の歌手になった。習近平と出会った時は既に人気歌手で、旧正月の歌番組（日本の紅白歌合戦）の常連になっていた。もちろん、現在は歌手活動はやめている。

▽胡耀邦と胡錦濤の関係

先にも少し触れたが、胡耀邦は胡錦濤の政治上の父であり師であり恩人である。胡耀邦はいつも胡錦濤を目にか

けていた。胡錦濤が貴州省党書記の時、

胡耀邦は2度も胡錦濤を訪ねている。84年、胡耀邦総書記が盟友の中曽根首相とで実現した日本青年3千人を建国35周年記念に招待した時、胡錦濤は事務方トップとして奔走した。胡錦濤が対日政策で使う「対日新思考」という言葉は、胡耀邦が唱えた言葉と同じである。

中国には「一代朋友、三代親戚」という言葉がある。胡耀邦と胡錦濤、胡錦濤と習仲勳は思想的同志的に強い信頼関係で結ばれている。胡耀邦が習仲勳の息子の習近平について、胡錦濤に将来を頼んだとしても不思議ではない。

▽上海「大地震」

天安門事件で守旧派・保守派が勢力を盛り返して改革開放路線が反古にされ、江沢民政権は保守化しつつあった。91年、上海党委の機関誌「解放日報」に改革開放を促す論文が突然掲載された。明らかに鄧小平の意向を反映させたもので、引退した鄧小平が上海で改革開放推進のために上げた反撃の狼煙であった。この1年後鄧小平は「南巡講話」を発表し、公然と執行部批判を行うことになる。

これに乗じた上海の江沢民派は、独自の跳梁を極め、あたかも独立王国の

様相を呈していった。市長の陳良宇は公然と北京に反抗し、中央の統制を拒否していた。無法な経済至上主義が先鋭化し、構造的汚職が蔓延する都市に変じた。北京による「上海統制」の回復と上海経済の健全化が急務となっていた。

02年、江沢民から胡錦濤へ政権が交替した。06年から07年にかけて上海を舞台に大汚職事件が摘発され、上海派の物が次々に逮捕されて失脚した。これを「上海大地震」或いは「上海政変」という。

摘発を行ったのは、胡錦濤が北京から派遣した党規律検査委員会である。上海で腐敗汚職の限りを尽くす江沢民派に対し、胡錦濤らが乾坤一擲で仕掛けた政治闘争であった。

市長・陳良宇をはじめ上海財界の人物・周正毅や張栄坤達が逮捕された。08年4月、天津市第二級人民法院は陳良宇に対して、収賄、職権濫用などの罪で懲役18年、財産没収30万元の判決を言い渡した。陳の側近らには、執行猶予付き死刑、無期懲役などが確定した。

捜査が江沢民の長男・江綿恒の身辺にも迫るに及び、江沢民は遂に屈伏した。

▽上海浄化

上海大地震で悪の一派を摘発した上海を浄化する大役を、胡錦濤は習近平に託した。江沢民派の一掃と後始末である。

胡錦濤には共青团の後輩・李克強という同じ釜の飯を食い、苦勞を共にし、農業の河南省、工業の遼寧省の党委書記として経験を積ませてきたカードがあった。しかし、上海で李克強カードを使うのは余りにもストレートに過ぎ、共青团対江沢民上海派の派閥闘争になって強烈な抵抗が起こる恐れがあった。この点、習近平は一見、太子党であり、上海に地理的に近い浙江省党書記で勝手が分かるという判断があったのだろう。

江沢民時代に1度も上海に行かなかった胡錦濤は習近平を送り込み、07年だけでも3回も行っている。上海浄化で微妙な時期、後見人として習近平の手腕を観察していたのだろう。

▽上海改革

習近平の上海改革は多岐に及んだ。一つは汚職の撲滅であった。上海市党委書記に就任すると、共産党員に対して私生活に踏み込んだ「七つの不（べ）件にすると発表した。いかにも上海の党員の乱脈ぶりが推察できる内容であ

る。その「七つの不」とは、①ポルノを見ることを禁止、②ストリップ劇場に行くことを禁止、③ソープランドに行くことを禁止、④自分を核とする私的なクラブを作ることを禁止、⑤自分を核とする私的な酒宴を開くことを禁止、⑥下ネタを禁止、⑦愛人を持つことを禁止するというものであった。

習近平は江沢民時代に計画された諸事業の見直しを進めた。朱鎔基が推進していたリニアモーター計画を中止させた。新幹線を推していた胡錦濤の意向を受けたものであった。

習近平の行った大きな事業は、上海と浙江省と江蘇省とを併せて一つとし、「長江デルタ」として統合したことである。

これは上海が周辺地域と経済的相互依存を強めることを意味する。日本で言えば、大阪・神戸・京都を統合して「京阪神」とするようなものである。

上海派は10年前から「上海は香港に代ってアジアの金融センターになる」と宣言し、香港は反発していた。習近平は就任後、「香港と金融市場を争うつもりはない。取って代わる考えもない。中国全体の金融センターとしての役割は香港にお願いしたい。香港は既にアジアの重要な金融都市として存在

している。香港と競争する必要はない」と言明した。

江沢民らが持っていた「香港以上のデザインーランド誘致」「香港の株式市場を閉鎖させて上海にしよう」という構想も消滅させた。

習近平は胡錦濤の課した試験科目を優秀な成績でクリアした。習近平の一連の施策により、江沢民一派の夢は潰された。これが習近平の最大の実績である。

八 民主化の行方

ここまで今回の全人代で副主席に選出された新星・習近平のプロフィールを書いてきた。

それでは胡錦濤の5年とその後の中国の行方はどうなるか。

07年11月、日本の与党代表団が訪中した時、自民党政調会長・谷垣禎一、公明党の斎藤鉄夫などと習近平が会った。習近平が政治局常務委員になった直後に谷垣禎一に招待状を出して実現した会見で、胡錦濤の意向に従ったものである。習近平にとっては外交の初舞台とも言えるこの時、与党代表団と握手し、日中関係について、次世代を担うにたる風格を漂わせて「発展と改善の機が熟している。日中合作をもっと密接に」と述べた。

鄧小平は経済については改革開放派であったが、政治に関しては頑なに保守的であり、共産党独裁を守る立場を崩さなかった。

その鄧小平に指名されて総書記になつた胡錦濤は胡耀邦の薫陶も受け、内心は政治的民主化を目指しているだろうが、経済の改革開放は進められても、政治の民主化までは出来ない。総書記に指名した鄧小平の呪縛である。

総書記2期目に入つてあと5年、江沢民時代に生じた社会矛盾を調整し、党内勢力を調整して、束縛や呪縛の一切ない思想的同志的に信頼の置ける後継者に禅譲し、民主化を進ませることを考えていると思われる。

西欧型の完全な民主主義への移行は胡錦濤の頭の中にはあるだろうが、次期尚早だと考えているだろう。中国が抱えている問題は私には気が遠くなるほど多岐にわたる。

第一は「統率」である。中国人が共通に持つ特性というか、強権でタガを絞めておかないと自分本位の勝手な方向に動く性質がある。

第二は「人治」の社会である。法治社会への進歩には、それに要する個々の自覚が必要であるが、中国数千年の歴史は人治で支えられてきた。家族、親戚、近しい人を大切にすることはよ

いが依怙鼠眉になり、獮官や金銭利益追及に贈収賄は当然とする習慣が抜けない。「儲けるためには何でもあり」という観念を払拭するのは容易ではない。

第一と第二の困難克服には、各級指導者の自覚を求め、教育による大衆意識のレベル、モラル、社会秩序の向上が必要である。

第三は「貧富の差の縮小」。都市部と農村の格差は絶望的である。都市部でも2千万人を超える失業者がいる。03年、中国は食糧輸入国に転落した。農村問題は農業技術改善で生産性を向上し、需要の変化に沿った食糧自給を実現し、社会保障を正し、機会を均等に、富の配分を平均化すれば、農村は豊かになり、工業製品の内需拡大にも大きく寄与する。

第四は「環境問題の解決」。工場公害と自然破壊が激化している。中国全土を流れる川の水の80%は飲料用に使えない現状になっている。黄河は下流で干上がってしまった。

第五は「技術開発力」である。外国の資本と技術に依存する世界の工場から、自己開発による優秀な製品を世界に供給出来る技術開発力養成が必要である。

第六は「金融制御」。最近、世界を襲つ

ているアメリカ発の金融危機が表面化する以前から上海・深圳の株価は下落を始め、今やピーク時から50%以上下がっている。北京の住宅価格は30%下落。輸出が激減して倒産が増加している。心配された五輪後の不況が前倒しになって押し寄せている。

そして、中国のガンとも言える少数民族問題と台湾問題がある。少数民族の分離独立は、共産党の権威失墜に、更に中華人民共和国の崩壊へとつながる。

台湾は馬英九が総統になって独立は一応遠のいた。チベットもウイグルも台湾も、漢族は誰でも独立には反対している。

まだ挙げればいろいろあるが、これだけでも5年で解決することは困難である。実行に移すには当然抵抗勢力もある。胡錦濤は、その勢力との調和を取りながら、待たなしの緊急事項を優先し、第5世代に引き継ぐことになろう。

中国が描く自身の長期ビジョンによると、「既に政治大国になった中国は、更に経済大国への道を進もうとしている。2020年までに『小康（多少ゆとりのある社会）』を実現し、現代化の基礎を固める」としている。

中国は「中国蜂起」というスローガ

ンを打ち上げて、外国に侮られない最強国になりたいと願っている。「蜂起」というと、日本語では賊徒が群れ起るようには取られて、必ずしも良い印象の単語ではないが、中国語では人々が一齐に立ち上がる意味である。「中国蜂起」とは「偉大な強国、偉大な民族になる」という意味に解釈する。中国蜂起を実現するための条件として、軍事力を中心とした国家領土と戦略的利益を維持するための手段を持つことだと言っている。

強大な軍事力を背景とし、その上に健全な持続可能なやり方で経済発展を成し遂げること、これこそ中国は「強国」と言える、と中国人は思考している。国土は日本の25倍、人口は10倍だが、経済規模は比較にならないところが多い。一刻も早く逆転させたいというのが中国の悲願である。

中国の立てている長期ビジョンでは、右の「強国」になる目標を2100年に置いている。中国は本気でそう考えているらしい。

「強国」実現のためには、経済成長を確実にすると共に、アメリカ支配に對抗し得る軍事力を持つことが不可欠としているが、一方で意識的に外交文化方面で各国との関係強化を図ろうとしている。外交面で平和志向を示し、

文化を強調して国際社会に安心感を与えようとしている。

日本は明治維新で改革開放に踏み切り、富国強兵に邁進して大国の仲間入りを果たした。しかし軍が強大化し、世界恐慌が重なって危機感が高まり、道を誤ってしまった。軍の暴走もその一つである。

中国も解放以来、富国強兵を国是とし、高度成長を遂げつつ世界有数の軍事力を持つに至った。

世界経済が悪化し、中国経済も失速した場合、人民解放軍はどう出るか。

解放軍内部には未だに昔の考え方が残っている。「最後は銃がものを言う」と考えている人が少なくない。経済が行き詰まり、食えない人が急増して不満が充満すると、昔の日本と同じ道を進まないとは言いが切れない。結果は破滅になるが、アメリカの出兵によって、台湾攻撃、チベットやウイグルとの大規模紛争が起きる可能性も否定出来ない。

3月の全人代で胡錦濤は、「取りあえず私の時代に民主化についての議論はしない」と明言した。06年、胡錦濤はアメリカを訪問した時、「民主主義は素晴らしい。しかし国によってあり方は違う」と語った。民主化そのものは肯定しているが、中国では時期尚早

だと考えているのだろう。

一方、人民日報は昨年、「資本主義の道を歩み、多党制を支持するのは誤りだ」「これは欧米による平和に過ぎず、社会主義を転覆しようとするものだ。多党制を実現すれば、現在のような支配網を敷く必要がなくなるといって考えは誤りだ。ソ連がその例だ。ソ連

崩壊後、独立国家共同体は西側が期待したものはほとんど得られなかった」「中国の政治政党は、共産党の下で多党合作と政治協商制度であり、独特の歴史的条件の下で形成されたものだ。十数億を指導している共産党が無くなれば、再び国家は分裂し、数千年かけて作り上げた文明体が再び存在することとは出来なくなる」と主張している。（追記・この原稿を書き終えた先日、胡錦濤政権は農村所得倍增計画を打ち出した。都市との格差是正、内需拡大は中国喫緊の課題である。だが、急ぐと別の歪みが顕在化し、抵抗勢力もあつて混乱を招く恐れもある。10年、20年のスパンで実現することが望まれる。それには、今暫くは一党独裁が必要か。）

ユダヤ難民を助けた

日本人と八紘一字の精神

飯田 正能

昨年12月1日発行の靖國神社の社報『靖國』第641号に歴史教科書研究会上杉千年氏の「ユダヤ難民を助けた日本人」と題する論考が掲載された。

同氏は昭和2年岐阜県生まれ、國學院大学文学部史学科卒業後、高校の社会科教師として岐阜県と静岡県で定年退職まで教鞭をとられ、その間歴史教科書問題の最前線に立ち、多くの論文と著作を発表して、日本人の教育再生を主唱し、今なお靖國問題等に取り組んで活発に啓発運動を続けておられる憂国の士である。最近の代表作に『猶太難民と八紘一字』（平成14年・全貌社）、「ユダヤ難民を助けた日本人―八紘一字の精神日本を救う」（平成19年・神社新報社）等がある。

同氏が平成19年1月靖國神社に提出された「遊就館展示見直しに対する要望書」の中に「ユダヤ難民を助けた日本と日本人」の歴史を「年表」に追記していただきたいというのがある。その具体例として、「昭和13年1月21日関東軍『現下ニ於ケル對猶太民族施策要領』策定」「昭和13年12月6日五相會議『猶

太人對策要綱』を陸軍大臣板垣征四郎の提案で策定」等を例示されている。

昭和12年当時、日を追って激烈となるナチス・ドイツ及び中欧諸国における反ユダヤ運動並びにソ連における反シオニスト運動に対抗して、世界各地に在住するユダヤ人が、その生存権確保のため、全世界的な共同機関を結成しようとの動きが活発となり、当時、ユダヤ人にとってパラダイスと言われた満洲の在住ユダヤ人(約5千5百人)の間でも極東ユダヤ人大会を開催したとの意向が固まりその代表者から

ハルビンに於て占むる地位を認識し、日本に依存の決意を固め、今後は日滿両国の国策に順応して生存の途を求めんとするに付、我々の結成に対し日滿両国官憲側の内部的了解を得度き」旨の申出があった。これに対し、当時の哈爾濱特務機関(特務機関長樋口季一郎少将・陸士21期・大幼6期、終戦時の北部・第5方面軍司令官・中将)も関東軍司令部(參謀長東條英機中将)も好意的であり、同司令部を通じて陸軍中央に伝えられ、陸軍中央は、当時陸軍随一のユダヤ研究家であった安江仙弘大佐(陸士21期・東幼6期、戦後ソ連に拘束され、昭和25年夏ハバロフスク收容所第21分所にて死去)を大連特務機関長として送り込み、極東ユダヤ人問題の對策責任者とした。安江大佐を始め担当者(約10人)の努力により、第1回極東ユダヤ人大会が、昭和12年12月26日から3日間開催され、樋口少将、安江大佐、河村愛三憲兵少佐らが個人の資格で出席した。樋口少将の大会祝辞は「場内ニ多大ノ感銘ヲ与ヘ出席全猶太人ノ感謝感激ハ会場破レン許リノ拍手ヲ以テ迎ヘラレ流涕スルモノアリ」と記録されており、この大会は第2回(昭和13年12月)第3回(昭和14年12月)へと続行された。

前記の昭和13年1月21日付の関東軍『現下ニ於ケル對猶太民族施策要領』はこのような背景の下に、安江大佐の進言に基づき、「五族協和」にユダヤ人を加えた「六族協和」の構想を実現しようとしたものであり、「在極東猶太民族ノ日滿依存傾向ヲ利導シテ之ヲ世界ニ散在スル彼等同族ニ及ホシ以テ彼等ニシテ功利的術數ヲ抛キ真ニ正義公道ヲ基トシテ日滿兩國ニ依存スルニ於テハ之ヲ八紘一字ノ我大精神ニ擁護シテ之ヲ理想トス」ただし、「特ニ現下

ユダヤ難民滯留の報に接するや、樋口少将は滿洲国外務局に難民救出を依頼すると共に当時の松岡洋右滿鉄總裁に電話で列車の手配を依頼した。松岡總裁は直ちに、多数の列車の手配とユダヤ難民の無賃輸送を指示した。このような英断に基づく処置によって多数(約2万人と言われる)のユダヤ難民が救出された。

「命のビザで六千人のユダヤ人の命を救った日本人―杉原千畝」として、我が国の多くの中学歴史教科書にも取り上げられている、リトアニアの日本領事代理杉浦千畝が、当時ドイツと同盟関係にあった日本政府の意向に反し、人道と博愛の精神から日本人のビザを發行して、約6千人のユダヤ人の命を救ったという、昭和15(1940)年夏の事件より2年半も前のことである。

更に安江大佐は、当時諸外国がユダヤ問題に冷淡で、ユダヤ難民の救済にも消極的であり、我が外務省も昭和13年10月3日「猶太避難民ノ入国ニ関スル件」として訓令を發し、ユダヤ難民の流入を原則的に禁止するとした中、また、執拗なナチス・ドイツの強圧の中にも拘わらず、当時の陸軍大臣板垣征四郎中将に意見具申をしてユダヤ難民保護を訴えた。板垣陸相もまた、本来は外務大臣の所管事項であるユダヤ

難民問題について「五相会議」という政府の重要政策を審議する会議に提案し、昭和13年12月6日に前記の「猶太人対策要綱」を策定させ、ここにユダヤ難民保護は「国策」となった。その要点は「現在日、満、支二居住スル猶太人ニ對シテハ他国人ト同様公正ニ取扱ヒ之ヲ排斥スルカ如キ處置ニ出ツル

コトナシ」「新二日、満、支ニ渡来スル猶太人ニ對シテハ一般ニ外國人入國取締規則ノ範圍内ニ於テ公正ニ處置ス」というもので、その前文には「獨出ツルハ畜ニ帝國ノ多年主張シ来レル人種平等ノ精神ニ合致セサル」が故であるとしている。

このような史実は、当時の日本人が、軍人を始めとして如何に「八紘一字」の建国の精神を堅持し、人種平等の理念を包有していたかの証左であろう。因みに安江大佐（昭和15年9月28日大連特務機関長解任、予備役編入。その前日に日独伊三国同盟締結。）に對し、昭和16年11月1日、ハルピンのホ

テル・モデルンで数百名のユダヤ人列席の下に、世界ユダヤ人會議代表のM・ウスイシキン博士署名の、ゴールデン・ブックへの登録証書授与式が行われた。ゴールデン・ブックは、ユダヤ民族に功勞のあつた外國人を含む人々の偉業の記録である、とされている。なお、樋口中将も同時に登録された。

八紘一字と神道指令

田中 賢一

「八紘一字」の所出

「日本書紀 卷第三 神日本磐余彦天皇 神武天皇」の一節に次のとおり載っている。

「上は乾靈の国を授けたまひし徳に答へ、下は皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて、都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと、亦可からずや。……」

日本書紀は、養老4(720)年に完成したと伝えられているが、その後「八紘一字」なる言葉が、どのように使われていたか寡聞にして知らない。唯筑紫の太宰府の大宰帥であつた大伴旅人の次の歌は一脈相通するものがある。

「やすみししわが大君の食す国は

大和も此処も同じとぞ念ふ」(やすみししは大君の枕言葉)

八紘一字の精神

八紘は全人類であり、一字は一家族である。この精神があれば世界は平和である筈なのに、現状は然らず、先ずお隣の中国を見れば、50数個ある少数民族を虐げることの何と甚だしいことか。チベット族やウイグル族に對し殺戮を欲しいままにしている。他民族に對してのみではない。漢民族に對しても一字とは程遠い。土地を取り上げられた僻地の農民が、訴訟のため北京に

来て直訴村を作つていたが、オリンピックのため追い払つてしまった。八紘一字に相当するような言葉は、支那の古典に見当たらない。

目を転ずれば、ロシアのグルジア侵攻も同根と言わざるを得ない。まだまだ民族の相克は跡を絶たない。世に八紘一字は実現出来ないのか。

宮崎の八紘一字の大碑

宮崎市下北方町の高台に、昭和15年に八紘一字の塔が建てられた。この年は皇紀二六〇〇年に当たり、支那事變の最中で、国威宣揚に沸いていた。

塔は高さ36米、正面の文字は秩父宮殿下の御染筆で、四隅には荒御魂、和御魂、幸御魂、奇御魂の四神像が配置されている。国内各地はもとより、世界各地の日本人会から贈られた石材で構築された。

開戦前の昭和16年12月1日に動員が下された挺進第一聯隊は、乗船地門司に向かう前日の8日に、全員で宮崎神社に参拝し、八紘台に登り、塔の下で武田聯隊長は、八紘一字の精神について訓示した。開戦のニュースは既に伝わっており、士気愈々高揚したという。

このように戦争中は、国民精神の中核的存在になっていた。ところが、戦敗れ、米軍の占領下、次のような「神

道指令」なるものがGHQから出され、八紘台は平和台と名を変え、八紘一字の文字は消されてしまった。

神道指令

占領下の昭和20年12月15日、GHQ指令「国家神道、神社神道ニ對スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」が出された。国家と宗教の分離と公的教育機関における神道の禁止を強調したもので、国や地方公共団体は、神道を支援してはならないこと、神道に限らず、いかなる宗教も、軍国主義国家主義イデオロギーの宣伝弘布をしてはならないこと、神社の廃止、公教育機関で神道教育・儀式の禁止、「国体の本義」「臣民の道」(文部省教育局作成の教材)の禁止、「大東亜戦争」「八紘一字」等の用語の即刻停止、公的施設における神棚等の禁止、いかなる宗教の儀式に参加しないための差別の禁止、官公吏の公的資格

における神社参拝の禁止等々を延々詳細に述べたものである。

米軍の兵営には教会が厳然と建っているのに、神道指令は、日本弱体化政策の一環であることは明瞭である。

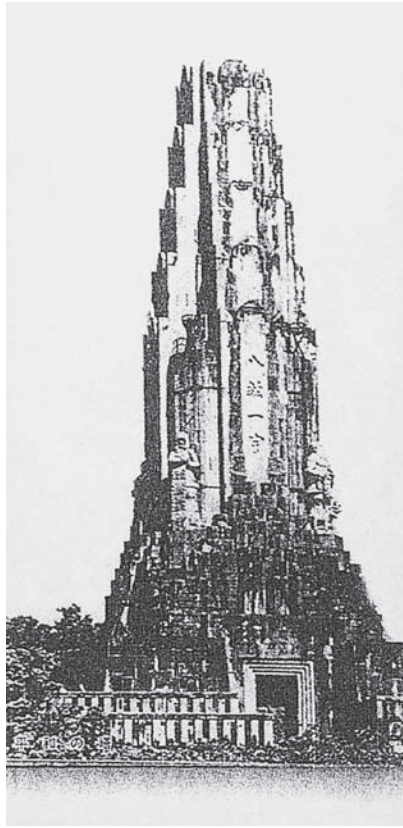
「八紘一宇」の復元

昭和27年4月、日本は独立を回復し、神道指令は失効した。遅きに失したが、

昭和40年になって塔に八紘一宇の文字が復元された。流石は天孫降臨の日向である。

ところが、神道指令は我が国の各所に残存している。その一つは、八紘一宇とともに名指しで禁じられた「大東

亜戦争」という称呼である。太平洋戦争とはGHQが名付けた呼び名であ



る。何でインパール作戦が太平洋なのか、地理的音痴と言わざるを得ない。開戦の4日後に当たる12月12日に「今次対米英戦争を支那事変を含め大東亜戦争と呼称す」と発表したが、これは閣議決定という法的根拠によるものである。

現在の我が国の道義の退廃は、敬神崇祖の念の欠如によるところが大き。昔は子供の教育で、そんなことをすると神様の罰が当たるとか、御先祖様に済まないとか言った。また、神社の前を通るときは、必ず拝礼せよと教えた。それは家族だけではない。学校でも同じように教え、引率して神社に参拝したし、道場には神棚があり、御親影を納めた奉安殿は、神社と同じ扱いだ。それが全て神道指令で禁止されてしまった。昭和25年まで、小

中学校の教科書は国定で、その後からは検定となった。国定教科書は、神道指令を忠実に守り、編集されたことは言うまでもない。それは検定時代でも同じである。

幼い頃の教育は一生を支配する。人の嫌がることはやらぬ、と言って靖國神社に参拝しない福田前総理は昭和11年生まれ、慰安婦問題で禍根を残した談話の、当時の官房長官河野洋平は昭和12年生まれ、何れも神道指令下の小中学校生徒である。そのほか国益を損ねる政治家や官僚も、同時代であることは寒心に耐えない。

神道指令から話が飛躍したが、それに犯されなかった八紘一宇の塔は大事に見守らなければならぬ。

平成20年度
フィリピン慰霊巡拝旅行所見

理事(新理事長) 藤田 幸生

平成20年10月24日から26日の間、当協会恒例のフィリピン特攻隊関連慰霊巡拝旅行に参加した。平成12年以来実施された特攻隊進基地慰霊巡拝旅行の一巡に伴い、昨年から規模縮小という

ことで、当協会代表2名(深山明敏理事と私)による2泊3日の短期間の慰霊巡拝旅行であったが、私にとっては2回目の現地マバラカットの慰霊祭参加であった。

マバラカットは、フィリピンのマニラ近くのパンパンガ州にある町の名前である。ここには戦前から幾つかの飛行場があった。戦後もピナツポ火山が噴火して、その灰で埋もれるまでは、

米軍がクラーク基地として使用していたところである。大東亜戦争末期、昭和19年10月25日朝、日本海軍航空隊は、このマバラカット基地から最初の神風特別攻撃隊を飛ばさせ、特攻による最初の戦果を挙げている。関行雄大尉(海兵70期)の率いる敷島隊である。今から64年前のことである。

この地では現在も、我が身を犠牲に

して公に尽くした勇氣ある行動を讃え、毎年その出撃の日時に合わせて、現地フィリピンの人々が、慰霊祭を執り行ってくれている。有り難いことである。以下にその状況をお知らせする。そもそも、この現地の慰霊祭は、今も現地に住まわれているダニエル・デイソンさんによって始められたものである。今では、州知事、市長以下職員の方皆さん、空軍音楽隊、小学校職員

児童生徒ほか、地域を挙げて力を入れ、盛大に実施してくれている。日本側からも、我が協会関係者のほか、鹿児島県最福寺の池田恵観和尚一行の慰霊団、徳洲会などの皆さんが参列してきた。今年は、徳洲会一行の参加がなく、少し寂しかった。

慰霊碑は、3箇所に分かれて建っている。リリーヒルには、池田和尚ほかの日本人有志によって建てられた観音像が、よく手入れされている公園広場にある。ここで今年も、公式の慰霊祭が、仏式も含めて盛大に行われた。次

は、西飛行場の慰霊碑。最後は、東飛行場跡の慰霊碑広場であり、ここには鳥居をくぐった所に特攻隊員の銅像が建っている。地元の人々が小学生を



平和観音像・特攻隊戦没者慰霊祭

伴って参列してくれた。これらの慰霊祭には、持参した靖國神社の御神酒、日本の水を手向け、練香を焚き、お経を唱えてお祈りした。これらの慰霊祭は、ほぼ例年通り執行された。

その後のデイソンさん宅訪問、敷地内の特攻博物館見学、翌日のモンテンルパ慰霊碑参拝も、例年通りであった。ガイドの鈴木さんによる説明案内も、いつも通り素晴らしかった。このツアーには無くてはならない貴重な存在であり、感謝である。

今年のトップクスは、多田野弘さんの参加にあつた。元201空の航空機整備員で、零戦と共に南太平洋各地を転戦され、特攻作戦にも参加された方である。マーシャル群島、ラバウル、サ



特攻隊戦没者慰霊祭

イパン、トラック、ベリリユー、パラオ、セブなど各地を転戦、昭和20年の1月までマバラカットにいた方である。多くの隊員を見送り、自らも戦場の海を泳いだ経験を持つ歴戦の勇士である。

戦後、建設機械製造会社である(株)タダノを起こし、今は、名誉顧問をされている。今回の旅行中、マニラ市内でも、タダノ製の機械を散見した。88歳で、姪の看護師さんを連れて参加された。日頃、健康に留意し、身体を鍛えておられ、大変お元気であった。

マバラカット慰霊祭への参列は、昭和50年以来2回目で、前回には戦友を代表して追悼の辞を捧げられた。デイソンさんとも2度目の再会で、今回の再訪のきっかけは、デイソンさんが著



左・デイソン氏 中・深山理事 右・多田野氏

した特攻の本(編注「ダニエル・H・デイソン著『フィリピン少年が見たカミカゼ—幼い心に刻まれた優しい日本人たち』—日本語版・桜の花出版株式会社発行 042-371-9715 定価本体1400円—当協会会報『特攻』74号47頁に紹介)を書店で目にして、その活動を知ったことであつたという。自分たち戦友など日本人に代わって、私財を擲ってまで特攻隊員の慰霊に尽くしてくださっていることに感激し、直接会ってお礼を言いたいという気持ちであつたという。再会の場面や、その会話は、心の通じた者同志の感動的なものであつた。当時少年であつたデイソンさんと多田野さんとは、当然面識はなかつた。しかし、同じ出撃場面に居合わせた者同志としての一体感は、見ている者にもひしひしと、二人の感動が伝わってくるものであつた。

私にとつて、今回は2度目のフィリピン慰霊の旅であつた。前回は30名近くの団体で、コレヒドール、セブ、レイテの島々も巡拝したが、今回は人数も少なく、ルソン島のみであつた。毎年このことではあるが、現地の慰霊祭には、最低限今回のような参加を継続するのが、特攻隊の諸霊に対する子孫の礼儀であろうと、改めて感じた次第である。

水上特攻・肉弾艇「震洋」 体験記①～③

甲飛13期 高部 博

「編注」本稿は、甲種飛行予科練習生出身者の全国組織である「全国甲飛会」会報『甲飛だより』の第83号と第85号に連載されたものであるが、同会のご了承を得て転載させて頂いた。なお、同会は平成20年9月1日、浅草ビューホテルにおいて、生存甲飛生並びにご来賓、ご遺族、同伴者420余名が参集し、「帽振れ！全国甲飛会―解散記念の集い」を開催して、昭和38年結成以来45年の輝かしい活動に終止符を打った。ただし、今後も地区別、航空隊別、期別などの各甲飛会は引き続き運営される。

また、同会報第84号に「太平洋戦争に於ける水中・水上の特攻兵器」について、同会報第85号に「甲種飛行予科練習生」についての記事が掲載されているので、参考としてその要旨を転載させて頂いた。」

○太平洋戦争に於ける水中・水上の特攻兵器

太平洋戦争の戦局は、昭和18年中期

になると、南東方面にある米軍の大反攻作戦の本格化により、補給戦に敗れ、航空消耗戦で戦力が著しく低下し、第一線部隊の中には、この退勢を挽回するには、必死必殺の攻撃を決心するしかないとする考え方が台頭し始めた。一方、軍令部は海軍省に対し、次のような特殊兵器の緊急実験を要望し、機密保持上「金物」という仮称で試作が急がれた。

- ①金物 潜水艦攻撃用潜航艇
- ②金物 対空攻撃用兵器
- ③金物 S金物
- ④金物 可潜魚雷艇Ⅱ「海龍」
- ⑤金物 船外機付衝撃艇Ⅱ「震洋」
- ⑥金物 自走爆雷
- ⑦金物 人間魚雷Ⅱ「回天」
- ⑧金物 電探上等
- ⑨金物 特攻部隊用兵器Ⅱ「雲海」

このような特殊兵器の開発で、最初に実用化されたのが⑥金物の「回天」で、次いで登場したのが④金物の「震洋」（別名マル四艇）であり、共に実戦に使用された。その他は量産配備されたが実戦には使用されなかった。昭和19年2月、トラック島が米機動部隊

により大打撃を受け、絶対国防圏の一角がまさに崩れんとする戦局に、敵の揚陸部隊に対して多数の小型舟艇を

もって突入攻撃する作戦が実施されることになった。ここに登場したのが④艇として開発された小舟艇で、同年5月27日に第一号が完成し、「震洋」と命名され、直ちに量産された。

この主機関に自動車エンジンを採用したのは、その後の生産を順調ならしめるのに大いに役立ち、航空、水中の特攻兵器が殆ど生産に行き詰まったのに比し、終戦までに実に6200隻も完成することとなった。

長崎県大村湾の北岸の川棚に、海軍水雷学校臨時魚雷艇訓練所を開隊した。量産された「震洋」は、川棚と鹿兒島湾江の浦で訓練を受けた搭乗員達によって、震洋隊が次々と編成され、比島、南西諸島、台湾の戦場に配備され、昭和20年に入っては本土決戦部隊として、内地の要地に配備され特攻突撃に備えた。その搭乗員は、海軍兵学校出身者47名と兵科出身兵曹長50数名以外は、予備学生、予備生徒出身の若い尉官及び甲飛13期・14期、乙飛19期・20期、特乙飛の予科練習生者であった。

「震洋」は、一型、五型計六二〇〇隻が建造され、一万人の隊員と一一五隊が編成された。

「震洋」の要目Ⅱベニヤ板製高速艇トラックエンジン、艇首炸薬二五〇疋、一型一人乗り、全長五米、速力二八節、

五型二人乗り指揮艇、全長六米、速力三二節。
震洋隊は五五隻で一隊を編成、後に一型四四隻、五型四隻、予備艇四隻計五二隻で一隊と改めた。

比島、南西諸島で特攻攻撃の命により突入し、或いは訓練中に殉職し、九五〇名が殉国散華した。

○甲種飛行予科練習生
飛行士官の促成養成Ⅱワシントン、ロンドン軍縮会議で決まった、艦艇保有率の劣少をカバーする手段として、航空兵力の増強を打ち出した。時既に世界列強の海軍の主戦力は航空に移りつつあった。

昭和の初め頃の海軍部内では、艦隊派が主流を占め、大艦巨砲主義が軍備の根幹をなしていた。

しかし、学力の高い中学4年修了程度の若者を訓練して、初級指揮官をもっと早く養成しようとの目的で制定されたのが甲種飛行予科練習生制度である。

その1期生を昭和12年9月に採用し、8年後には敗戦となってその使命を終わったが、終戦近くでは特攻隊員となつて泥沼の戦場に、若い生命を次から次へと散華させていったことは、返す返すも残念でなりません。余りに

期別	入隊年月	入隊者	戦没者
1	12/9	250	182
2	13/4	250	187
3	13/10	263	223
4	14/4	265	215
5	14/10	258	215
6	15/4	267	220
7	15/10	324	261
8	16/4	455	333
9	16/10	841	630
10	17/4	1097	777
11	17/10	1203	723
12	18/4	3239	861
13	18/10	28510	973
14	19/4	39985	553
15	19/9	37779	285
16	20/4	25888	130
合計		14万0874	6千778

も短い歲月というよりは、現代史の中の幻の一行であり、刻々と過ぎ去って行く歴史の余りにも短い一瞬時だった。第2次大戦の前哨戦となった支那事変と、本番である第2次大戦の尖兵となることでありました。即ち「青春即戦争」ということになったのであります。

近代海軍の申し子として、文字どおり、ばあーと咲き、海軍航空戦力の主軸の精鋭として羨望の的となり、太平洋戦争では数多くの戦果を挙げ、そしてばあーと散った陽炎であった。

甲種飛行予科練習生

13期は3年修了程度、14期・15期は3年1学期修了程度、16期は2年修了程度となった。

落日迫る終戦時においては、日本海軍の特攻要員と変貌した。

人間爆弾「桜花」、ジェット特別機「橘化」、ロケット戦闘機「秋水」の搭乗員として、また、想いを大空に馳せつつも、人間魚雷「回天」、特殊潜水艇「蛟龍」・「海龍」、水上特攻艇「震洋」の搭乗員として、日本最後の攻防戦でその青春を国に捧げ尽くしたのである。



体験記①（「甲飛だより」第83号）

大艦巨砲主義に押され、また、太平洋の荒波には不適というために、余り積極的でなかった日本海軍の魚雷艇、それが、昭和17年11月ソロモン海戦が終わった頃から、その必要性が叫ばれるようになった。

ベニヤ板張りのモーターボートに250キロの炸薬を艇首に詰め、敵の揚陸部隊（艦船）目掛けて多数で突入しようという震洋艇の計画は、戦局の急迫とともに着々と実行に移され、19年4月から急造された震洋第1号艇は、5月27日に完成した。

そして、これらの搭乗員は海兵出身者や予備学生出身の若い尉官が隊長となり、各艇は予科練出身者で全部これを固め、「敵襲ごさんなれ」と待ち受けたのは、確かに太平洋戦争の最後を飾るものであった。

「選 択」

昭和20年の2月末に飛練教程を修了した偵察員が、数百名ほど土浦海軍航空隊に集まってきた。我々13期後期より2カ月早く昭和18年10月に入隊した13期前期の甲飛生達だった。

彼等は、昭和19年6月に予科練教程を卒業し、「飛行練習生」となって上海、青島等の航空隊で「飛練教程」に進み、厳しい実地訓練を8カ月も積み、いわゆる「練習生」を完全に卒業してこれから実施部隊で、実用機の訓練に入ろうとする飛行兵が、突然数百人も土浦空へ帰って来たのである。

厳しい戦闘で飛行機の消耗が激しくなったことは、同時に搭乗員も多く失っているわけである。その補充には年単位の時間が必要なのに、もう実用機に乗れるようにまでなった搭乗員を足踏みさせるとは、と疑問に思うのは当然である。

昭和20年になった頃の航空兵力の実は、航空戦での消耗に加え、空襲による各地の被害等で飛行機の生産力は極端に低下していて、飛行機の第一線への補充も思うように出来ない状況に陥っていた。

また、燃料の欠乏も甚だしく、航空機用の燃料の不足はどうにも出来ない状態となっていた。

その頃には既に、「特攻攻撃」に参加して戦死している先輩搭乗員はかなりの数に上っていたし、我々同期の者も何人かが飛行機以外の特攻兵器で戦死していた。

彼等は昭和19年8月予科練卒業と同時に、「飛行機でない特攻兵器」に志願して行った者達である。

既に、本土決戦のシナリオが進められており、昭和20年の5月からは全教育機関が、教育の停止となり、全員が戦闘要員となった。

「予科練」も例外ではなく、全員が本土防衛（陸戦を含み）の中に組み込まれ、いわゆる「一億総特攻」の体制下に置かれることになった。

海軍では、昭和19年から20年にかけて、「飛行予科練習生」を大量採用した。名称は「飛行予科練習生」だったが、特攻兵器要員に向けられた。

昭和20年4月中旬に特攻要員の募集があり、躊躇することなく志願した。

本土空襲は激しくなり沖繩にまで、敵機が及んでいる状況となつては、新しい道をとらなければ今まで予科練で

培ってきたものが、全て無駄になってしまわないかと、迷う気持ちを一応は整理した。

予科練訓練中に操縦か偵察かに判定する適性検査がある。殆どの者は飛行機の操縦員になることを熱望し、夢に見ていた。

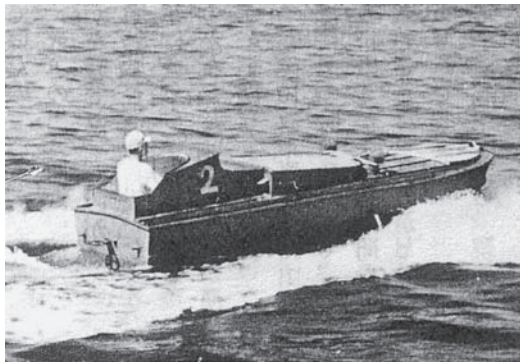
その適性検査に希望どおり合格して、憧れの操縦員としての基礎訓練も受けていたので、自分ではあくまで飛行機の操縦員になれるものと信じていた。だから、飛行機乗りになるんだという、その願いを完全に捨てることに少しの迷いもなかったと言えは嘘になる。

4月下旬のある日、特攻要員を希望する者の中から最終的に選抜する面接が行われた。

面接担当官は「金子分隊長」と本部士官の2名で、真剣な顔付きで待っていた。

家族状況の確認から始まり、両親が健在で兄があり兄弟が多くて、農家の次男坊となればもう言うことなしと、自分で勝手に決めていた。特攻要員となる意志の確認があり、兵器は「マル四」であると告げられた。

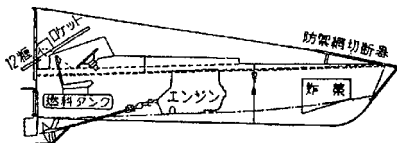
「特殊兵器」というものの、それ自体人間を組み込んだ爆弾か魚雷と考える方が判り易い。従ってその要員には



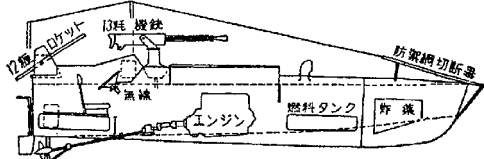
震洋1型



航行中の震洋5型



〈1型艇〉艇長5.1メートル 重量1.4トン 馬力67 速力23 ノット 兵装12センチ ロケット2



〈5型艇〉艇長6.5メートル 重量2.4トン 馬力134 速力25 ノット 兵装13ミリ機銃1.12センチ ロケット2

予め死が約束されていたわけである。「マル四」は別名「震洋」と呼ばれる水上艇で頭部に爆薬を積み、水上で敵の艦船に体当たりし、それを爆破し沈めるために使用する「小型快速艇」位の知識は何となく持っていた。船体は木造で外板はベニヤ板、エンジンはトヨタの自動車エンジンを転用、1人乗りが全長5.1米、2人乗りはエンジン2基で全長は6.5米、その頭部に250斤の爆薬を搭載した小型船。その小型船に乗って敵艦船に体当たりし、250斤の爆薬を爆発させて敵船を撃沈させるというもので、飛行機特攻のような華々しい配置ではない。

「是非お願いします。いずれ死ぬものと覚悟はしております。どうせ死ぬのなら・・・」と、そこまで言ってしまった。「どうせ死ぬのなら」は、まづかったと気が付き、一息ついた時、金子分隊長の顔が一瞬綻びたように見えた。

そこで肩が急に楽になり、自分の気持ちをはっきりと説明することができたと思っただ。

その時まだ16歳だった。「国の為に一命を捧げて尽くしたいから・・・」等と、勇ましい言葉を並べたようだが、実際は「国の為」などという崇高な確固たる信念から言った

ような記憶もないし、親や兄弟の為になどと言った覚えも残っていない。数日後、金子分隊長から特攻要員に決定した旨の話があった時には、何故かほっとした。

若さ故か、「死」というものに対する恐怖感や、人生についての悩みなどは全く持っていなかった。特攻隊員に決まっても殆ど平常と言っている心境でいたようだ。それを「悟り」と言う人もいるだろうし、「諦め」だと言う人もいるかも知れないが、通常の神経では耐えられない心の葛藤を淡々と乗り越えられたのは、純真な若さとして予科練という環境が与えてくれたもの

が大きかったに違いない。

「出発」

昭和20年4月22日、特攻要員に選抜された者は、司令部前に集合し、全員で写真を撮った後、思い出多い土浦航空隊を後にした。

特攻要員としての出発だったので見送りの無い目立たない出発だった。勿論行き先は知らされていなかった。

海軍の別れの時の「帽振れ」には、儀礼の意味のほか特別な感情が込められていて、独特な思いがあることを強く感じたのは、九州の基地で、沖繩へ特攻出撃する魚雷艇を見送った時である。

生還することがないと判っている乗組員達に向けて振っていた帽子が、船が遠ざかるに従って次第に重くなり、耐え切れなくなってきた。

しかし、我々震洋部隊の出撃は、夜間でしかも隠密理の出撃になる筈だ。誰一人見送る人の無い中での出発となる。だから当然「帽振れ」はない。

最終的に自分の進む方向が「水上特攻」に決定し、任務が具体的に明確になったことで、自分の命をかける結果がどうなるかなど、悩み迷う必要はなくなり、かなり精神的に余裕も出てきた。

山梨の田舎で農業をしている父は体

が丈夫な方でなく、兄は私が予科練に入ってから出征した。姉は東京の軍需工場で働いていて、家には幼い妹と弟が4人もいたため、面会に来てもらうのは無理だと判っていたので、予科練入隊後1回も面会に来てもらったことはなかった。

退隊当日、土浦駅まで見送りに来てくれた同期生と堅い握手を交わし、一般の入場規制をしたホームの専用列車に乗り込み出発を待っていた。間もなく発車になるという時、突然「高部長は居るか」と呼び出されて、ホームに出て驚いたことに、そこに父と姉が立っていたのである。

列車の出発間近の慌ただしい僅かな時間だったのがよかったのか、案外さっぱりしていたようだ。肉親に会えるのもこれが最後になるのかなどという、感傷が湧いたような記憶もない。

戦後10数年ほど経った頃、何かの折にその時の話が出て、姉よりその折のことを詳しく聞かされ、初めてそうだったのかと思ひ出したくらいである。

土浦航空隊から「現地出発面会」許可スル・・・との通知が届いた。航空隊から直接の通知だからと、早速父が東京の姉と連絡を取り2人で土浦まで駆け付けたが、途中手間取り航空隊に着いた時には、我々はもう出発した

後だった。

衛兵所の衛兵が時計を見て「今から急げば何とか間に合うかも知れない」と、隊門前の道を指差し「とにかくここで、どんな車でも良いから止めて土浦の駅まで乗せてもらえ」と、教えてくれた。

航空隊からの「現地出発・・・」の通知書を見せると、すぐに乗車券を売ってくれたという。そんな通知書をちらつかせながら、親切なトラックに土浦駅まで乗せてもらい、入場規制しているホームに駆け込み、私の車両を探してもらい何とか辿り着けたのとどだった。

父が私に小遣いをくれるというのを断り、逆に私が持っていた金を出して「もう使い道が無いから」と言いつつ、父に渡したのを姉は記憶しているという。それから間もなく列車は出発した。父親はこれが最後の別れになるかも知れないと思っていたに違いないが、その時の父の表情などは全く思い出せない。

東京駅でかなり時間があるというところで靖國神社に参拝した。

東京駅を出発したのは暗くなっていた。列車の出発を待っている時、金子分隊長が突然訪ねて来て、「今日香取神宮まで行って来た」と言

いながら、香取神宮のお守りを渡してくれた。その時お守りを貰ったのは、同期の「宮沢恒一、宮坂三夫、原田定雄、宮崎俊雄、上田静夫、赤坂行夫」と私を入れた7名だった。金子分隊長が担当していた100分隊の隊員だった。

その後、特攻訓練が始まってからも時々「浜マデハ海女毛着ル時雨哉」と聞かされた。いざ、というその時までは体を、命を、大切にせよ、という教訓である。その時のお守りは、忘れられない記念品の一つとして、今も大切に保管している。

戦後40年ほど経った時に、大学の教授をしておられた金子分隊長の消息が判ったので(編注・鎌倉市在住)、戦友会に出席してもらった。その時「震洋特攻へ行った者がどうなったか」と気になっていた。7人のうち君達2人に(宮沢と高部)会うことができ、また、他の5人も内地の基地で勤務し、戦死者が無かった様子なので安心した。よかった」と、非常に喜んでくれた。

そんな上官の心中など知る由もなく、当時の私達は若さからか、「特攻要員」となることを、かなり素直に受け入れていて、心の中で悩んだりせず

ず、かなり淡々としていたので、その話を聞き、上官としての苦悩の大きさを知り、反省したものであった。

東京駅から我々の専用列車は貨物線路を走ったり、駅に停車してもホームの無い線路上だったり、密かな行動を裏付けていた。暗い夜を列車はひたすら西へ西へと走り続けた。

京都で一時的停車し、若干の時間があつたので許可をもらい、「宮坂」に広島へ電報を打つことを勧め、電報局を探して何とか電報を打つことができた。宛先は呉海軍病院である。「宮坂」も今回土浦へ面会に来て貰えなかった者の一人だったが、温和でも芯の強い彼は面会でできなかったことなどおくびにも出さなかった。

いつ頃の事だったか、「宮坂」がある日突然呼び出され司令室へ行くことになった。何千人もいる練習生が直接司令室に行く用件などあるはずはないし、海軍大佐の司令に直接会うなど意外な出来事なので皆が心配していたら、何とそれが面会だった。

「宮坂」の父親は医官で海軍の将官だったので、司令室での面会となったわけだ。でもそこは司令室、親子の面会の話などではできず、顔を合わせたのみで早々に引き上げたという。そのころで我々は初めて「宮坂」が海軍中將

の息子と知って驚いた。

その時「宮坂」の父親は呉の海軍病院の院長だったので、連絡がつけば広島駅で会えるのではと期待して、広島駅で手分けして探したが、とうとう面会は叶わなかった(戦後元気で再会できたと思きよかつたと思っている)。

どの辺りを走っていた時か、関門トンネルを過ぎてからと記憶しているが、行き先は九州の大村湾に面した「川棚魚雷艇訓練所」と告げられた。

飛行兵の我々にとつて、海軍航空隊なら多少の情報があったが、「魚雷艇訓練所」等の予備知識は全く無かったので、若干戸惑いが生じたが、すぐにそんな感情は消えて、場所など何処であらうと、特別な期待も不安も必要ない心境になっていた。

博多をかなり過ぎていたと思う辺りで、一面に菜の花が咲き揃い黄色に染まった広い丘が目飛び込んできた。その時の光景は今でも脳裏に焼き付いている。

これから特攻訓練に行くことさえ忘れ、しばし茫然と眺めていた。土浦航空隊の桜も美しかったが、この時見た菜の花畑から受けた「特別な美しさ」は生涯忘れられないものになっている。

体験記② (「甲飛だより」第84号)

「訓練」

付近に人家等全く無い所で、板張りの仮設ホームの「川棚駅」に着いた。

いよいよ最後の訓練が始まるのかと少々緊張し、衣囊を担いで通った隊門に「川棚臨時魚雷艇訓練所」のほか「川棚嵐部隊」の名前が掲げられていた。

嵐部隊とは「突撃隊」を表す呼び名で、いわゆる特攻部隊を指すものだと教えられた。

隊内は木造の建物が殆どで、兵舎を始め基地全体が暫定的な設備のようでは殺風景、これが実施部隊の姿かと緊張感に包まれた。

とうとう「土浦海軍航空隊」から九州の特攻基地へ着いた。いよいよ最後の仕上げをする地に到着したわけである。

訓練期間は2カ月と聞いていたが、その後、何処の基地へ行き、どうなるのか知る由もない、ただ自分が進んで行く方向は一つに決まっているんだ、と自分自身に言い聞かせ、ひんやりした兵舎に入った。

兵舎は、木造平家で内壁も張ってない本当のバラック建て、土間の通路の両側が畳敷になっている大広間で間仕

切りがない。土空や三重空等の本格的兵舎との違いを見て、また異様な切迫感を覚えた。

隊門に魚雷艇訓練所とあったが「震洋艇」の訓練もやっている。しかし、沖繩に近い此処は実戦基地だった。何しろ敵が沖繩まで来ているため、この基地からも時折魚雷艇が沖繩海域へ向けて出撃して行く、第一線と同じ緊張感に包まれていた。

年齢も古稀を過ぎた今となつては、川棚の訓練所に着いたその時の心境は思い出そうとしてもなかなか思い出せない。割合淡々としていたような気がする。

若者ばかりの集団で、「特攻」を当然と受け入れて来ていたので、「さあ特攻訓練だ」というような気負ったものではなく、ましてや悲壮感などまるでなかったように思う。ただ確実に言えることは、その時、既に一つの悟りのようなものを持っていたのではないかと、と思う。

「特攻訓練は自分が死ぬための訓練である」。これは正常の感覚ではなかなか理解できないことだが、当時そのことに全く疑問を持たなかったのは、一つの救いだったかも知れない。

予科練の訓練は、体力、気力、知識作りだったが、ここ「川棚」での特攻

訓練は実戦に必要な事柄、つまり如何に確実に敵の艦艇に体当たりし、それを沈めるか、その技倆を身につけることだけである。

したがって、余分なことは全て切り捨て、最低限必要なことを体得すればよいとしていた。その体当たりの技術を習得しなければ目的の遂行が出来ない。つまり犬死になりかねない。しかも2カ月という短期間に習得しなければならぬので、訓練はかなり密度の高い厳しいものだった。

震洋艇による行動訓練や襲撃訓練は、夜間や雨天など悪条件の時が実戦に即しているとされていたので、座学は昼間、実技は夜間が多く、夕刻出航で帰着が夜中になっても、翌日は定時総員起こしである。そんな時の座学はまず睡魔とも戦わなければならなかった。しかし、必要な知識は身に付けておかないと、自分の生命が直接危険に曝され、攻撃前に一命を失うことになりかねない。そうすると、折角の「特攻」という使命が達成出来なくなるので真剣だった。不幸にして艇が故障して漂流した時も何とか生き延びるのだと、生き延びるための最低限の知恵まで教えてくれた。

艇に取り付けてある羅針盤には、約1リットルの純粋のアルコールが入っ

ていて飲用になること、フンドシを使って魚を釣る方法など、意外な程命を大切にすることを教えられた。

その後も「浜マデハ海女毛簀着ル時雨哉」と、繰り返言われたことも今でも時々思い出す。

また、訓練以外の作業もあった。訓練艇の燃料搭載作業は一苦勞、横穴の燃料庫からドラム缶を転ばして棧橋まで運び、自分達が使用する艇への燃料を補給する作業だ。これは重労働だし、かもアルコール酔いと戦っている。

艇のエンジンは、自動車のエンジンを使用しているので、通常ならガソリンを使うのだが、この時期にはもうガソリンは欠乏していて、訓練用に回すガソリンなど無かったので、訓練には代用燃料のアルコールを使用した。

200リッター入りのドラム缶は、中身がアルコールでもかなり重い。雨で濡れた坂道などは2人でも言うことを聞いてくれない。方向転換は特に難關、ようやく棧橋に到着、いよいよ燃料の搭載である。

1隻に1回100リッター程でよいのだが、ポンプなど気の利いた物は無いからホースを使う。ホースを口で吸い、アルコールが出てきたら素早く艇のタンクに注ぎ込むようにする。だが、

このタイミングが難しい。アルコールが口に入ったら大変である。

それでなくても燃料搭載作業は、数十隻が一斉に行っているのに、アルコールの臭気が棧橋付近に立ち込めていて、それを吸い込んでフラフラの状態になりかけているのだから。ドラム缶の運搬や燃料の搭載などにどうして自動車やポンプを使用しないのかと、思ったが、この時期急増基地にはそんな設備を備える時間がなかったのか、或いはそのような設備を備える余力が、もう日本に無かったのかも知れないなどと、妙な納得をしながら自分達が使用する艇の燃料搭載に取り組んだものだった。

過密な訓練で怪我也あったと聞いている。艇に搭載する12糧口ケット散弾の実射訓練がある。その訓練の前にロケット弾の構造と固体燃料を含めた座学と組み立て実習をやり、終了後艇に搭載し、ようやく出航となる。

撃発信管は出航直前に火薬庫から受け取るのだが、それを受け取って帰る途中転倒し、持っていた信管が発火して左手の指3本を失った者がいたとか。

人身事故以外はかなりあった。襲撃訓練で標的艦に衝突して艇を破損して沈めたり、艇相互の接触で艇に

穴を開け、浸水で沈めたり、特に航行中エンジントラブルで帰投不能になるケースは多かった。

しかし、そんな事故では叱られたことは殆どなかった。特に襲撃訓練で標的艦に衝突した場合などは、攻撃精神旺盛と誉められこそすれ叱られることはなかった。

自動車エンジンの機構を始め、故障の修理方法は教わった。飛行機のエンジンを習っているので、構造にはそれほど苦勞はなかったが、海水の影響をまともに受けているエンジンは、電気系統の故障が多発したので、それにはかなり悩まされた。

通常訓練には2人乗船なので若干心強かったが、どの艇も酷使して疲れ切っており、何時故障するかと冷や冷やだった。

訓練初期にはエンジンのコントロールに先ず苦勞した。何しろ自動車エンジンを使用しているので、アルコールの燃料ではなかなか調子が出ない。慣れるまでチョークとスロットルの兼ね合いが難しい。しかも、艇ごとに癖があり、手加減が違う。

スピードコントロールがうまく出来なければ、編隊行動など思いもよらない。必死でチョークとスロットルレバーを握る。

変速ギヤが無いし当然後進も無い。慣れないうちは棧橋へ衝突し、艇を破損する事故もあった。

チョークの感覚をのみ込み速度のコントロールに慣れ、艇の行き足や進路変更時のカンが身に付いた頃には、訓練も半ばを過ぎていた。特に夜間の訓練で航行不能になると、通信手段が全くないので一時的に行方不明になる。

エンジンが故障すると修理するのは一苦労、何とか修理に挑戦するが、修理工具や照明器具など満足にない暗い海上で、波に揺られながらでは思うようにはならない。何しろエンジンが海水の影響を受け、電気系統は弱っているので修理は容易ではない。

自力での修理が不能な時、戦時中この特殊訓練海域は漁船さえ入れなかつたので、搜索船が仲間が発見してくれるのを待つ以外方法はなかつた。夕刻出航し大村湾を半周して、夜明け前に「亀の浦」基地に入港する航行訓練は散々だった。

丁度梅雨の季節で、当日は雨風が相当あり、実戦訓練向きとされるような夜だった。

予定の4隻で一グループを作るべく棧橋を離れた後、なるべく早く編成予定の仲間が近寄ろうとするのだが、夕刻の薄暗さと雨に遮られてグループ艇

の判別が難しく、たった4隻の集合だけが意外と手間取った。

一齐に出航した約50隻の艇は、どの艇も同じ色で同じ大きさ、雨合羽を着ている乗員は皆同じに見える、夜間ではどれがグループ仲間の艇か判別は極めて困難だった。

実戦では相互の連絡手段は必要ないので、この訓練でも連絡方法は重視せず、リーダー艇に懐中電灯、他の艇には呼び笛のみだった。懐中電灯の発光信号は、波に揺られ雨に遮られ、呼び笛のモールス信号も、途切れ途切れで相手に届かない。見通しがあれば手信号を使えるが、暗夜ではそれも役に立たず。

出航して左手の岬を過ぎた辺りから、風は強くなり、波も高くなった。その辺りまで来ると、各艇の性能差の影響も出てくるようになり、更に波に揉まれ雨に視界を遮られ、次第次第に離れ離れとなり、お互いを見失う事になってしまった。

訓練に使用している艇は、皆酷使したもので調子はそれぞれ違って、しかも燃料はアルコールなので、これぞという時に力を出してくれない。それに海水の洗礼も受けているエンジンは、電気系統の故障が起きない方が不思議なくらいだった。

こんな悪条件下で艇が故障したら大変である。故障だけはしてくれないと折りながら、必死になってハンドルにしがみ付いていた。

故障で暗闇の海上に取り残されたら、大村湾内ではあるが、手漕ぎボート程の小さい艇を発見するには時間がかかる。

搜索が始まるのは明日昼頃だろう。飛行機による搜索など絶対にならない。そうなると思わず食わずで波に翻弄されながら、20時間くらいは頑張らなければならなくなるぞ、と言いつ聞かせ、夢中で予定コースと思われる方向へ艇を走らせた。勿論風雨の暗夜で陸地の影など全く見えない。

羅針盤があるので方向は判るが、小舟が波に揉まれていては、方向を一定に保つ事は困難であるし、危険でもある。速度感も狂ってしまう。たとえ速度計があつたとしても、波に翻弄されてはどの位の距離を走つたのか全く判断ができない。方向も、速度も、距離も不正確のまま未知の海域で山勘の盲目航行となつてしまった。

どの辺りをどう走つたか判らないまま、夜明けまで走り廻っていたが、とうとう目的地へ到着出来なかつた。

薄明るくなってようやく見え出した山の稜線から判断して、「亀の浦」へ

の方角を見定め、ずぶ濡れで震えながらもほっとして全速で艇を走らせた。結果は、皆単独航行の形となり、夜明けになってからの帰投となった。訓練成果の講評は散々だったが、途中故障した艇も無く全員無事だったことを皆で喜んだ。

訓練終了間近に実施された、「面高基地」へ回航する「総合訓練」では、肝を冷やした事故を経験した。経路は、川棚訓練所を出航した後、大村湾の北部を横断して「針尾の瀬戸」を通り、佐世保湾の入口を駛して、西へ向かい西海岸を南下すると、間もなく面高湾があり、その湾内に「面高基地」がある。そこが目的地。行程は40海里程だが、途中に難関の「針尾の瀬戸」がある。

針尾の瀬戸は、航行の難所として有名なところで漁船等の遭難も多く、ペテランの船頭でも潮時が悪ければ絶対に通らないという。潮の干満の時には大村湾の海水が、この狭い針尾の瀬戸を出入りするので、水面に段差が出来、所々に渦巻きが起きるほど激しい流れとなる。

両岸は断崖絶壁で退避場所はない。しかも、コースを少し外れた所では、海水は渦を巻き、船を翻弄し、岩壁に叩き付けようとする。そんな危険な瀬

戸である。今は「西海橋」が架かり、景勝の地で知られているが、当時は橋も無く、交通の難所で、その頃遭難した船があったが、遺体は発見出来なかったと聞いていた。

2人乗りで出航した我が艇は快調で、「針尾の瀬戸」に入った。この調子ならこの瀬戸も無事乗り切れるものと、安心していった時の突然のエンストである。

特に注意されていたその「針尾の瀬戸」で、「エンスト」を起こしてしまっ

た。今までの訓練でもエンストを起こした事はあるが、何とか修理して自力で帰投していたので、今回も修理しようとしたが、激しい潮流に艇は流され、右側の岩壁があつと言う間に迫って来た。故障箇所を調べる余裕など全く無い。一瞬の猶予も出来ない。同乗の伏島兵曹と2人で急いで小さな櫂と、こんな時のためにと用意してあつた竹竿を持ち、全身の力を込めて岩壁を突っ張った。

岩壁に艇が叩き付けられたら、ベニヤ板製の艇はひとたまりもなく破損沈没してしまう。兎に角岩壁に叩き付けられないようにするしか方法が無い。必死になって岩壁を突っ張った。頑張った。5米程の船だが強い流れに押

されていると、かなりの圧力を受ける。艇の沈没即遭難では遣り切れない。

何時の間にか艇の向きが逆方向に回り始めたが、それを止めようがなかった。この瀬戸では流れが速く、岩壁側

には渦流が起ると教えられていた。その逆流は意外と強く、逆らうことは不可能だった。

こうなったら岩壁との体力勝負である。どの位経ったのか救援艇が来て、曳航が始まった時には、2人とも口もきけない程疲れ果て座り込んでしまっ

た。瀬戸の中間辺りに小島がある。その島のため、その周辺は特に潮の流れが激しく複雑であるから、と特別注意があつた、その手前でのエンストだったのである。

同様のケースが3件あつたほか、艇を沈没させた事故もあつた。エンストを起こした艇を見た指揮官の乗った艇が、急遽駆け付けたが、潮の流れが激しく複雑だったためか、指揮官艇が故障艇に激突、故障した艇は破損沈没してしまつた。

震洋艇は、敵の船舶に体当たり攻撃をかけ、その衝撃で艇の前部が破損したら、そこに仕掛けてある電気回路が通じて電気信管を動作させ、炸薬に点火し、更に積んである250キロの爆

薬を爆発させる仕組みのため、艇は壊れ易く作つてある（注1衝突で爆発しない時のため、手動操作で撃発信管を動作させる装置も用意されていた）。

この回航で、震洋艇の訓練教程は終了した。

2カ月の訓練はあつと言う間に過ぎた。殆ど無我夢中で「死ぬ訓練」に没頭していたわけだが、終わってみると何となく爽やかだった。

最後に気になつたのは、転勤先の基地が何処になるのかだった。最終の地が何処になると同じ事だと判つていても、何となく早く知りたかつた。

その基地から遅かれ早かれ出撃する事になる。そして、その地へは再び戻つて来る事はないものと承知していても、その場所が何処になるのが気になつた。

「進出」

訓練は終了した。編成も決まり、部隊の名は「第59震洋隊」と言うが、何処に所属するかは知らされない。あと最後となる地へ向けて出発の命令を待つのみだ。

「身辺は出来るだけ綺麗にしろ」と言われて成程と納得。2カ月前担いで来た「衣囊」へ洗面用具等を放り込めば、終わってしまう程身の回りの整理は簡単である。兵舎内の清掃を含め瞬

く間に終了した。

手紙を出すことも出来ないし外出も無い。誠にさっぱりしたものだった。転出先の基地が何処になるかが矢張り気になる。

明日にも出撃命令が出るかも知れないような最前線基地か、それとも未だにしろ結果は同じで、ただ時間の差があるだけだ。そんな事は判つていると言いながらも、何となく早く知りたいところに若さが残っていたようだ。

関東方面らしいとの噂が出て、九州や関西方面出身者は残念がり、関東、東北方面出身者は喜んだ。

しかし、もう休暇で家に帰る事や、親に会うなど出来ない事を理解していても、少しでも故郷に近い所が何故か安心感を持たせてくれる。

表面は、人生を達観したような態度をとつていても、人間らしさと言うか人並みの感情は失われてはいなかった。

いよいよ出発が決定してから雰囲気は一変した。これから自分達が使命を果たすための具体的な行動に移るわけで、訓練中とは全く違った集団となつていった。

今までに体得した技能を国の為に如何に発揮するかだ。出撃命令が出たら

生還は無。この祖国を護るために、親兄弟のために、一命を捨てるのだと純粹に心に誓った若者になっていた。この頃にはもう死に對しての不安や恐れは完全に乗り越えていた。

「特攻訓練」を終了した事で高等科の特技章を貰った。

海軍では、下士官と兵はそれぞれ相対する職務について専門教育を受け、その技備で、普通科と高等科に分けて「特技章」を与えていた。普通科は一重桜、高等科は八重桜のマークを左腕に付けた。

(編注)昭17年勅令第六一一号により改正されたもので、以前は各科毎に異なるマークであった。

このマークは言わば優れた技能を持つ者の印で、かなり評価されていた。その八重桜を付けた事で一段と自覚が高まっていた。

(編注)階級章も統一されて、右腕に付けた。兵種識別は、階級章の中に桜マークの色メタルを付した。兵科―黄色、機関科・工作科―紫色、飛行科―青色、整備科―緑色、主計科―白色、看護科―赤色、技術科―蝦色、軍楽科―藍色)

川棚臨時魚雷艇訓練所を出発する予定日の前、佐世保軍港を狙った空襲があったので、行動計画に若干の変更が

あったが、米を運んできた運搬船に便乗して翌日の早朝佐世保へ。棧橋から線路沿いに歩いて直接ホームへ上がった。

佐世保の被害は部分的だったようだが、今まで空襲など直接経験した事が無かったので、空襲の凄まじさを目にして、受けたショックは大きかった。戦況が深刻になっている状況を肌で感じて、我々の任務の重要さを再認識した。この時、佐世保に実家があった同期の井出清澄兵曹の家族の事を皆で心配したが、無事を確認出来てほっとした。

佐世保から博多まで一般車輛を利用。博多駅では4時間程待機。専用車輛を増結した貨物列車で深夜に出発した。

専用車輛は我々部隊員のみ、艇隊長と搭乗員他を含めても60名程、生死を共にする「最後の仲間」達だけの移動で、何となく落ち着いた気分だった。

途中通過した駅があるかと思うと、何時間も停車する駅もあり、空襲で被害にあった駅や焼け跡の生々しい町を目にしながら、行き先も知らないまま列車に身を任せていた。

どの辺りだったか記憶に残っていないが、線路上に停車していた時、かなり離れたホームに女子学生の一群を見

付けて手旗信号で呼び掛けてみた。あの頃の学校では手旗信号を教えていたようで、すぐに手旗信号で応答してきた。皆で歓声を上げ、他愛ない言葉を交わして停車時間を楽しんだ。

そんな些細な事だったが今でも覚えているのは、相手が年齢も近い女子学生だったためか、厳しい軍隊生活の中で今まで味わえなかった解放感があったからか、その時第1艇隊長高橋俊少尉(予備学生法科出身)が、何事も無いような態度で居てくれたためか。今思うと、青春時代の思い出としては何とも他愛の無い事だったが、これが16・17歳で死を約束した、特攻隊員の人生の一齣かと考えると、うら悲しい気にもなる。

大阪を過ぎて早朝大津に到着した。昭和20年7月2日の早朝だったが、「滋賀空」から握り飯の差し入れがあった。弁当を運んで来てくれたのは、滋賀空の14期生だった。隊員の中に顔見知りか居てお互い奇遇を喜んでた。

列車は品川止まりだった。夜に入っではいたが、高橋艇隊長の号令で、50人がそれぞれの衣囊を担いで線路を横断し、隣のホームへの移動を強行した。

電車を乗り換えお茶の水へ。お茶の水に乗ったのは貨物列車の最後尾に増結した客車だった。

千葉方面に向かっているのは確かだが、何処へ行くのかわからない。

千葉でストップ、車中泊となった。翌朝、目的地へ向けて走り出した。川棚を出発して4日目である。ここまで来れば房総半島だろうと、少し気楽になっていた時、突然空襲警報が出た。列車はトンネルに入り停車したが、我々の乗った増結車輛は何故かトンネルからはみ出してた。

このトンネルがどの辺りだったのか確かでないが、停車左側の土手の中腹に山百合を見付けた。たった一輪だが、その花の白さが目に染みて、急に手に入れたくなり、夢中で土手をよじ登り、折ってきた。空襲警報中であることや、列車が動き出した時の事など頭に無かった。その後、花の白さに感動して折角手にしながら、「百合の花」をどうしたか思い出せない。

7月3日16時頃、洲の崎海軍航空隊に到着。そこで、我々の基地の整備が完了するまで、待機する事となった。

7月10日進出先が初めて示された。我々の所属は、「第12突撃隊・加知山派遣隊」となっていたが、移動の途中で、「第18突撃隊」所属に変更された由、但し派遣先基地は変更なしとのこと(編注)第7特攻戦隊第12突撃隊

加知山派遣隊は、独立して第18突撃隊

となり第1特攻戦隊に編入された)。基地は、房総半島最南端の洲崎灯台より3稜程手前、「波佐間」と言う小漁港の村落にあり、設備は殆ど完成しているという。

若干の整備作業が必要と言われたが、先任艇隊長も現地をまだ確認していなかったたので、「若干の整備作業」がどんなものか、その時、気に掛ける者は誰もいなかった。

しかし、それが後で我々をかなり苦しめる事になろうとは知る由もなかった。

7月11日、荷物はトラックで先行し、我々は徒歩で目指す基地へ出発。目的地は此処から10稜程だということで元気に任せて歩き出した。

砂利道を南へ歩くこと2時間余、真夏の太陽は容赦なく砂埃と一緒に我々を悩ましてくれた。時々右に見える海を見て安心はしていたが、人もまばらにならなってきた。部隊本部に借り上げてあるという漁業協同組合の事務所への道を探ねた。

小さな村落の途中で右折し、緩い坂道を150米程下がると海が見えた。海辺にある漁業協同組合の事務所はずぐに見付かった。

搭乗員用の宿舎へ案内してもらおう。

その宿舎も民家を借り上げた2階建ての一軒家だ。本部から50米程の近さで道を隔てて漁船の船着場がある。基地としての条件は良い方だ。早速事業服に着替え一息入れた。遂に最後となる地に到着した。

(編注)終戦間際には本土決戦に備えて、太平洋岸外に震洋・蛟龍・海龍・回天等が配備されていた。横須賀鎮守府所属

第1特攻戦隊

●第11突撃隊

●第15突撃隊

●第16突撃隊

●第18突撃隊

●横須賀突撃隊

第4特攻戦隊

●第13突撃隊

●第19突撃隊

●八丈島突撃隊

第7特攻戦隊

●第12突撃隊

●第14突撃隊

●第17突撃隊

呉鎮守府所属

第2特攻戦隊

●光突撃隊

●平生突撃隊

●大神突撃隊

●笠戸突撃隊

●第21突撃隊

第8特攻戦隊

●第24突撃隊

●第23突撃隊

●第22突撃隊

舞鶴鎮守府所属

●舞鶴突撃隊

大阪警備府所属

第6特攻戦隊

●第22突撃隊

佐世保鎮守府所属

第3特攻戦隊

●川棚突撃隊

●第31突撃隊

●第34突撃隊

第5特攻戦隊

●第32突撃隊

●第33突撃隊

●第35突撃隊

鎮海警備府所属

●第42突撃隊

以上の外に済州島、父島、母島、鬼

界ヶ島、奄美大島、宮古島、石垣島、台湾、馬公、舟山島、海南島、香港及び大亜湾、厦門にも震洋艇部隊が配備されていた。

体験記③(完)「甲飛だより」85号

「基地整備」

まだ震洋艇は到着していない。基地の点検作業は明日からとなった。艇は台車に乗せて横穴に格納、隠蔽して敵襲を避ける。「出撃命令」で艇を搬出し海に出す。

艇を海に出す「すべり」は完成していた。「すべり」は海に向かい真っ直ぐ延ばしたコンクリートの傾斜路で、艇を台車ごと容易に海に浮かべる為の設備である。

格納壕は道路を挟んで並んでいる数軒の民家の裏山に12本の横穴が掘られていた。その横穴は震洋艇50隻を格納するほか食料等の保管庫、居住区、通信室など非常事態に対処出来るように考えられたものだった。

艇を迅速に搬出出来るような状況に整備されていなかった。また壕の入口

は台車に乗せた艇を、自由に出し入れ出来なければならぬが、特攻兵器である艇の長さや幅等の情報が工事側に伝わっていない、点検すると数個の壕に問題があることが分かった。

自分達の命を左右する艇を安全に格納しておく場所である。出撃命令が出れば一刻を争うことになる。その時につまり争うようなことは絶対に許されな

い。震洋艇の重量は、爆装すると1.5トンには優に越える。搬出路の半分程は轍部分だけ舗装されていたが、残りの部分は全くの未整備で、その部分の補修も重要だった。出入口や搬出路を完全に整備するのは、我々と基地整備隊員でやらなければならないことになった。

それが意外の大仕事と判り一時はやれやれと思ったが、若さがあり気合も十分上がっていたので早速取り掛かった。

整備作業は一日も早く終了させないと問題がある。艇の到着は何時になるか判っていないが、空襲に備えて到着時に直ちに格納壕に搬入を可能にしておかなければならない。

不慣れと疲労が重なり、骨まで見える大怪我で「勝浦」の病院で手当てを受けた者、盲腸炎になったが手術を

断って葉で散らしてもらった者、その他色々あったが、誰もが出撃に取り残されたくない一心から回復は早かった。

そんな作業が続いている時、震洋艇他受領の命令を受け、艇隊長と私ら13期の搭乗員4名が先発で横須賀海軍基地へ船便で出発した。

最優先で確保しなければならぬのは艇へ搭載する250キロの爆薬だ。この爆薬は震洋艇専用で製造されたもので、他に転用出来るものではない。爆薬が装備されない艇は、単なるモーターボートに過ぎない。当然出撃は出来ないし、我々の任務も宙に浮く。爆薬だけは絶対に持って帰らねばならないと意気込んでいたが、その爆薬は意外と順調に確保出来た。

他にも必要な武器があった。震洋艇に搭載する12種のロケット散弾、艇隊長艇に搭載する13耗機銃とその弾薬、基地整備隊が必要とする武器や弾薬等々だ。

部隊長、艇隊長は武器の確保に懸命に動き回っていた。

この時期には武器弾薬の在庫が不足していたので、要求数量通りすんなりと渡してもらえない。

我々4人共若い下士官、半長靴を履いていると飛行兵と判るし、「何々

突撃隊」と言えば特攻隊と判るので、倉庫係を説得しやすい。倉庫係が気を利かせて何となく席を外してくれるその時に員数を揃える。

横須賀の「逸見小学校」の、がらんとした教室に数泊、空襲で深夜避難した事もあったが、確保した兵器などの輸送手配を、何とか済ませる事が出来てほっとした。

「艇受領」

予定日程が若干遅れたので、急ぎ震洋艇の試運転に出発した。

目的地は東京町屋にある造船所、トラックに米1俵、麦1袋、うどん粉1袋、油1升、生鮮野菜類等を積み込み、一路東京へ。

4名が交替で造船所の社員寮にお世話になることになっていたので、本部付の村上兵曹長が気を使って用意してくれた。当時としては十分と思われる食料品を持ったので、安心してトラックに乗り込んだ。

途中海軍省に立ち寄った時、空襲警報に遭い、近くにあった防空壕に避難した。その時、油の瓶を割らないように持っていた者が、油瓶を持ったまま防空壕に飛び込んだ。狭い入口で瓶を割り油を失った。もう天婦羅は食べられないと諦めていたが、寮では何回か天婦羅を作ってくれた。

造船所は隅田川に面した所に在り、「木村工作所」となっていた。

艇は5隻が出来上がり、検査を待っていた。早速型や内部の点検、各部のチェックを済ませたあと、性能試験、いわゆる試運転にかかった。

試運転では船体やエンジンの具合は勿論重要だが、速度がどの位出せるかが最も関心のあった点だ。敵船に襲撃をかけた時、チョロチョロ走っていたのでは、目的を達する前に敵の餌食になってしまう。速度は早い程良い。

隅田川がほぼ直線になっている所対岸に1杆間隔で指標が2本ずつ立ててある。その1杆間を全速で走り抜け時間を測定する。

2人で組み、1人が運転、計器など何もないので、ひたすら如何に速度を上げるかに集中する。1人はストップウォッチで2本の指標間を通過する時間を測定し、「時速何ノット」と算出して記録する。

どの艇も快調に走ってくれた。かなりの時間を掛けて念入りにテストを繰り返したが、全艇欠点はなかった。

当時の小型艇としては抜群の23から26ノットも出た。新しい艇の素晴らしき性能に満足だった。

今まで乗っていた艇は、訓練で酷使したもので、しかも燃料はアルコール

だった。試運転には実戦時と同じガソリンを使用した。それに、船首内に爆薬に見合う重りも乗せていないので条件はいい。訓練艇に比べ驚く程の走りをしてくれた。快走する艇で今までに感じた事のない爽快さを味わったが、その爽快さが自分達の死につながるのだとは考えずに、試運転に没頭していた。

艇のテストは10隻程で終了。あとは製造が出来次第、次のメンバーに引き継ぐ事になった。試験期間は4名で1週間程だったが、艇が完成するのを待っていたこともあり、時間に余裕があったので、念入りに検査が出来た。試運転期間中は我々搭乗員4名のみ。

年齢は皆20歳前だが下士官なので、一人前の扱いを受け、入湯、外出も出来、煙草や酒も支給されていた。それで、行動は自主的判斷に任されていて、自由出来る時間が十分にあった。羽を伸ばそうと思えばかなりの行動が出来たわけだが、4名とも東京は未知の世界。町を見物しようとして出てみたが、周りはかなりの焼け野原となっていて驚いた。

同期生だけの気安さと若干の探求心から、足を伸ばしてみる事になったが、地図の用意もなく、方角さえ判らない。取り敢えず市電が道路を横断し

ている、近くの駅(今の町屋駅前)で来た電車で構わず乗り込んだ。

「市街電車」に乗るのは4人共初めてという田舎者揃い、行ける所まで行ってみようと終点まで。終点の周辺は閑散としていて薄暗く、コンクリートの建造物が若干見えるだけ。東京でもこんな寂しい所があるのかと驚き、また同じ電車で引き返した。

乗る電車を間違えたと見たのか、軍人扱いをしてくれたのか、電車賃は払わないでいいと言う。初めて乗った市電が無賃乗車だった。

またある日、市電の駅近くで行列があったので、何事かと後に付いてみたら、店の人が「兵隊さんこちらへ」と言うので付いて行くと、小屋の裏口から中へ、「国民酒場」という、つまみ無しでビールを一杯ずつ優先的に飲ませてくれた。

焼け野原の一角で立ち飲みとは言えビールが売られていて驚いた。その時のビールの味は唯々苦かった。勿論幾ら払ったかも忘れてしまった。

我々の次の検査チームは、転動が関東で喜んだ14期生で、その中に東京都下出身の木村保治兵曹がいた。

ある夜、西の空が赤くなった。木村兵曹は実家の安否が気掛かりになり、一晩がかりで実家までバスの無くなっ

た道を走った。翌朝には寮まで帰り着くという離れ業をやつてのけた。

また、ある日の夕方、隅田川を越え荒川まで足を伸ばした事があり、帰りに別道を通り遊廓に迷い込んでしまった。物珍しさを隠しながら歩き回った。不思議にその一角は空襲の被害が及んでいなかった。

造船所の社員寮で食事に大豆の絞り粕が入ったご飯が出た。我々は麦飯には慣れてしたが、大豆の絞り粕は喉を通らない。半分ほど拾い出してしまった。

賄いの小母さんに、麦はどんなに入れてもいいが、これだけは(大豆油の絞り粕とは知らなかった)勘弁して貰いたいと話したところ、「兵隊さん達まだ若いから言うが一般の人は、皆これを食べているんです。食べられるだけいいと思って我慢しているんです。判って貰いたい」と言う。そう言われると返す言葉がない。仕方なく、我々は今造つて貰った船の検査をしているが、実は特攻要員である旨をそれとなく話したところ、小母さんは黙って聞

いていたが、そのまま無言で立ち去った。翌日から大豆粕ご飯は出なくなつた。

検査が終わって引き揚げる時、小母さんが、「私の子供位の年齢だね、気

をつけて」とだけ言ってくれた。

「出撃準備」

検査を終えて基地に引き揚げたが、艇はなかなか到着しない。8月初旬漸く震洋艇が貨車輸送で館山駅に到着したとの報せが入った。

真夏の太陽が容赦なく照りつける中、急遽館山駅へ駆け付けた。

あの隅田川で我々が試運転をした震洋艇が、真つ黒のシートで覆われて無蓋貨車5台に積まれ、引込線に静かに停っていた。

他に荷を載せた貨車はない。早く運び出さないと目につく。空爆の対象にならないよう館山航空隊のボンドまで、トラック1台でピストン輸送することになった。トラックに載せるには、貨車をチェンブロックのある所まで移動させなければならぬ。

貨車は簡単には動かない。鉄の太いボールで線路と車輪の間を力一杯こじめる。なかなかうまく出来ないが、少しでも動き出せば、人力も効いてくる。5人で肩を入れて踏ん張った。

線路の転轍機でポイントを切り替え、チェンブロックのある線路に押し行くと、何時、空襲があるか判らない。気は焦る、昼食は抜き、炎天下喉はからからに、何故か服や顔まで汚れ放題、なんとか事故もなく5隻を運び出した。

館山航空隊のボンド脇には大型クレーンがあり、トラックからボンドに降ろすのは順調に進んだ。

後は艇を基地まで海上輸送する、当然夜間の作業となった。

夕刻、基地から曳き舟で館山航空隊へ、震洋艇の曳航準備は2時間程で終了し、出発時間調整のため、ボンド脇で待機中、空襲警報が発令され、基地の照明は全て消え、滑走路の誘導灯も消されて真つ暗闇となった。

その空襲警報中飛行機が1機着陸して来た。誘導路の方向を間違えたのか、我々が待機していた所へ向けて進んできた。その飛行機は降り切れずにボンドに落ち込んでしまった。

「彗星艦爆」だった。真つ暗闇の中の一瞬の出来事だった。貴重な飛行機が1機駄目になったのかと思つたが、搭乗員はずぶ濡れになりながらも直ぐに這い上がって来たのでほっとした。

その搭乗員は全く慌てることなく、落ち着いた態度で司令部の場所を尋ね、濡れた書類を下げて何事も無かつたような態度で歩き出した。

その後ろ姿を見ながら、あれはきっと我々の大先輩で歴戦の勇者だろうと感心、自分達もどんな事に遭遇してもあのように堂々と落ち着いていられるかと少々不安になった。

空襲警報の解除待ちで震洋艇の曳船出発は夜更けになった。波佐間の基地へ向けゆっくりした速度で艇を破損しないよう慎重に出発。

途中、魚の定置網に震洋艇のスクリーン防護金物を引っ掛けたほか、何事も無く基地まで到着した。

明け方近くなっていたが、待機していたグループと協力し、直ちに艇の引き上げ作業にかかった。

夜光虫が怪しく光り、海水の動きを美しく幻想的にしてくれる。そんな中静かに作業を進めた。

艇の引き上げ作業は意外と手間が掛かる。台車を「すべり」に引き出し、水面下1米程の所に潜らせて置く、艇をその台車の上に移動させる、艇と台車の位置が合ったら艇の上から4本のロープで台車を引き上げる、そのロープで台車を艇に固定する。

手順はこれだけだが、水の中の作業員4名と艇の上の4名の連携が鍵となる。

台車は1.5トン以上の加重に耐えられるような頑丈なもの、水中でも簡単には持ち上がらない。また台車を艇の所定の位置に確実に固定しないと、運搬中に艇がずれ、転覆する危険もある。

この作業は訓練ではやっていない。

一度出撃すれば二度と帰る事はないからだ。出撃の時は、艇を台車に載せたまま「すべり」から海に押し出す。艇が海に浮かべば台車を付けたまま出発。水深が十分ある所で台車の固定索を手動で切り離し、台車を海中に捨ててしまおう。再び帰投する事はないから台車は不要なのだ。

まだ周囲は薄暗い。手元や水中の台車の様子は、はっきりとは見えない。それでも薄明るくなる頃には5隻の艇は、台車で山側の格納壕に運び込み終えた。

漸く5隻の震洋艇が確保出来た。これまで新設基地に必要な整備作業や、物資の調達に主力を注いでいたので、それらはほぼ目鼻がついていた。隊員150名の主食の米や麦の他、非常食、それに主要な艇の燃料もドラム缶数十本（ハイオクタン）の航空機用ガソリン）を、館山航空隊から運搬し確保した。

次の作業は到着した艇を、何時でも出撃出来るようにしておく事である。猛暑の中早速震洋艇の爆装作業に入った。爆装作業開始で隊全体が緊張した空気に包まれた。作業は慎重になる。

250キロの爆薬を扱う作業である。手違いをすれば爆発を起こしかねない。若し1個でも爆発が起きると、

他の250キロ爆薬50個総てが誘爆する。その誘爆で艇の燃料用ガソリン数十本のドラム缶にも引火する。ほかの武器弾薬も巻き込んで大惨事となる。山の横腹に造った12本の格納壕の殆どは潰れ落ち、山は変形し、また付近の村落、住民は壊滅的な被害を受ける事になるだろう。当然我々も爆死する事になる。そんな事故は絶対に起こしてはならない。

その頃になって、広島に新型の爆弾が落とされたという情報が入った。新型爆弾がどんなものか、被害がどの程度あったのか等は判らない。

新型爆弾が原子爆弾と知ったのは、戦後暫くしてからだ。また、爆装作業中誘爆が起きて搭乗員50名全員が犠牲になった事故が、四国のある震洋艇基地であった事も知った。

重い爆薬を扱う爆装作業も、我々が中心だが、素人には出来ない事もあった。

250キロの爆薬を吊り上げるため、丸太3本を組み合わせそれにチェーンブロックを取り付ける、この仕事は経験のある召集兵がやってくれた。まず、250キロの爆薬をチェーンブロックで吊り上げる。その下に台車に載せた震洋艇を運び込む、吊り上げてある爆薬の位置を合わせるのだが

中々うまくいかない。位置が合ったところで船倉内へ爆薬を静かに下ろし、ボルトで船底に固定する。

起爆装置の取り付けや電気配線は、別の場所で行うため、艇を移動し、次の艇の爆装に入る。

爆装作業が終わった日の夜中（8月1日）「敵船団接近中」との報で「震洋艇出撃」の命令が届いた。出撃準備が出来ているのは僅か5隻だけ。搭乗員50名の中から5名を指名しなければならぬ。

部隊長は横須賀に出張中、高橋先任艇隊長に指名の苦悩がのしかかった。暫くして幸い敵船団来襲は誤報で（編注）伊豆大島見晴所が多量の夜光虫を船団と見間違えて報告、「震洋艇出撃用意」が取り消され、高橋艇隊長は安堵の胸を撫で下ろした。

全員出撃なら一声の「命令」で済む。しかし、若い搭乗員50名の中から5名を指名し、先に死に向かわせるのは限りなく辛い。自分が率先突入するとはいえ苦しかったと、戦友会で会う度に話される。

「終戦」

8月15日の正午前、「搭乗員全員集合」が掛かった。

玉音放送があるのでラジオを聴く事になり、近くの民家の庭に集まった（搭

乗員宿舎にラジオは無かった。戦局が厳しくなっているので天皇陛下の激励があるのだから位に思っていた。ラジオの音声は小さく雑音が多くて、放送の内容が殆ど理解出来なかったが、伝わって来た雰囲気は何となく異様だったので、本部前に集合した。

部隊長は横須賀へ出張中、先任艇隊長の高橋少尉から「放送は米英に降伏する事になったとの内容だ。しかし、第18突撃隊本部からの命令がまだ届いていない。戦争が終わった事が確認出来るまで現在の作業を続行する。なお、軽率な行動は絶対に慎む事」との指示が出た。その時の高橋艇隊長の沈痛な面持ちが今でも忘れられない。

一体これはどういう事か、頭の中は真っ白になり、残っていた僅かな思考までも完全に停止した。死に向かっている今の時間だけが総てだと考えていた事が根底から覆った。

祖国のため最後まで戦う、その先駆けとなり、特攻の配置に就いたばかりだ。若さで人並みの迷いを乗り越えて来たと自負していた。ただ我々の死後祖国がどうなるのかは、神に祈るだけだった。

天皇陛下の異例の放送がどうしても気になった。ソ連が参戦したことは、14期生の無線担当から聞き出していた

し、特殊爆弾の威力もかなりのようだとの噂も出ていた。

我々は特別な任務を持っている。最後を誓ってこの任務に就いた。簡単に心の切り替えが出来る訳がない。眠れない一夜が明けた。皆寡黙のまま作業を続行することで、不安を紛らそうとしたが、どうしても蟬りが消えなかった。

命を捧げて護ろうとした日本の国はどうなるのか。我々はどうしたらいいのか。心の中で悶々が大きくなるばかり。飲めない酒も飲んだ。煙草も無理に吸ってみた。虚しさのしかかっていた。

高橋艇隊長の家伝の脇差で竹を滅多切り、鞘に納まらなくなったがお咎めはなし。

学徒動員で海軍に身を投じた高橋艇隊長の説得力は大きかった。若い搭乗員も次第に落ち着いて来た。「無条件降伏」という完全な敗北だが。

敗戦処理作業にかかった。涙ぐみながら、時計の針を無理やり戻す作業が始まった。

自分が命をかけるものはこれしかない、誓って水上特攻に身を投じてから流して来た汗は、一体何だったのか、滲み出る涙が止められない。総てを無

意味にする過酷な、しかも悲しい作業だった。

そんな時、噂か真か判らないような情報が流れ始めた。

志願兵は呉で強制労働となる、特攻要員は全員捕虜となる、召集兵は帰すか志願兵は帰宅出来ない、まだ戦争を継続するのだと海軍航空隊が動いている等々。

● 部隊長から指示が出た。

● 召集兵は年配であり、家族もあるのので、早急に帰宅させる。

● 特攻関係兵器の処分は早急に行う。

● 搭乗員は各種兵器の処分が終わり次第帰宅する。

● 担当士官は最終処理をして帰る。

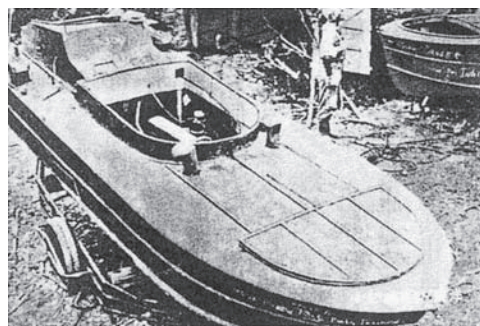
これで搭乗員は当面作業の目安が出たので、漸く動き出した。

100名の基地隊員は殆ど年配者だったので、早速それぞれの故郷へ引き揚げた。

我々が出撃した後、基地隊員は陸戦隊として戦う事が決まっていただけに、さぞ安堵した事だろう。家族のもとへ帰れる事で雰囲気は明るかった。我々は、特攻兵器は絶対に敵国に渡してはならないと、爆装を終えた震洋艇から処分を始めた。

艇は海没させる事になり、壕から引き出し「すべり」から海へ、これは出

撃時と同じ動作だ。考えると虚しさがつる。洲崎灯台沖まで曳船し、水深が十分ある所に沈めた。



終戦時の震洋

船底に開けた穴から海水が勢いよく入ってくる。震洋艇が静かに沈んでいく、本来なら自分と運命を共にする艇だ。無言のままに敬礼、涙が滲み出てくる。種々の想いが走馬灯のように頭を巡る。

隅田川で試運転をした。貨車から下ろして真夜中の海上輸送、そして250キロの爆薬を積み込んだ。短い期間だったが、密度の濃い思い出が残っていてやりきれない。

残った爆薬や兵器類の処分を終え、身辺整理に急ぎ取り掛かった。軍事に關した記録物等は総て焼却との指示

で、予科練時代の教科書やノート類、日記その他、私物でも特攻に関する記録があるものは総て灰となった。残ったのは僅かな写真と、生涯絶対に忘れ得ない思い出だけとなった。

第59震洋隊「真鍋部隊」も解散。もうこの地に留まる事は許されない。後は担当士官にお願いして帰郷する事となった。

「復員」

搭乗員は全員故郷が内地なので、それぞれ自分の家に、支障なく帰れる事がはつきりしてお互いにほっとした。

別れの前夜飲んだ酒は実に味気ないものだった。故郷へ帰れるのに皆心底から嬉しいという気持ちになれず、半ば放心の状態が続いていた。

特攻という死を約束した環境から、突如蹴落とされた形で、無理もない事だった。

学業を中断されて軍隊に来た予備学

第41回豫科練戦没者慰霊祭

評議員 小倉 利之

平成20年11月9日(日)、財団法人「海原会」(前田武会長)主催による第41回豫科練戦没者慰霊祭が、秋の紅葉が

生の士官達は、「学業に戻る」という冷静さと、心の余裕をしっかりと持っていたようだが、若い我々搭乗員は中学校から学業を擲って志願して来た者ばかり、再び学業を続けるなど思いもよらない事だった。

山梨の田舎に帰る私は途中で何事かあった時のためと、米と携帯食糧少々を「帽子函」に入れた。

台風で道路が不通となっていたので、8月26日に船便で基地を出発し、「勝山」まで行き、そこから列車に乗車する事になった。列車は少々混んでいたが我々50名の搭乗員はなんとか乗り込む事が出来た。

敗戦から僅か10日程しか経っていないのに、今までは若いが軍人と見てくれて、ある程度優遇し、或いは多少の尊敬さえ示してくれた人々の目が何となく違ってきていた。

東京で別れ、それぞれの故郷へ。

福岡出身の同期「秀谷茂輝」兵曹が、私の手を握って「死ぬなよ」と一言。「貴様こそ死ぬな」と返したが、その時「金子分隊長」がくれた香取神宮のお守りの事が頭をよぎった。

お互いにもう再会する事は無いかも知れない、と思いつつもそれは胸にしまい込んで別れた。

僅か2年弱の軍隊生活だったが、その間に社会の状況が急激に変化していた事を、全く知らなかった。

さらに、特攻に志願してから無欲の心境にもなっていたから「今浦島」状態になっても当然だった。

満15歳で予科練に志願して2年弱、特攻配置に就いていながら生きて帰って来た。

飛行機乗りには志願した時から、生死については深刻に考えた事はなかった。特攻に志願し、大村湾で特攻訓練を受けるようになってからは、「生き

誠に素晴らしい編隊飛行でした。

式典は、海原会実行委員の周到な準備の下に、陸上自衛隊の絶大な支援を受けて実施されました。

慰霊祭式次第

参列者着席

慰霊飛行

式典開始

て帰る」など全く考えなくなっていたのに。とうとう故郷へ、そして家に帰って来てしまった。両親は心から喜んでくれた。とにかく、生きて帰って来た。

第59震洋隊・真鍋部隊の構成175名
攻撃(突撃)部隊

部隊長・真鍋康夫中尉(海兵73期)

艇隊長・高橋俊少尉(予備学生)

〃 山本昇少尉(〃)

〃 三浦武少尉(〃)

〃 西村心華候補生(予生)

搭乗員53名(甲飛13期・14期生)

・本部

機関科村上善治兵曹長以下18名

・整備隊

機関科鈴木津兵曹長以下36名

・基地隊

砲術科佐藤博志兵曹長以下60名

以上

開会の辞 実行委員長海原会副会長

横溝 潔

国旗掲揚(国歌吹奏)

献 火 武器学校教導隊員

高松宮妃殿下御歌奉詠

阿見詩吟会 師範 佐藤昌明

式 辞 海原会会長 前田 武

追悼の言葉 同窓代表海原会理事

藤野雅之

献花 来賓・遺族・各会代表

遺族の言葉 遺族代表 新井四継

若鷺の歌奉唱 参加者全員

奉納行事 演奏 陸上自衛隊

勝田施設学校音楽隊

舞踊(若鷺の歌)

地元婦人会有志

閉式の辞 実行委員長海原会副会長

永瀬喜三

式典終了

雄翔館参観

直会開始 司会 事務局長 羽田俊一

謝辞 海原会会長 前田 武

来賓挨拶 武器学校校長 新村暢宏

乾杯 阿見町 町議会議長 諏訪原実

アトラクション

吹奏楽演奏 勝田施設学校音楽隊

常陸陣太鼓 武器学校隊員有志

フラメンコ

阿見町フラメンコ同好会

歌謡・軍歌メロデー

銀座の歌手 田中ジョージ

閉会の挨拶 事務局長 羽田俊一

永瀬喜三

式典は、厳粛に斉整と実施され、また直会は、散華された皆様と御遺族、同窓各位とが、和やかに共に過ごしている様子が目に浮かぶような時が過ぎて行きました。

今回の慰霊祭は、式典も直会も共に厳粛に行われた中にも、過去の慰霊祭にはなかった和やかな雰囲気があった

ような気がしてなりません。その理由を考えた結果は、次のような発表があったことが要因ではないかと思われます。

阿見町長川田弘二氏の来賓挨拶における内容に、阿見町豫科練記念館の話があったことではないかと推察いたしました。

豫科練出身者は、前途洋々たる若者が、殉国の精神の赴くまま、厳しい訓練を経て祖国防衛の任務に就いて散華された皆様の御霊をお守りすると同時に、歴史に残るこの魂を後世に残すために、雄翔園の近くに、阿見町豫科練記念館を建立されるとのこと、非常に喜ばしいことと思われました。

10月には起工式が行われ、川田弘二阿見町長、海原会代表関係者や団体の代表等が出席して安全祈願祭が行われたと聞いております。

建物本体は、来年9月に完成し、再来年2月にはオープン予定とのこと

です。

雄翔館の展示物は、豫科練戦没者の遺書・遺品・遺影等、「心」に訴える物を展示し、新しい記念館には、豫科練の成り立ちから教育・訓練・飛行練習等、更に卒業生の活躍を中心にして、阿見町との関わり合いを展示するとのこと。

このことは、豫科練に対する一般市民の関心を広め、戦没者の偉功の伝承効果をも、後世の方々になお一層高めることになるものと考えます。それは、戦没者が、平和を維持することの大切さを、心から折っていたところからも、青少年の心に残るものか芽生えてくるものと感ぜずにはおられません。

また、世界の平和と日本の安泰を希求する戦没者の存在は、あの悲壮な戦争を再び繰り返さないことを強く願う日本民族の記憶に長く留められるべきものと考えます。

本日の慰霊祭は、そのことが脳裏から離れませんでした。

「海原会」「阿見町」「武器学校」関係者に心から敬意を表したいと思えます。

来年もこの時期に再び集い、立派な慰霊祭を挙げていただきたく、心から願うのであります。



平成20年度

明野忠魂塔慰霊祭

理事 栗原 宏

平成20年10月10日(金) 11時から、陸上自衛隊明野駐屯地内の忠魂塔前において行われた慰霊祭に、当協会会長代理として出席した。

この忠魂塔には、1490柱の英霊が祀られており、このうち15柱は、陸上自衛隊明野学校在職中に殉職された自衛官である。このため、自衛隊と明野忠魂塔顕彰会の共同で慰霊祭を執行しているが、準備と進行は陸上自衛隊の協力が大きく、忠魂塔顕彰会の関係者は年々減少しているようであり、配布された参列者名簿によると、今回の出席者のうち、顕彰会関係者は150名で、他は自衛隊とその関係者で、総勢約300名であった。

式典は、国歌斉唱に始まり、儀杖隊の捧げ銃に合わせて全員で黙祷をした後、殉職者に対して航空学校長鎌田陸将補から追悼の辞を捧げ、続いて顕彰会会長代理髙原久生氏(長年会長を務めた谷口正義氏は平成20年9月13日に逝去された)が、明野関係の陸軍航空の英霊に対して追悼の言葉を捧げた。

次いで、御遺族と参列者全員が献花をした後、陸上自衛隊中部方面(伊丹駐屯)音楽隊による「抜刀隊」ほか3曲の軍歌と一昨年頃からよく歌われるようになった「千の風になって」の追悼曲が演奏され、参列者から大きな拍手がおくられた。「千の風になって」の曲は、今や慰霊祭には欠かせない追悼の曲になったようだ。

終わりに、儀杖隊による弔銃とOH 6ヘリコプター4機編隊の慰霊飛行があつて、式典は滞りなく終了した。

ある忠魂塔顕彰会の関係者は、年々参列者名簿が薄くなっていくのが寂しいと言っていたが、この忠魂塔は、将来とも末永く陸上自衛隊航空学校が支えて行っていくものと思います。

なお、慰霊祭が終わった後、明野忠魂塔顕彰会の事務局長魚崎瑞氏より当協会宛に、次のような礼状とお知らせがありました。

「拜啓 貴協会の皆様におかれましてはその後ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、さる十月十日に行われました平成二十年度の明野忠魂塔慰霊祭に当たりましては、遠路ご参拝のうえ御献花料を賜りまして、厚く御礼申し上げます。

当日は幸い好天に恵まれ、各地から

百四十五名の戦友・ご遺族の方々のご参列をいただき、厳粛且つ盛大に執り行うことができ、さぞや殉国の諸英霊にもご満足いただけたのではないかと思います。

今後とも我々役員一同は、御霊の誉れを永久にたたえるべく、会の維持運営に誠心努めてまいりたいと思いますので、よろしくお力添えの程御願申し上げます。

なお、本紙を借りてご報告させていただきますが、永く忠魂塔顕彰会の会長を務めていただいております谷口正義様が、九月十三日にご逝去されました(九十五歳)。

このことは、本来ならば関係方面にお知らせすべきところ、ご遺族様より「密葬を行うにつき弔電・香典等はお断りしたい」とのことでしたので、お知らせを遠慮させていただきました。

後任の会長には副会長の山本光彦氏が、副会長には初代会長の髙原秀見氏が、副会長の髙原久生氏が、それぞれ総会の席において承認されましたのでご報告させていただきます。

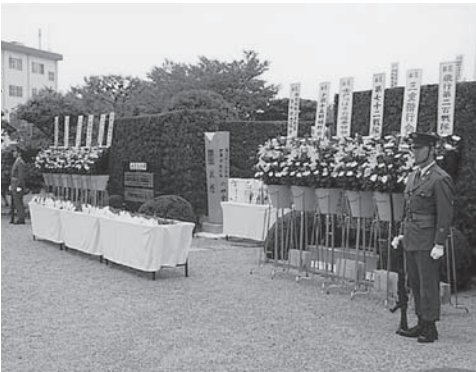
終わりにりましたが、時節柄切にご自愛の程お祈り申し上げます。

敬白

平成二十年十月二十二日

明野忠魂塔顕彰会

事務局長 魚崎 瑞
(財) 特攻隊戦没者 慰霊平和祈念協会 様



碑は語る特攻隊⑩

田中 賢一

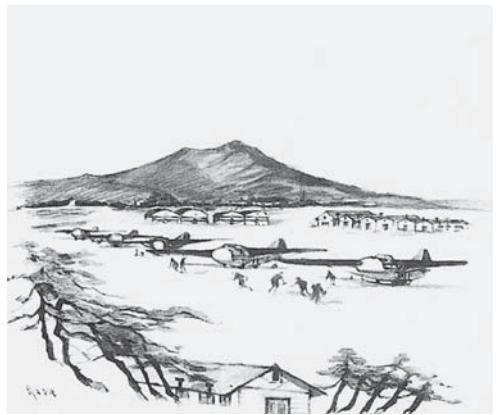
今回は、滑空飛行戦隊の碑を取り上げてみよう。ただし、この部隊が特攻作戦に参加したことはない。戦争末期に沖繩の飛行場に、滑空機に機関砲搭載の小型四輪起動自動車載せて強行着陸し、地上にある敵機をうちまくる作戦を準備したが、終戦により実現しなかった。このことは、会報46号(13年2月)に掲載してある。

そこで、この碑に因んで滑空機の発展過程と滑空飛行部隊の変遷について述べることにする。

茨城県つくば市作谷



この碑のある所は、元西筑波飛行場の正門付近である。先ず西筑波飛行場の景況を描いた絵があるので掲げる。



滑空機の開発と操縦者の養成

欧州で第二次大戦が勃発したのは1939年(昭和14年)9月1日だが、ドイツは、翌年の5月10日に西方進攻を開始した。その時グライダー部隊が花々しく登場した。ドイツ軍はベルギーのエバンエマエル要塞に12機のグライダーに乗った計85名の兵士を着陸させ、瞬く間に要塞を占領してしまった。オランダには落下傘部隊を使い、わずか5日間で降伏させた。

欧州に駐在していた井戸田勇中佐は帰朝後、これらのことを東條陸軍大臣に報告し、東條陸相は、落下傘部隊の創設を岩畔軍事課長に厳命した。この時どういう訳か、滑空機の開発につい

ては何も取り上げられなかった。それより先、航空本部では、古林忠一大尉を主務者として滑空機の研究を開始していた。昭和15年8月に古林大尉が書き残した文書に次のような一節がある。

滑空機ノ作戦上利用価値ニ就テ

欧州大戦ニ於テ滑空機利用ノ風評ヲ聞クモ未ダ確証ヲ得ザルヲ以テ本次戦争ヲ通ジテノ利用価値ニ関シテハ未知数ニ属スルモ敵後方ニ対スル空輸挺進隊トシテ活用スル場合、現在ノ落下傘降下ニ比シ左ノ如ク幾多ノ利点アリ

高々度ヨリ隱密降下ヲ為シ得ルコト
着陸点ノ選定自由ナルコト

武装強化ヲ可能ナラシムルコト
着陸時、某程度ノ敵ノ攻撃ニ対抗シ得ルコト

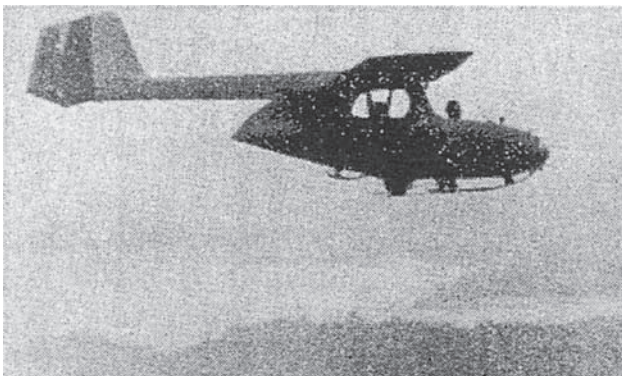
降下物体ノ重量ヲ増加シ得ルコト
以上各利点並ニ今次独軍落下傘部隊ノ運用等ヨリ考察スルニ将来滑空機ノ進歩ト相俟テ之ガ選定並用途ヲ適切ナラシムルコトニヨリ特殊作戦ニ於ケル利用価値相当大ナルモノアルヲ思ハシム例ハハ将来ニ於ケル資源獲得戦、特ニ石油資源ノ如キ武力占領ニ先立ち破壊防止ヲ必須トスルカ如キ場合之ナリ

この論説は井戸田中佐の帰朝以前の文書であることに注目すべきである。

滑空機操縦者の養成と滑空機の開発

が並行して行われたのは当然であるが、先ず器材のことを述べる。

従来民間でスポーツとして使っていたグライダーには、初級・中級・高級の別があった。軍でも飛行機操縦教育の補助として使っていた。滑空操縦者の養成にもこれを使った。軍用滑空機として、16年秋には「ク」—1の1号機が出来た。「ク」—1は操縦者を入れて8人乗りで、97軽爆で曳航した。大型滑空機に入る前の訓練用に使ったが、特殊部隊の空路潜入用にも使えた。終戦までに百機造られた。



「ク」—1の原型となった前田技研のsm206

航空機製作の大会社は飛行機の製造に忙殺されており、滑空機製作は小会社に依存しなければならぬので、遅々として進まず、18年になってからやっと「ク」―8Ⅱ型が完成し、19年になって制式決定し、量産に入った。曳航機は97重Ⅱ型を使った。車輪と橇が付いており、訓練で飛行場に着陸する時は車輪を使い、戦場で使い捨てる時は橇を用いる。武装兵22名乗りで、搭載できる兵器は後で説明する。日本国際工業平塚工場で造っていた。

もう一つ試作が完了したのは「ク」―7である。これは7屯の軽戦車が搭載出来た。日本国際工業桃山工場で造ったが、既に戦局は戦車を空輸するような空挺作戦など考えられなくなり、資材の割り当てもなく、足踏み状態になっていた。

滑空機操縦者の養成

昭和16年6月、滑空機操縦教育の教官となるべき者の教育が所沢で行われた。教官は飛行実験部の古林大尉、専修員は各飛行学校から派遣された15名の将校で、皆操縦者である。約2箇月で修了し、その中で大久保、山本、野間の3中尉が挺進練習部の所属となり、滑空飛行部隊の創設に携わる。

第一挺進団は、17年6月に内地に帰還し、翌7月に挺進練習部に復帰し、新田原に在った。その頃滑空班が設けられ、前記の3人が教官となり、滑空機操縦者の教育を開始した。被教育者は降下者の中から将校下士官25名が選ばれた。新田原では中級（自動車のウインチで曳き飛行させる）までを行い、9月に所沢に移ったが、その時飛行戦隊の三島中尉が班長になった。

爾來養成された滑空機操縦者は次の通りである。

- 第一次 二五 18年8月まで
 - 第二次 二〇 18年8月まで
 - 第三次 三〇 18年9月～19年2月
 - 第四次 九五 18年12月～19年9月
 - 第五次 二五 18年12月～19年9月
 - 第六次 五〇 19年9月～20年4月
- 計 二四五

第三次までは練習部や挺進聯隊の降下者から志願者を募り、その後は挺進部隊以外から志願者を採用した。

所沢では高級機までだった。昭和18年初め西筑波に移り「ク」―1を使い始めた。所沢に在る間、ある日高山中尉は、95式練習機で曳航する高級機を操縦中、突風に煽られたのか曳航索を翼端に引っかけ墜落した。高山中尉は胸部を強打し、肺が破裂する重傷だった。病院に運ばれ手当てを受けている

間逐一事故の模様を正確に供述し、再びこのような事がないように戒め、「あ

あくたびれた」と一言呟いて瞑目した。



墜落した高山機

18年10月、滑空班を廃止し、滑空飛行戦隊が新設された。戦隊は挺進練習部長に隸属し、操縦者の養成を続行した。戦隊長は北浦尊福中佐、戦隊付古林忠一少佐、第一中隊長三島木巖大尉、第二中隊長佐藤二郎大尉、第三中隊長山口義輔大尉、飛行場中隊長清田利夫中尉だったが、初めは第一中隊だけで、操縦者の養成が進むにつれて第二、第三中隊が編成された。

操縦者は「ク」―8の習得をもって完了とした。

滑空機搭乗部隊の新設

落下傘の挺進聯隊は四個までで、それ以上は編成されなかった。落下傘降投下では戦力に限度があるので、滑空機搭乗の挺進部隊の創設に重点が指向

された。これは当時世界の軍備の趨勢だった。18年秋に滑空機搭乗部隊として次の諸隊が編成された。

- 挺進第五聯隊 歩兵大隊と重火器大隊に改編される。西筑波駐屯。
- 挺進戦車隊 戦車搭載の「ク」―7が現出することを予期して編成。
- 挺進工兵隊
- 挺進通信隊
- 戦車、工兵、通信の三隊は唐瀬原に駐屯。

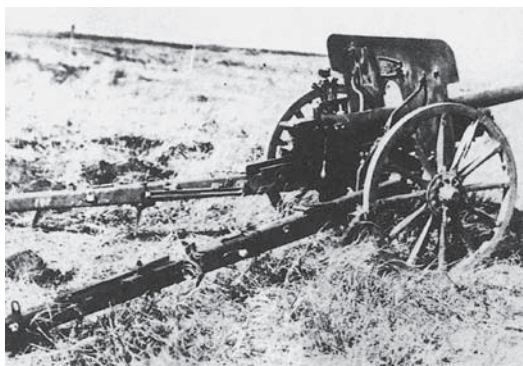
19年の夏、数回比島方面に「ク」―8で資材の緊急輸送を行った。滑空機は現地に残し、飛行場の偽飛行機として活用した。



「ク」―8 滑空機

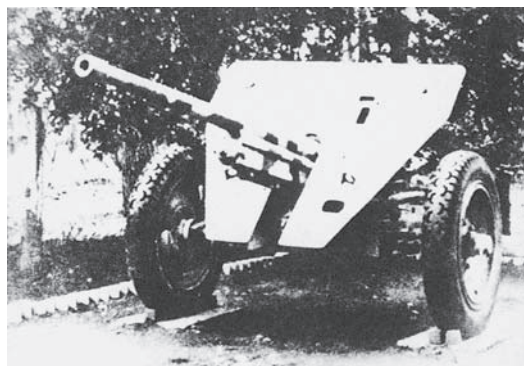


「ク」—8 各中隊18機持っていた

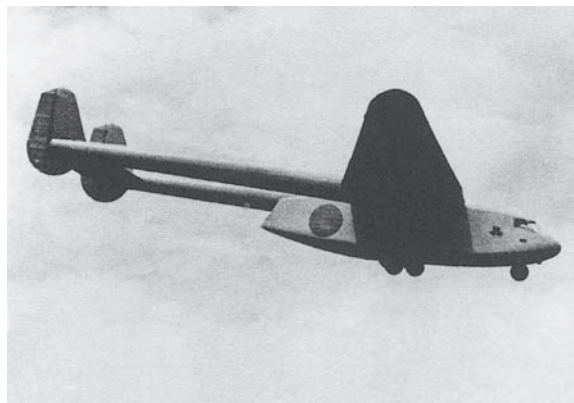
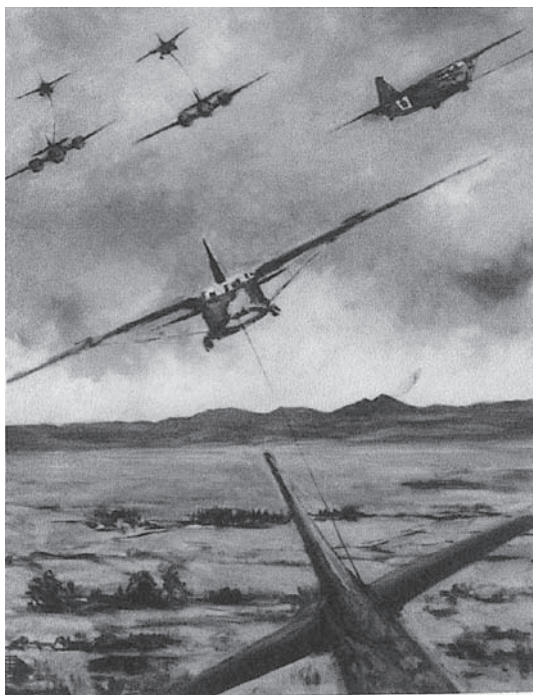


九四式山砲 口径 75ミリ 最大射程 8300m

滑空機で運んだ火砲



一式機動47耗砲 (速射砲) 口径 47ミリ



「ク」—7 戦車搭載用
実用試験まで済んでいたが量産に入れなかった

碑は語る特攻隊①

田中 賢一



この碑は宇都宮の鬼怒川を隔てた東側の工業団地の一劃にある。嘗て此所に宇都宮飛行場があって、昭和17年7月22日に、第一挺進団の降下戦闘の天覧演習があった所である。天覧演習と特攻隊とは関係がない。強いて結び付けられれば、演習部隊の中に後に義烈空挺隊となった挺進第一聯隊第四中隊が含まれていたということだ。

この演習について後世に語り伝えておきたいことがあるので、このシリーズに入れさせてもらう次第である。第一挺進団は、パレンバン作戦で名を挙げたものの、その後ビルマのラシオ作戦では、天候に禍いされて引き返し、他に出番がなく内地に帰った。暫

く復員しないで大本営直轄となつて、司令部と飛行戦隊は新田原に、兩聯隊は住吉の廠舎に在った。

6月の終わり頃と記憶するが、団長久米大佐は単独で天皇陛下に拝謁を仰せつかり、次いで部隊は宇都宮飛行場攻撃の演習を行い天覧を賜るという知らせを受けた。なお、去る4月18日、ドーリットル空襲があったので、この天覧演習の事は、事前に関係者以外に公表すべからずという注意があった。

団では、降下部隊は不運の第一聯隊と決め、司令部はパレンバンに降下しようとして基地に残された木下中佐、田中中尉(私)と下士官2名は降下、団長以下は輸送機で着陸とした。演習であっても敵(仮設敵)の情報を取らねばならぬと、動員前に所属した航空総監部に手を回し、敵の兵力や配置等を知った。戦車を持っていることも判った。

計画段階で問題になったのは、速射砲をどうするかということだった。当時小銃や機関銃は物料箱に入れ重爆で投下していた。37ミリの対戦車砲は、分解しても車輪が大き過ぎて爆弾倉の扉が閉まらない。パレンバンでは飛行場着陸機に搭載したが、胴体着陸ならばすぐ引き出せるが、演習で飛行機を壊すことはできない。飛行場を知って

いる者が言った。飛行場の端に松林があるので、砲と砲手を隠しておき、頃合いを見て地上戦闘に参加すればよいと発案した。すると、天皇陛下を欺くようなことが出来るかと、喧々譁々なかなか決まらない。そこで高級部員の木下中佐が、滑空機の開発を急がないと速射砲も持っていけぬということを中央に認識させる機会だからその案でゆけと言つて、松林に隠しておくことになった。

初めは新田原から全員飛行機で行くつもりだった。ところが飛行戦隊が整備員や管理者を乗せていくので、聯隊は発進基地所沢まで鉄道で行つてくれと言い出した。鉄道輸送の手配は司令部部員の私の役目である。私は門司の鉄道輸送司令部に行き、担当者に申し入れたが、目下作戦関係の輸送が輻輳しているのを、演習に行く部隊の輸送は後回しだと、辞を低くして頼んでも所望の時期に配車してくれない。困り果てて私は司令官に直談判しようとして司令部に行つた。司令官は一目で召集将校と判る色褪せた軍服の老佐佐だった。私が天皇陛下に報告する演習であると言つと、俄かに立ち上がつて不動の姿勢をとり万難を排し責任を持ってやりますと答え、私の方が感動した。そのようなことがあつて、予定通り

所沢に勢揃いし、当日雲がやや低いが断固離陸した。MCとAT合わせて36機はあつたと記憶している。いつもの演習では高度五〇〇米なのに四〇〇米くらいだったと思う。降下着地したら救急車が走っているのを見た。地上戦闘の演習は滞りなく済んで、終わつてから聯隊の松浦軍曹の殉職を知つた。玉座の真ん前だったという。

一式落下傘の時代、いつもの演習で自動索や傘体を体に引っかけ、予備傘を使い事なきを得る者が百人に一人くらいはあつた。それだから平時は高度五〇〇にしていたのだが、この時は先頭降下者の時が四〇〇だったらしい。最後の降下者の時は通常もつと低くなつた。当時の輸送機はそれほど余力がなかつた。思えば遠い昔のことになった。



陸軍挺進部隊銘々伝③

田中 賢一

○挺進第三聯隊長白井恒春中佐

この人は10期も先輩（陸士42期）であるが、高鍋町の借家が隣で毎日声を掛け合っており、部隊で運行しているバス停に行く間柄なので、特に印象深い。

空母隼鷹で比島に向かう

敵がレイテに上陸したのは昭和19年10月20日で、24日に挺進第三聯隊に動員が下令された。第二挺進団の動員の先駆けである。聯隊と飛行戦隊は既に戦時編成を執っていたが、団司令部は挺進練習部で編成することになった。

動員計画の戦時命課では、団長は練習部高級部付の徳永賢治大佐で、私は部員となっていた。戦隊は空母隼鷹で比島に向かうことが中央から示された。



発進基地に近い宿舎で寛ぐ
白井聯隊長

ので、私は徳永大佐の命で佐世保に向かった。その頃練習部も挺進聯隊も宮崎県児湯郡川南村に在った。

私は25日朝佐世保に着き、海軍と打合せをし、隼鷹は明日入港と承知し、

聯隊が来たら宿泊することについて重砲兵聯隊に依頼した。それらの事が終わると夕刻になり、早くも聯隊の乗った列車が到着した。疾キコト風ノ如シである。その時は私が設営した旅館に聯隊長、聯隊付少佐、副官、5人の中

隊長が集まり、一献酌み交わした。この人達大城中隊長以外全員戦死し、大

城は戦後交通事故で死んだ。白井聯隊長はこの設営が大層御満足で、箸で茶碗の縁を叩きながら、自慢の歌を唄った。「団司令部は飛行機で行くので先に着くでしょう。何か奥さんに伝える事がありませんか」と言うと、「何も無い、煙草沢山もらったのでやるよ」と言って鵬翼を10個ばかりくれた。

私は出港まで居らずに帰隊した。司令部はまだ編成を完結していない。徳永大佐に復命すると、稲本が帰って来たので部員を譲れと言われる。稲本宏は三聯隊にいたが、1年ばかり前に航空士官学校に転属になっていた。それが中央で人が不足すると思ったのか、練習部付で戻されて来た。彼は、田中は第1回の出動の時部員だったので、

今度は自分だと強引に食い下がった。由、稲本は51期で私の1期上、少佐だが私はまだ大尉で、部員は編制表では少佐となっている。結局交替させられた。

ブラウエン付近の戦闘

話が横道に逸れたが、白井聯隊長のことに戻る。レイテ空挺作戦は12月6日に発起された。白井聯隊長は2個中隊を指揮してブラウエン北飛行場に夕刻降下した。それから後のことは本人の書き残した手記がある。

白井聯隊長の手記（、を付した）

一、昭和十九年十二月六日一八五〇（ブラウエン北飛行場末端付近と判断せらる）二一〇〇部隊長の下に集結せるもの聯隊長以下六名、二三〇〇本部の一部集結す。此の間一部兵力を以て滑走路上観測機約十機を発見、爆碎焼却し

全機を破壊すると共に幕舎、弾薬集積所位置等を焼却し、第二次挺進部隊に飛行場表示の為所在ガソリン缶を天明まで引き続き焼却す。（計画では夜半

第二次挺進部隊が降下することになつており、離陸はしたが天候悪化しレイテ島脊梁山脈が越せなかつた）

約六十名集結するや滑走路北側森林内の飛行機掩体等を利用し、陣地を占領して、黎明までに工事を命ずると共に、目標となるべき樹木に国旗を掲揚

し占領確保を明示せり。此の間垣兵団の斬込隊も、重松大隊の斬込隊と共に不明なり。天明と共に南方並びに西方に銃声しきりなり。

○八三〇頃戦車（MG）2、MG5を有する敵約三五〇名迫撃砲支援の南方及東方より逐次包囲態勢をとりつつ攻撃し来り、東方より集結兵力を以て反撃するも、銃砲火の集中により遂に北方密林内に集結す。其の兵力約三〇名なり。其の後日没まで飛行場北方約千米内に遮蔽す。

一八〇〇飛行場夜襲により奪回を企図し南進せるも飛行場北側と判断せらる方向より射撃をうけしを以て西方より迂回せんとせしに、深さ腰を没する湿地帯に陥り行動不能なり、進路南方より前進中（意味不明）

八日〇五三〇南飛行場滑走路西端に達す。天明の近迫と現在位置との関係に鑑み、天明までにタゴタン河南側に潜入し、垣、泉両兵団（垣は16師団、泉は26師団）の攻撃進捗を待つべく決意し南進中、「ブラウエン」―「ドラック」道上に約二〇輛の自動車並びに一部敵操縦手を発見、之を全車破壊撃滅し、道路上を南下せしが敵幕舎左右に林立し、黎明となり、敵兵一、三名幕舎前に我等を見るも傍観せるを以て、前進を開始し河岸に至るに、敵監

視兵二名の誰何をうくるに会い、之を刺殺すると共に天明の初期「タゴタン」河を渡河し、敵作戦道路側方約五〇米敵砲兵陣地一、迫撃砲陣地二の後方に潜伏し、飛行場方向の戦況を待機観察するに決す。

この日終日「タゴタン」河を攻撃する敵兵約三〇〇迫撃砲四門、射撃猛烈を極む。時に一四〇〇(以下七字不明)飛行場に対する我が攻撃の進展せしを観察し、さらに状況の進展を待機するに決し、日没と共に位置を移動し、軒々十日まで現地付近にありしも、十日後遂に泉兵団と合致し後図を策する目的を以て西進を開始す。

途中敵の攻撃を受け逐次戦力消耗し十八日重松大隊と「マタグワ」東北方四杆付近ジャングル中に遭遇せし時の兵力聯隊長以下十二名となる。其後重松大隊と共に行動し、二十二日二八七高地に於いて野中大隊と合致す。時に先行せる通信下士官外一名と追及者六名増加せるも、副官以下六名二十五日第十六師団との連絡のため派遣せるも遂に一名脱出帰還せるのみ。

爾後野中大隊と行動を共にし、二十八日夜二八七高地発、十二月二十一日(文字不明)に進出、一月十一日「リモン」南方にて本道突破、一月二十五日星兵団(六十八旅団)着

二十六日軍司令部に到着せり。

二、土屋少佐の指揮する兵力十六名の行動、跳下と共に敵飛行場内の飛行機、幕舎、ドラム缶、弾薬置場を焼却し、破壊を続行し、七日天明後北飛行場北方地区に位置しありしが、一六〇〇歩

兵第二十聯隊斬込隊約二百名と連絡なり、爾後其の指揮下に入り、挺進部隊は主として飛行機、ドラム缶に目標を指向し、七日夜、八日夜、九日夜と斬込みを連続し、敵飛行機諸資材施設を破壊焼却し続けたる後十日垣兵団命令により西方高地方向に転進す。爾後跳下者(跳下とは教範用語で降下のこと)逐次垣兵団に集結し、士気旺盛、一月二日七十三名の兵力に達す。

三、南飛行場攻撃部隊桂大尉の指揮する七十名の跳下地点並に戦果不明。四、サンパブロ飛行場跳下部隊挺四種田大尉以下二十四名の行動並に戦果不明。

五、総合戦果(ブラウエン北南飛行場サンパブロ飛行場)以上各部隊の残存集結者の戦果を総合すれば左の如し。但し本戦果は残存者八十二名の戦果に過ぎず、爾余の約三百名は戦闘行動並に生死不明にして戦果を確認し得ず。

飛行機 P 38 四一機

戦闘機 二四機

ダグラス輸送機 六機

観測機

二七機

戦車

一二輛

自動車

四二輛

乗用車

五輛

兵器弾薬

多数

高射機関銃

三門

同弾薬

多数

幕舎

一五

遺棄死体

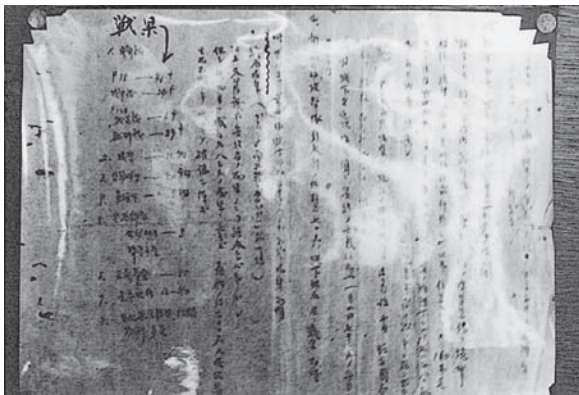
一〇〇〜一五〇

其他航空材料

多数

被服物件

多数



白井聯隊長の手記

白井聯隊長の手記を先に載せた為、読者の理解し難い点があったと思うの

で、レイテ空挺作戦の白井聯隊長に係する事だけを述べる。レイテ島の脊梁山脈以東の平野部を悉く敵に奪われた状況下、挺進団の主力をブラウエン地区のブラウエン北と南及びサンパブロの三つの飛行場に降下させると共にダガミ西方山中に残存している第16師団と山越えて進出する第26師団をもつてブラウエン地区に地歩を獲得し、全般態勢の挽回を図るのが、第35軍の計画だった。なお、これとは別にレイテ湾沿いたクロパンとドラグ両飛行場に対する特攻空挺作戦も行われたが、首題と関係ないので省略する。

第二挺進団は12月6日夕刻挺進第三聯隊白井聯隊長の指揮する2個中隊をブラウエン北に、桂大尉の第二中隊をブラウエン南に、第四聯隊穂田大尉の指揮する1個小隊をサンパブロに降下させる計画で作戦を発起した。そして引き返して来た輸送機で、第四聯隊主力を夜半ブラウエン北に降下させる計画だった。

ブラウエン北に降下した部隊のことは白井聯隊長の手記の通りであり、ブラウエン南に降下する筈の桂中隊とサンパブロに降下した部隊の行動については判らない。唯米軍の資料により推定すれば、桂中隊もサンパブロに降下したらしい。そして桂中隊はブラウエ

ン方向に移動したようだが、聯隊長とは出会っていない。サンパプロで最後は玉砕した部隊があると米軍の記録にあるが、それは穂田小隊と思う。

第二次挺進部隊はルソン島のリバ飛行場を発進したが、天候不良で引き返した。翌7日カモテス海のイピルに敵大部隊が上陸し、島内の我が軍の基地オルモックが危殆に瀕したので、方面軍では待機していた第四聯隊を35軍増援の為にオルモック南方のバレンシヤに降下させることにした。白井聯隊長は重松大隊と出会った時、ブラウエンに對する作戦が取り止めとなったことを知ったと思う。そして26師団司令部が立ち去った後の二八七高地に到達した時、島内残存部隊はカンキポットの軍司令部に集結するという命令を承知したらしい。

11月28日にそこを出発し筆舌に尽くし難い苦難を嘗め、約1箇月かかって1月26日に軍司令部のいるカンキポットに到着した。途中一物の補給もなく、現地物資も乏しく木の根草の芽を食み敵の眼を避けて移動した。従う者第四中隊長蓬田大尉以下の言う元氣もなすが、聯隊長は鼻歌を唄って励ましたという。増援部隊として加入した四聯隊の者に伝えられた話である。

白井聯隊長の手記には、同じ所に降

下しながら遂に一緒になれなかった聯隊付の土屋少佐以下の戦果が書いてあるが、どこでそれを承知したのか不明である。あるいはカンキポットへ到着後、誰かそのことを知っている者がいて書き足したのかもしれない。とにかく後世に語り伝えたい一念でここまで辿り着いた。そして1月4日力尽きて

没した。第一次にレイテに降下した者に1名の生存者もない。増援としてレイテに送り込まれた四聯隊の主力は軍司令部の護衛としてセブに渡り、その中に戦後帰還した者がある。白井聯隊長の手記はその人達によって持ち帰られ、貴重な戦史資料となっている。

最後に故人の人格を偲ぶ意味で万佐子夫人の手記の一部を紹介する。
(動員が下令されたのは10月24日で、聯隊は日没時までに出動準備を完了し、営外居住舎を一時帰宅させた。挺進練習部は各方面に自動車走らせ、この人達を運んだ。)

昭和十九年十月二十四日、出征の日午前二時玄関を発ちつつ、幼い長男にホゾリして「元氣で行ってくるよ」とふりかえった。落ち着いた主人のいとも少しも変らぬ姿に之が永久にかへらぬ人になってしまおうとは思われなかった。

当時私のお腹には今にも生まれる三

男がいた。身重の私に心配かけぬ様にしてか、自動車の中からニッコリ笑って拳手の札をして闇に消えていった。心の中で合掌して見送った私は、心細い留守の出産のことなど考へて何とも云えなかった。ニッコリと笑った主人の顔と手袋の白い色が今もしみついている。主人のたつた日の朝、台所にいつて見ると、身重の私のために主人は、いつの間にか納屋から炭まで運んできてあり、私が日頃困っていた不便なつるべの井戸水もバケツに何杯も汲んでくれてあった。私は涙で何も見えなくなった。

(手記はまだ続くが紹介はこれまで)

初めに申したが、私の借家は隣で、家の構造は全く同じなので、万佐子夫人の手記は心に沁みるものがある。私はこの時刻佐世保に向かっていた。

この動員でもう一つ忘れ難いのは、私を押し退けて挺進団司令部の部員となつた稲本少佐のことである。レイテ空挺作戦の計画中第三十五軍司令部と連絡するためレイテに先発し、司令部の幕僚として活躍していたが、ファートンで司令部が敵に急襲された時、衛兵を指揮して戦い戦死してしまつた。私はその後挺進戦車隊長に補職され、終戦時内地にいた。



カンキポットの遠景



カンキポットの麓のマハンラクにある慰靈碑

陸軍挺進部隊銘々伝④

田中 賢一

○異色の軍人・面高俊秀少佐

この人とは、私は三度同じ部隊に所属し、極めて深い御縁があった。前号の「碑は語る特攻隊⑨」で空母雲龍について述べた際、輸送指揮官として職に殉じたのがこの人なので、重複しないように別の話題を挙げる。



第一回の御縁は、習志野の騎兵十六聯隊で、面高さんは若い中隊長、私は士官候補生だった。但し私は面高中隊ではない。騎兵聯隊の馬は育成馬をもって補充される。軍馬補充部から6歳馬をもらうと、聯隊で1年間新馬調教を行った後、中隊に配分する。機関銃中隊を入れて5個中隊の中隊長や馬係准尉の居並ぶ前を新馬調教をした調教師が牽馬で回る。それを籤引きで決

めた順に、中隊が1頭ずつ取るのである。昭和12年11月のことであるが、面高中隊が一番となっていた。

新馬の中に1頭だけ白馬がいた。あまり馬格がいいとは思えなかったが、面高さんはすぐ白馬を取った。その時の得意顔はいまだに忘れられない。将校は2頭持つことになっていたが、その後よく習志野で白馬に乗って颯爽と走り回る姿を見た。このように稚氣満々の人だった。

次の御縁は、私が中尉で騎兵十四聯隊にいた頃のこと、面高さんは旅団の戦車隊長だった。場所は蒙疆の包頭である。15年の秋だったと記憶するが、中少尉の集合教育があり、その中に戦車隊長の行う対戦車戦闘の展示演習があった。突進して来る敵戦車に発射発煙筒で目潰しして、対戦車地雷で撲滅するという構成だった。

発煙手と肉攻手の潜んでいる壕は予め構築してあった。何回も予行を行ってほしい。いよいよ本番、戦車が突進して来ると、発煙手は発煙筒を発射した。ところが予行の時と風向きが違ったらしい。全く目潰しにならないし肉攻手も煙に隠れることができない。まごまごしていたが暴露突進した。演習の失敗は明瞭である。我々はメンコウさん何と締め括るか興味深々だった。

このとき面高大尉聊かも慌てず、ふんぞり返って言った。「日本一の戦車隊長が計画し、日本一の戦車隊員が実施しても、対戦車戦闘はこのように難しいものだ。それが判れば本日の教育は目的を達成した」と。臨席していた栗林忠道旅団長は呵呵大笑し、お開きになった。

三回目の御縁は、18年10月私が陸軍挺進練習部で企画など担当の幕僚だった頃、新たに編成された挺進戦車隊長に騎兵学校から面高少佐が着任することになった。到着時刻も知らせがあったので、副官に頼まれ私は日豊線高鍋駅に迎えに行った。急行が到着すると二等車に夫婦で納まっていたが、降りようとしなない。「随分田舎だな、今夜は宮崎に泊まるよ」と言う。高鍋町に旅館が予約してあると言っても腰を上げない。相変わらずだな、と腹も立たなかった。

挺進戦車隊は戦車搭載の「ク」ー7滑空機の実用化を見越して編成された部隊で、滑空機搭乗部隊の編成計画に携わった私は、大型滑空機の実現に関心が大きかった。しかし途中で挺進部隊に入ってきた面高さんは、それほど関心がなかったようで、一式戦車という軽量小型の戦車を如何にして戦力發揮するか知囊を絞った。戦車の尾部に踏み板を取り付けて歩兵3名を乗せ

1車ごとに歩戦一体となって戦う戦法を開発し、訓練した。空母雲龍の記事で述べた通り私が二代目の隊長になるのだが、前任者の開拓したこの戦法は大きな遺産となった。

もう一つ面高さんに教えてもらったことは、機甲小部隊の現地戦術を、専修員を二手に分けて対抗で指導する教育法である。両軍に前進計画を出させ搜索部署を見て、当然知るのであろう相手の情報を与える。現戦だから現地について指導しなければならぬ。統裁官は両軍の間を自動車で往復し、状況を与えて指導するが、それぞれの班には補助教官を置き作業を出させる。そのような統裁法であり、専修員は生気澁刺とし、有効な教育法である。面高さんの最後は雲龍の記事で述べた通りである。



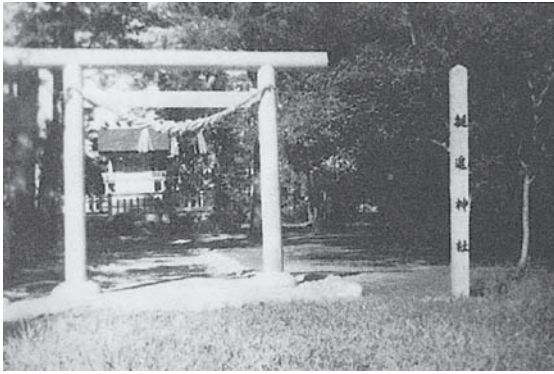
川南護国神社創立の経緯

評議員 田中 賢一

〈生き残りの戦友の悲願によって
建った神社〉

挺進神社焼き払われる

宮崎県児湯郡川南村には嘗て陸軍挺進部隊の基地があった。同村豊原にあった挺進練習部の本部庁舎に向かって右の林の中に挺進神社があり、挺進部隊全戦没者を祀ってあった。登庁する者は必ず右向けをして神社に敬礼したものだ。昭和19年秋、挺進集団が編成され、練習部は廃止され、集団



挺進神社

がフイリピンに出た後は、第一挺進団司令部がこの庁舎に入っていた。

終戦に際し挺進神社をどうするか、挺進団長中村大佐のもとに挺進第二聯隊長、挺進戦車隊長（私）、挺進整備隊長が集まり協議した（第一聯隊と飛行団は川南にいなかった）。折しも宮崎市内で戦災に遭った師範学校男子部が、空き兵舎に引越して来た。名前は失念したがその部長さんは大層気合の掛かった人で、神社は私共が守ります。生徒の精神教育にしますと言うので、お任せした。ところが、翌年春頃だったか、宮崎市にいた米兵が役場の吏員に案内させて現れ、有無を言わず焼き払ってしまった。

当時私は降下場跡の開拓地にいたが、挺進神社が焼かれたと聞いて駆け付けた。神社は無残にも焼け落ち、中村大佐は暫く前に来たらしく、泣きながら釘類の金物を拾い集めていた。学校の先生の話によれば、神社は中村大佐から預かっていると云ったが、中村大佐には言っていない、学校に神社があるのは怪しからんと言ったとか、事前には言っていないのは嘘である。

中村大佐は降下場に隣接した唐瀬という部落の竹藪の中に小屋を建てて住んでいたが、拾い集めた金物類を持ち帰り、それを御神体として掘って建て

屋の中にお祀りした。

それから数日後師範学校に幽霊が出るという噂が広まり、日向日々新聞にも大きく出た。夜ラッパの音がすると、白い体操衣袴の一団が昔の兵舎の周りを走り回るとか、寄宿舎の生徒はうなされて眠れないという。挺進神社の御祭神の亡霊であると皆信じた。

降下場に隣接した唐瀬という部落に石川富士之助という博学の篤農家があり、この人の次男も戦死したので遺族会の会長をしておられたが、自宅の仏壇を大改修し、中村大佐が拾い集めた金物を御神体として、懇ろにお祀りしたところ、幽霊騒ぎは納まった。その頃挺進部隊の復員者が一団となって降下場で開拓していた。私もその一人だったが、配分された開拓地に隣接した小高い所を挺進神社予定地と決めて松等を植えたものの、法的手続をしなかったので取り上げられてしまった。

一方、中村大佐は、川南村の中央の俗称トロントロンという所に、戦死者を祀るお堂があったが、終戦直後の台風で倒壊したままになっていることを知り、これを再建して挺進神社の御祭神も合祀することを思い付いた。

霊堂の再建

中村大佐からこの案を聞き我々も賛同したが、村の旧農家が動いてくれな



霊堂落成

ければ何もできない。中村大佐は浜で塩炊きをして糊口を凌いでいたが、赤貧洗うが如しで、我々とても同様であった。皆で手分けをして旧農家を説いて回った。石川富士之助さんは真つ先に賛成してくれたが、一人だけではどうにもならない。他の人達も趣旨には賛同してくれるが、占領下そんなことをして米軍に咎められはしないかと、腰を上げてくれない。それでも中村大佐の初志はくじけず、村中を説いて回り、遂に財津村長を説得し、粗末ながら霊堂の落成を実現した。そして昭和24年3月20日、戦死者の御霊をここに祀ることが出来た。地元の英霊は六三四柱で、挺進部隊の英霊は



本殿新築



参道の露店

一万二千柱とされている。

昭和27年我が国が独立を回復したの
で、村の遺族会が主になって霊堂を本
殿としその前に拝殿を造り、更に鳥居
も建てて、川南護国神社とした。宮崎
県在住の挺進部隊戦友がどれほど支援
したのか、私は既に村を去ってしまっ
たので詳しくは知らない。神社になっ
てから、町長が祭主となって毎年11月
23日に例祭を実施している。

平成8年に役場の吏員が調べたとこ
ろ、本殿が雨漏りして霊簿が濡れて
いることが判明した。遺族会長は石川
富士之助翁の息子の博愛氏だったが、
遺族会が中心になって本殿を新築する

という知らせがあった。総工費は千四
百万円と見積もっていることも聞い
た。そこで在京の戦友を主体に委員会
を組織して募金を開始したが、取り敢
えず三百万円を送金した。御祭神の数

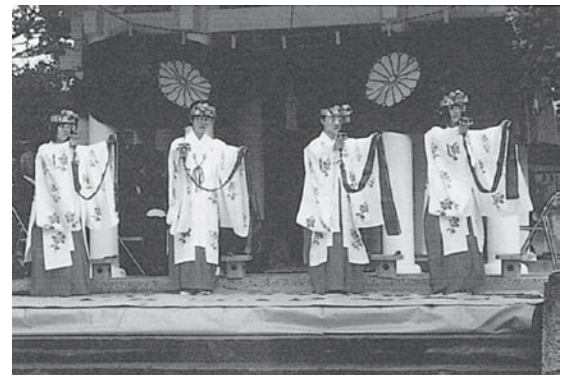
から言えば少ないが、一番早かったの
で大層刺激になったとて喜ばれた。今
でも拝殿脇に掲げられている寄付者名
の冒頭に、挺進部隊戦友一同三百万円
と書かれており、僅かながら亡き戦友
と神社を守護してくれる郷の人々に、
報いることが出来たと思っている。

平成20年度の祭典

平成20年度も11月23日に行われた。
参加者は500人もあったろうか、例
年通り参道には、屋台店が並び、更に
本道にも店が出て盛況だった。
全国の護国神社の祭礼と比較して特



慰霊祭参列者



神楽奉納

異なことだけを述べる。

・ 国旗掲揚と黙祷のときのラッパ吹奏
は都城の自衛隊が担当している。

・ 神楽奉納は中学校の女生徒が行う。
毎年このながら随分と練習を積む
ことであろう。

・ 自衛隊の参加者は次の通り。

(県内) 都城部隊、えびの部隊、新田
原の航空自衛隊、宮崎地方支援本部
(県外) 鹿児島県国分部隊、第八師団

司令部、西部方面隊総監部、幹部候
補生学校の各代表者、習志野の空挺
団長以下。

・ 自衛隊の支援や各代表参加は、空挺
同志会宮崎支部の尽力により実現し

たものである。空挺同志会では会長
及び千葉を始め数個の支部長も参加
している。

以前は旧挺進部隊の戦友が大勢参加
したが、追々少なくなり、平成20年度
は5名だった。

地元御出身の英霊に捧げる歌

大陸の赤き夕日に思いしか

尾鈴の峯に沈みゆく陽を

涯しなく続くうなばら眺めつつ

日向灘の香ふるさとの風

名もしれぬ草木の下にまどろみて

たちねの面はらからの影

君あれしこのまほろばに若き日を

送りし我らえにしなりしか

報告

能代八幡神社「特攻勇士之像」除幕式

副会長（前理事長） 菅原 道熙

会報77号でお知らせした経緯を辿って予定通り平成20年10月26日10時から「東雲飛行場慰霊碑」と「特攻勇士之像」の除幕式が、秋田県能代市の能代八幡神社境内において、厳粛に齎行された。

当日は朝から寒風吹き荒ぶ中、50名に近い参列者が見守る中で、武田裕幸東雲飛行場慰霊奉賛会代表幹事と7名の女性の手によって序幕が行われた。これら7名の女性は、当時女学生の勤



能代八幡神社本殿 碑は左端の柵を入った右側に在る

労働員で飛行場に勤務していて、事故から殉職者を抱え出したり、何等かの縁で慰霊碑に刻名された戦没者との関わりがあった方々として選ばれたことである。

奉賛会によって奉納された「特攻勇士之像」の台座の正面には、「あ、特攻」の銘板の左に、雄渾なる筆致で、「留魂」の二字が金文字で刻まれている。これは吉田松陰の辞世の歌である

「身はたとへ武蔵の野辺に朽ちぬとも
に拠つたものであるとのことである。
留めおかまし大和魂」

能代八幡神社宮司・森岳八幡神社権禊、玉串奉奠（全員）、撤饌、昇神と神事は滞りなく終了し、次いで国歌斉唱、献歌・朗詠と続いたが、参列者代表の小林孝哉氏（元特攻隊員）は挨拶で、碑に刻名されている牧野忠恕少佐（陸士53期）以下18柱の英霊は、飛行（特攻）訓練中の殉職であるのに、中には靖國神社に合祀されておられない方もあるように、何とか合祀する途はないものか、との問題を提起された。

追悼の言葉は、藤木光男氏（甲飛12期）によって捧げられた。その中で碑に刻名されている28柱中陸軍関

係は24柱で、若杉是俊・日野二郎両大尉（陸士57期・殉義隊）、山岡浩少佐（陸士55期・戦死）、面谷直治少尉（戦死）と、前記18柱の殉職者、及び当飛行場



東雲飛行場慰霊碑



で訓練を受けた能代地区出身者の渡部

利夫中佐(陸士55期・義烈空挺隊・能

代中学10回生)、米山佐市少尉(海上

挺進27戦隊)の2柱で合計24柱である

こと、海軍は、高橋恒夫少佐(海兵73

期・第1八幡護皇隊・艦攻隊)、工藤

丑雄少尉(甲飛11期・第5銀河隊・能

代中学14回生)、信太廣蔵少尉(甲飛

12期・第2御盾隊)、松枝金作兵曹長(特

乙飛3期・第9神雷隊)の4柱である

理事長の交替等

○理事長退任と副会長就任の御挨拶

副会長(前理事長)菅原 道熙

昨年12月4日に開催された理事会に
おいて、私は理事長を退任し、後任に
は藤田幸生理事が就任いたしました。

また、これからは新公益法人移行へ
の業務が加わって参ります。会長を補
佐する態勢を強化するため、空席に
なっております副会長に、杉山蕃、
深山明敏両理事と私の三人が、相携え
てその任に当たることになりました。
会員各位におかれましては、今後と
も引き続き協会の業務遂行に、一層
の御支援と御協力を賜りたく、心から
お願い申し上げます。

ことが挙げられている。

献歌・朗詠、ハーモニカ伴奏による

女性会員の合唱が奉納されて、除幕式

は終了、席を移して直会に入る。

古村潤二郎秋田偕行会会長から祝辞

(代読)が寄せられて開宴、余興も出

て全員和気藹々の雰囲気浸って暫し

懇談の後散会となった。

碑文には、武田代表幹事と共に、飛

行第三十八戦隊戦友会会長林恒材氏

○理事長就任の御挨拶

理事長 藤田 幸生

私はこの度、菅原前理事長の後を引
き継ぎ、当協会の理事長に就任するこ
とになりました。どうかよろしくお願
い申し上げます。

自己紹介を申し上げますと、私は、
昭和17年に高知で生まれました。防衛
大学校9期、海上自衛隊艦載ヘリコプ
ターのパイロット出身、最終配置は、
海上幕僚長(第24代)でした。現在は、
三菱重工株式会社航空宇宙事業本
部顧問であります。

弱輩者ですが、これから山本会長の
御指導の下、役員の方々、会員の皆様
方の御支援、御協力を得て、理事長の
職務を果たして参りたいと思っております。
どうかよろしくお願ひ申し上げます。

(陸士55期・北海道河東郡音更町・東

京巢鴨中学)の名も刻まれている。同

氏は、10年近く慰霊祭に参加されてい

て、本運動には終始絶大な協力を惜し

まれなかった方である。

東北地方には、既に宮城県護国神社

に「特攻勇士之像」が奉納されている。

これで太平洋、日本海それぞれの側に

「特攻勇士之像」が在すことになった。

特攻勇士の御心の伝承に拍車がかっ

協会は今、大きな変化の時代に差し

掛かっております。御遺族や戦友の

方々は、多く御高齢になられました。

他の諸団体同様に、会員は、新しい世

代に移行しようとしております。役員

もまた、例外ではありません。機関誌

「特攻」の編集者も、2年前、田中賢

一さんから飯田正能さんに交替されま

した。協会自身も、現在新公益法人へ

の移行手続中であり、事務所も、虎ノ

門の森ビルから芝のTABビルに移転し

ました。毎月18日に月例参拝している

世田谷山観音寺住職も、代が交替し、

太田賢照住職から兼照住職になりました。

一方、慰霊諸団体を取りまとめる

ために、3年前(財)大東亜戦争全戦

没者慰霊団体協議会が発足しました。

このように、協会を取り巻く内外の

環境は、大きく変化してきております。

て、在天の御英霊もさぞお喜びになっ

ておられることであらう。

引き続き各地の護国神社への「特攻

勇士之像」の奉納が進むことを、心か

ら希求して止まない。

この重要な時期に、協会の理事長をお

引き受けすることは、大変肩の荷が重

いところであります。先輩方から何を

受け継ぎ、後世にどのような形で伝え

ていけばよいのかなど、特攻隊戦没者

の慰霊に止まらず、戦没者全体の慰霊、

日本人がその心を取り戻すために寄与

することは何かなど、課題は多くあり

ます。

皆様と共に、特攻隊で亡くなられた

方々の御霊の安らかなることを願ひ、

更にまた、今の日本が、少しでも良い

方向に向かうことができるように、微

力を尽くしてまいりたいと思ひます。

重ねて、今後ともどうかよろしくお

願ひ申し上げます。

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成20年10月1日～12月31日)

(単位千円)

一〇〇〇 近歩一会

二〇 赤澤 詮立

一〇 畝田謹次郎

一〇 山本 健雄

七 松井 敬子

七 森中 康行

五 尼子 和世

御芳志誠に有り難うございました。

◆ ◆ ◆ 新入会員名簿(敬称略)

(平成20年10月1日～12月31日)

栃木県 高石 近夫

群馬県 阿久澤英紀

埼玉県 伊東 光政

銭本 信治

森中 康行

千葉県 豊嶋 勝

村越 登裕

東京都 北森 茂樹

清閑寺信房

中村 成男

呑田 好文

町田志都香

神奈川県 石井 光政

須田 智歩

佐々木敏子

松井 敬子

松下千恵子

松江 正宏

小林 晋平

内藤寿美子

西上原裕平

原渕 勝仁

山辺 登

植月 政則

◆ ◆ ◆ 会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

宮崎県 宮崎 文次

吉村 文次

杉尾 舜平

東京都 井内慶次郎(19・12・)

鈴木 鍾美(19・9・)

福島 俊二(19・12・14)

平 芳作(20・5・)

宮間 利和(20・5・24)

中野 直(20・7・29)

北川 甚吉(20・8・7)

武田 守平(20・9・19)

櫻井 敬藏(20・9・17)

千葉県 武藤 俊子(20・10・1)

愛知県

和歌山県

広島県

山口県

高知県

今西 清

氏原 憲二

小笠原光豊

川久保蝶子

桑名 龍吾

谷脇 英樹

西本 浩

福井 照

宮崎県 杉尾 舜平

功刀 正文

鶴飼 爵優

阿万 卓也

竹澤 慶展

松尾 裕

氏原 正就

川久保秀水

國藤 孝志

小松 潔

津野 健一

東川 正弘

山本 圭二

渡辺 健

茶木 哲義

会報「特攻」第77号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、
謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

頁	段	行	誤	正
1	4	22	献吟 × 逢坂電信	逢坂竜静 ○
31	3	7	戦車隊の × 現職	戦車隊の ○ 現職
32	1	10	村田勤吾 ×	村田謹吾 ○
38 37	1 1	10 6 2	八巻通泰 × " "	八牧通泰 ○ " "
39	4 3	6 29	汽笛 × 御好意 ×	汽笛 ○ 御厚意 ○
40	1	13	光り ×	光 ○

「ご投稿について」のお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合は、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛とさせていただきます。

記

〒105-0014 東京都港区芝
2-5-19 T&Aビル4階

(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協
会事務局

電話 03-5730-1101
FAX 03-5730-1101
6